556

34

始

學生の見た亞細亞とこれからの亞

556
34

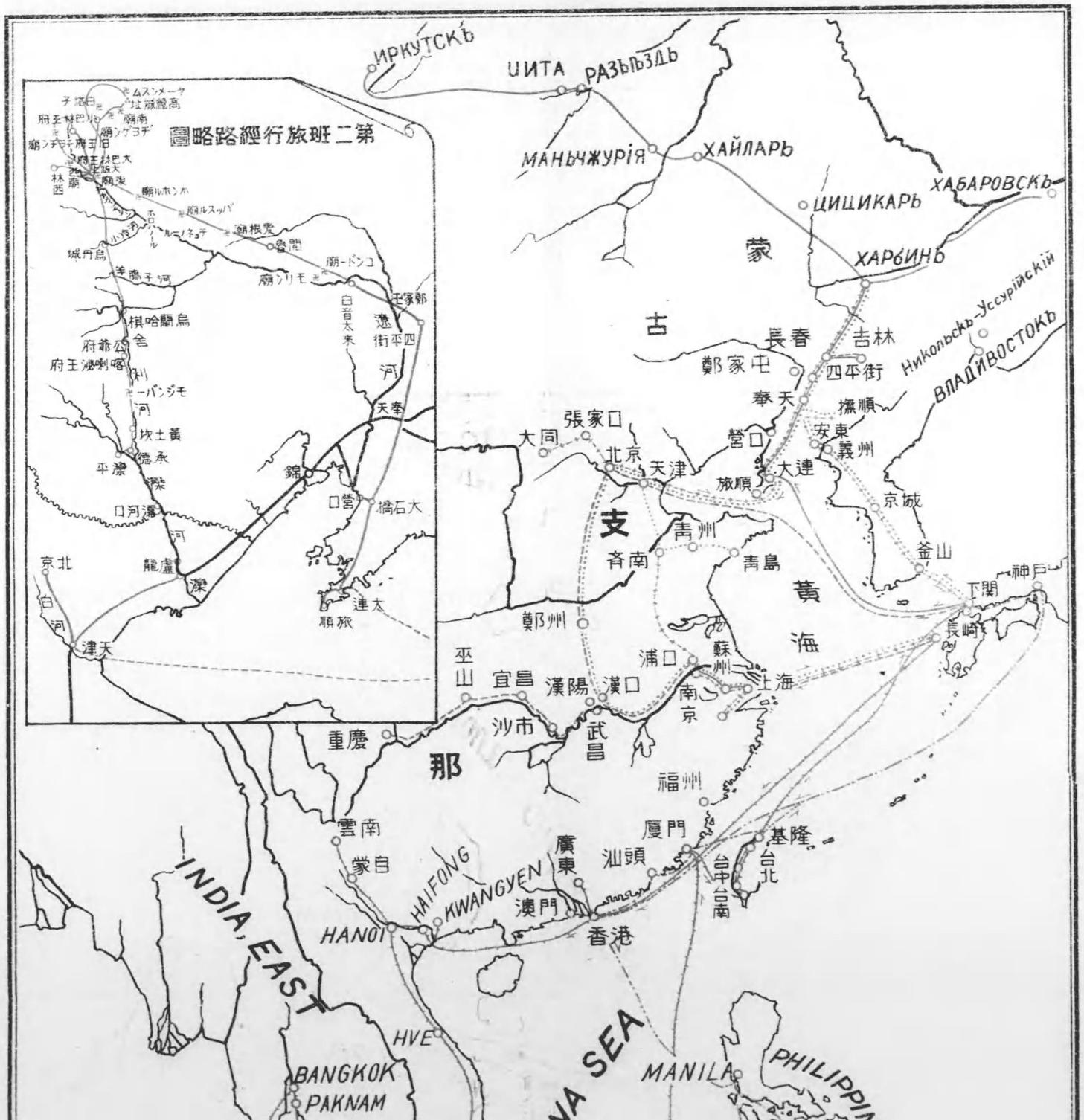
學生の見た亞細亞とこころ

大正
15. 6. 5
内交

□亞細亞學生會が、夏期休暇を利用して、會員(東京都下各大學學生)を亞細亞各地に派遣するの擧を起しまして から、既に六年であります。大正十四年度も亦、十九人の會員を選んで、亞伯利亞、蒙古、中部南部支那及び南洋方面に派遣致しました。本書收むる所は、右旅行班(十六名)の報告であります。

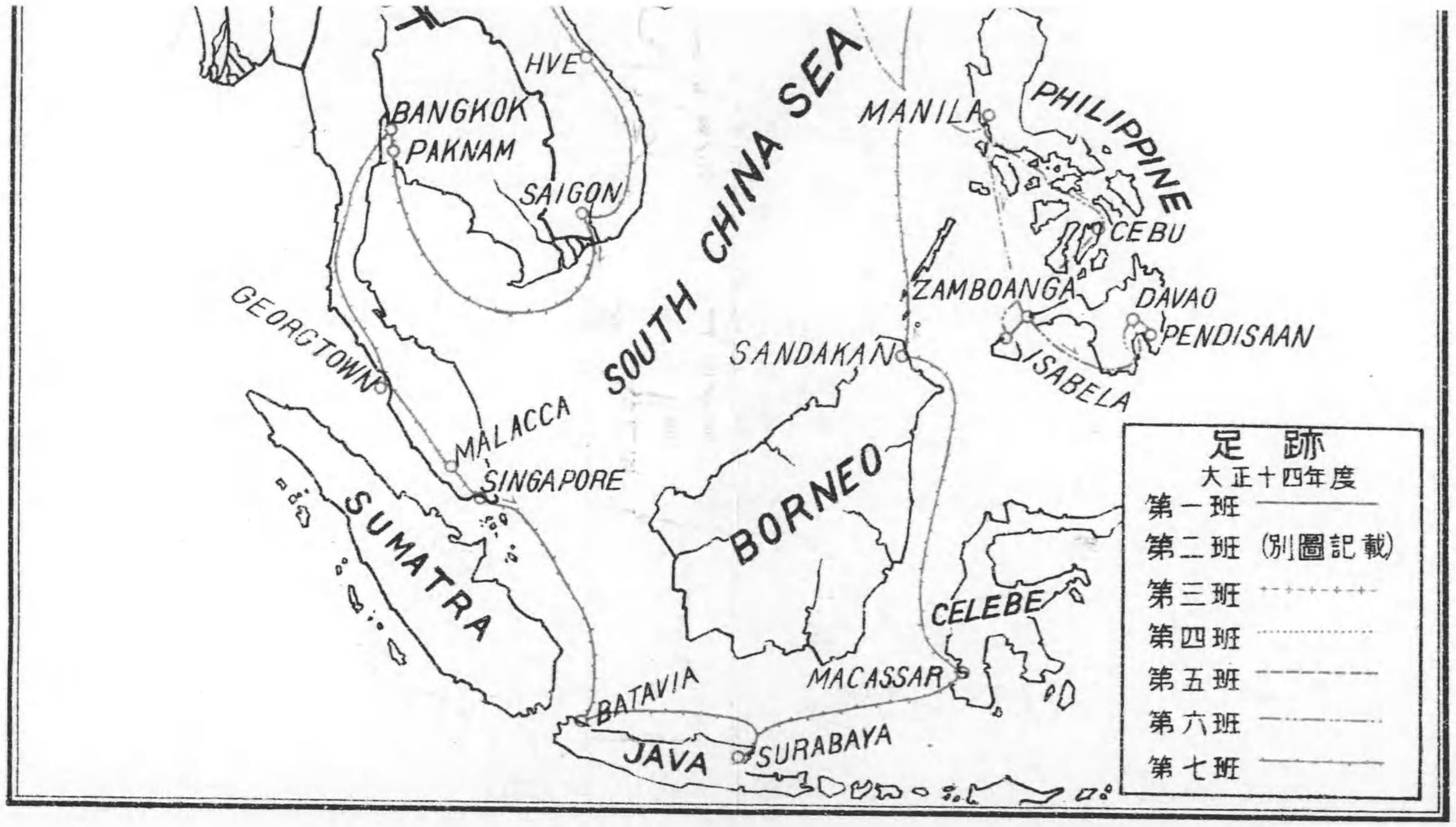
□十四年度は、卷頭地圖に示した如く、旅行會員を七班に分ちまして、第一班は、滿洲を經て遠く西伯利亞內地へ、第二班は、內蒙古の奥地へ、第三班第四班は、夫々揚子江及び黃河を中心として中部支那地方へ、第五班は、三峽の險を遡つて四川省方面へ、第六班は、主として比律賓、第七班は、印度支那より新嘉坡へ――學生の旅行としては、可成り思ひ切つた大旅行を試みさせたのであります。幸にして、一人の落伍者もなく、各自の見學を遂げて歸國致しました事は偏は內外諸先輩が御後援の賜でありますが、一方には、學生自身の眞摯な努力と、不撓の元氣とを、認めてやつて戴きたいのであります。

□文中を御覽になつても解ります通り、學生達は、本會旅行班の特色として、極めて貧乏な旅行を續けて居ります。而して、貧乏な旅行なるが故に、常に各地の一般の民衆と接觸して居ります。此の點に於て彼等は、一等車に乘りホテルに泊つて、大名旅行をなさるゝ多數旅行者とは、自ら撰を異にする何物かを得て歸つたことを信じます。又彼等は、いづれも年若い學生であります。何等の束縛もなく、何等特別の使命も負はされて居ない自由なる旅行者であります。遠慮會釋のない觀察者であります。彼等の眼に映つた物、心に感じた所は、其當不當は姑く措いて、これ亦必ずや、一般旅行者のそれと趣を異にするものがあらうと信ずるのであります。



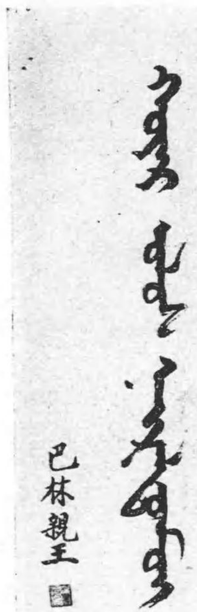
第五班は、三峽の險を遡つて四川省方面へ――學生の旅行としては、可成り思ひ切つた大旅行を試みさせたのであります。幸にして、一人の落伍者もなく、各自の見學を遂げて歸國致しました事は偏は内外諸先輩が御後援の賜でありますが、一方には、學生自身の眞摯な努力と、不撓の元氣とを、認めてやつて戴きたいのであります。

□文中を御覽になつても解ります通り、學生達は、本會旅行班の特色として、極めて貧乏な旅行を續けて居ります。而して、貧乏な旅行なるが故に、常に各地の一般の民衆と接觸して居ります。此の點に於て彼等は、一等車に乘りホテルに泊つて、大名旅行をなさるゝ多數旅行者とは、自ら撰を異にする何物かを得て歸つたことを信じます。又彼等は、いづれも年若い學生であります。何等の束縛もなく、何等特別の使命も負はされて居ない自由なる旅行者であります。遠慮會釋のない觀察者であります。彼等の眼に映つた物、心に感じた所は、其當不當は姑く措いて、これ亦必ずや、一般旅行者のそれと趣を異にするものがあらうと信ずるのであります。


HVE
BANGKOK
PAKNAM
SAIGON
SOUTH CHINA SEA
MANILA
PHILIPPINE
CEBU
ZAMBOANGA
DAVAO
PENDISAAN
ISABELA
SANDAKAN
GEORGTOWN
MALACCA
SINGAPORE
SUMATRA
BORNEO
CELEBE
MACASSAR
BATAVIA
JAVA
SURABAYA
足跡
大正十四年度
第一班
第二班 (別圖記載)
第三班
第四班
第五班
第六班
第七班

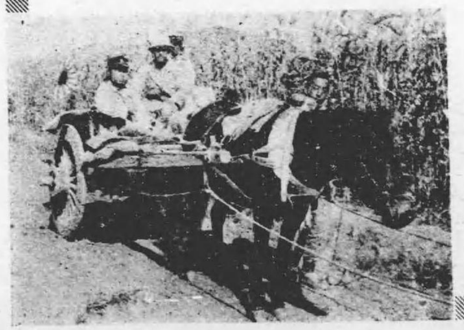
(ニ)　内閣　子爵　澤　誠　途　首

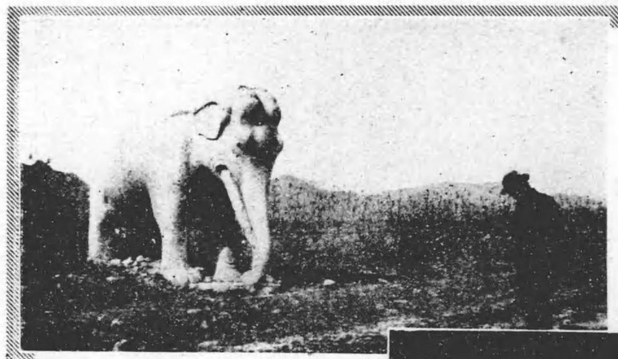
（左）巴林王筆蹟



巴林親王

（上）灤河下り
（中）砂漠の駱駝
（下）車上の日章旗





（上）明陵の石獸
（下）風箱峽（三峽ノ一）

（中）雲崗の石佛

(上) フィリッピンに舟を浮べて
(中) スィンガポールにて
(下) ダバオロの椰子園

456-34

卷頭言

東洋協會大學教授　宮原民平

神は自ら助くる者を助くとは、古人にばかり適用し得る言ではない。神は自ら助くる國民を助け、自ら助くる民族を助ける。現今、白色人種が、全世界に於て壓倒的優勢の地位を占めたことは、彼等の努力の結果であつて、決して偶然でも僥倖でもない。吾等が、白色人種から先づ學ばねばならぬことは、その宗教でもなく、その教育でもなく、その政治でもなく、その經濟でもなく、その他一切の所謂白人文明の所産でもなく、實にたゞ一つその自ら助くるの氣魄である。空しく切齒扼腕して白人の横暴を憤慨し、徒らに追從模倣して白人の文明を瞻仰するは孰れも迂愚の極みだ。日本は外國に依頼しては何事も成し遂げられぬ。亞細亞人は歐米人に依頼しては復興の望はない。誠に彼歐米人が曾て實行して吾等に示したるが如く、吾等は吾等の努力を以て、吾等の奪はれたるものを取戻し、吾等の地位を確實に取得せねばならぬ。

亞細亞復興は亞細亞青年の使命である。吾等は先づ亞細亞の狀況を知らねばならぬ、先づ狀況を知つて、然る後に復興を策せねばならぬ。亞細亞學生會の會員が、年々東洋各地に視察旅行をして、着々研究を進めてゐることは、殊に重要なる意義を含む。今日一般の青年は、遠い歐洲の事を知る半分も鄰りの支那や

シベリヤの事を知らない。日本人としては、アメリカの日本移民排斥よりは、支那の日人日貨排斥の方が實質に於て、遙かに問題が大きく且つ深刻であるが、米國の排日法案に興奮した日本人が、支那の排日に對しては頗る冷淡である。この冷淡といふことは、平靜といふ意味ではない、理解ができないので、ぼんやりしてゐるのである、斯くの如く亞細亞の狀況に盲目で無理解な多數の國民をして、眞に覺醒せしむることもまた亞細亞學生會の一任務ではあるまいか。吾等は徒らに歐米直譯の勞資問題等にばかり沒頭せず、深く亞細亞民族の現狀に顧る所あるべきである。

目次

卷頭言……東洋協會大學教授　宮原民平……一

第一班

『ルースキー』……早稲田大學　村田精三……三

大陸の零圍氣に立ちて……明治大學　坂田稔……一四

私の目から見た露西亞人と支那人……早稲田大學　伊藤正義……三一

第二班

駱駝の足跡……東洋協會大學　中島信一……四三

亂舞歌……東洋協會大學　岩崎義三郎……六三

偶言偶語……早稲田大學　川原一男……八三

第三班

支那を旅した男の手記から……帝國大學　大槻文平……九二

現實と印象……東洋協會大學　宮崎專一……一〇七

支那九省の監獄を訪ねて……明治大學　山本圭四郎……一二五

第四班

朝鮮滿洲を經て黃河流域に遊ぶ……帝國大學　野村市治郎……一四四

鄭州を經て長江を下る……帝國大學　渡邊次郎……一六六

第五班

三陝四川の遊記……慶應義塾大學　福長哲彦……一七八

第六班

南國記……東洋協會大學　橋田外次……二〇〇

フィリッピン見たまゝ……慶應義塾大學　丸山辰雄……二三九

第七班

南洋旅行……帝國大學　薛永魁……二四二

馬來半島を中心とする護謨栽培に就て……東洋英語大學協會　宮田良藏……二六八

目次終

欠

第一班

『ルースキー』

早稲田大學　村田精三

神戸―大連―奉天―長春―ハルピン―滿洲里―ハルピン―奉天　安東縣―京城―釜山―下關

私はかうした容貌を知つてゐる。それには少しも埃及風なところはない。白い低い額、出張つた頰骨、短かい眞直な鼻、綺麗な口と白い齒、柔かな口髯にちゃれた顎髯、すつと懸け離れた二つの大きからぬ眼、そして頭には眞中から分けられた髮を戴いてゐる。……あゝ、それは汝である、カルプである、シドルである、セミョレである、ヤロスラアフやリヤザンの百姓、我が同國人、血あり肉ある露西亞人である！　汝もまたスフィンクスの仲間であるか？　汝も亦何たか言はうとするか？　然り、汝も亦スフィンクスである。そして汝の眼、光澤の無い霧んだ眼もまた語つてゐる……そして汝の言葉もまた無言で謎のやうである。

然し汝のエヂプスは何處にゐるか？　惜むべし！　汝のエヂプスとなるためには、百姓服を着けただけでは十分では無いのである。おゝ、金露西亞のスフィンクスよ！

――ツルゲエネフ――

一

三階になつてゐる汽車は、黄昏の北滿の原野を通して、西へ西へと驀進を續ける。大陸の夏のあくどい

欠

暑さが、この旅を一層苦しいものとする。赤い陽光がギラギラと黄砂の上に炎へ、列車の中は釜の底のやうに息ぐるしく、人々は皆、油汗を浮かせて、籠の中の魚のやうに、窓の下に横はつてあへいでゐる。

乘客は僕等四人を除いては、殆んど露西亞人ばかりで、その鞣皮の匂と、ワキガと香水と混合した女獨特の臭とが、むつと胸を押しつける。汽車が停車場へ着く度に、露西亞人の家族が幾つもプラットホームに集つて來て、キヤツ〳〵笑ひはしやぎながら、頻にハンケチを振る。大陸の死の様な幾月かの冬の脅威から解放された彼等は、かうしてこの輝かしい夏の日を歡喜の中に享樂するのだ。

日が地平線に傾きかけた。涯しない原野は一面に濃橙色に燃え立つ。高粱の畠も、柳の木立も、ポプラの並木も、水も、空も。

展望台に出た。官僚くさい服裝に包まれた赤ら顏の偉大な男が僕に後から何か話しかけた。わからないと手を振つたら彼は急いでポケツトから露支會話の本を出して示した。僕は嚴然として、「僕は日本人だ」と云ふと彼はニヤツと笑つて逃げる様に中へ入つて往つた。僕は彼等が如何に日本人に敬意をはらつてゐるかを最初に知つた。然し彼等が日本人を、金を持つてゐるが故に尊敬するのだとは歸る迄知らなかつた。

日が沈みつくして、西の地平線に淡いトワイライトがゆらめいて、車室には薄暗い電燈が點つてゐた。何時の間にか僕は前に居る露西亞人と仲間になつてゐた。隣に席を占めてゐた女が、籠から泣き出した赤

坊をとり出して子守唄を小聲で唄ひ出した。母は軟かい唄のリズムに睡入つた子に二三度發作的な接吻を與へて又籠の中へ入れた。

停車場へつく度に車室は急に噪しくなる。とある驛で二十三四になるブロンドの女が入つて來て僕の前に席を占めた。少しすると「あなた何處へ」と怪しい日本語で話しかけた。「私は日本が大好きだ、ぜひ、一度日本へ行つて見たい」といふ意味の事をロシア語交りで話した。今度は日本の唄を知つてゐると言つて、カチューシヤ可愛いやを唄ひ出した。不思議に傍に席を占めて居る二三人の娘も相和した。僕も唄つてやつた。

彼等は一寸も口を置かずに身體を動かしながら話す。然しうんとはしやいだ後にはきつとぼんやりした光のない眼を一點に据ゑながら何か考へ込むのだ。何を考へてゐるかわからないが必ず彼等はさうした。それは自分には歸る迄解く事の出來ない謎であつた。

夜は余程進んでゐた。汽車は星明の平原を尙も西へ西へと旅を續ける。頻にはしやいでゐたブロンドも赤い絹布を卷た娘ももう深い眠に落ちてゐた。全く音の絶えた原野には重ぐるしい生命の振子の如き汽罐の音のみがひゞく。とある小驛で突然止つた。云ひ合はした様に皆ねむい眼を見開いた。どや〳〵といかめしい顏をした二三人の車掌がカンテラを手に提げながら入つて來た。かたすみから嚴重な改札が始めら

れた。車掌が僕の上に寢てゐる娘の足をひつぱつた。彼女は怒つて下の母がもつてゐると怒鳴つて何かブ〳〵言ひながら又寢直した。車掌が出て行つた。又車室には靜寂が甦つた。夜は深い。僕もすつかり親しい心になつて彼等と一緒に眠に落ちた。

二

かうして僕等は露西亞人の世界へ運び込まれた。少し彼等と接觸し彼等を段々理解してゆくに連れて、非常な親しみが生じて來た。

露西亞人といふと僕は赤色よりも寧ろ灰色を想像する。光のないそれでゐて底力のこもつた眼、しまりのない無表情な身振、抑揚の少い言葉、……如何にものんびりして大陸的である。呑氣で、飾氣もこしらへもなく、又鮮かさもなければ鋭さも無い。それでゐてどことなく深みと底力に富んでゐる。正に灰色である。

僕は先づ彼等の無攝生なのに驚かされた。彼等は全然貯金といふ事をしない。一週間で使ふべき金は三四日で浪費し盡してあとは飲まず喰はずで居るのだ。愈々どう仕樣もなくなると悠然と働き出す。その呑氣さは確に日本人の樣なせゝこましい生活をしてゐるものには驚異であり疑問である。

又彼等程歡樂にあこがれる國民もないだらう。如何に生活苦に追はれても土曜日や日曜日には公園へ行

つて夜明け迄踊り通す。人はロシア街を夕方通るなら幾組もの家族が相携へてぶらついてゐるのを見受けるだらう。

平日家の中に居ると身體具合がわるくなつて了ふからどうしても一度は人込の中を歩いて來なければ氣がすまないとある人が云つて聞かした。僕は狂暴な冬の脅威のもとにある彼等の生活を想像せずにはをれなかつた。何と輝かしい太陽や青葉で埋められた世界が彼等には樂しいものだらうか。

ある晴れた午後だつた。僕はジャゴナリナヤ街からロシアの子供の御する馬車をかつて、松花江（ソンガリー）に遊んだ事があつた。夏らしいレストラーンの張出しが見えて、白ずくめの裝をこらした妖艶なロシア美人が、クリームをおいた小卓を前にして、道行く人になまめかしい視線を投げてゐた。

眞赤に塗つたボートに乘つて對岸へ渡ると川邊に水泳場が設けてある。こゝには老若男女のロシア人がまるで子供の樣に無邪氣に砂の上や水の中を駈け廻つてゐた。水にぬれた金髪が美しく光る。薄い水泳着一枚つけた女が熱日を全身に浴びながら、眞白な大きな肉體をだらしなく砂の上に横たへてゐる。女の金切聲、水のはねかへる音、高らかな笑聲、……大した賑ひだ。上にはクリムやクワスを賣るかけ茶屋が幾つもならんで、中では若い男等が眞晝中なのに女にたわむれながら强烈なウォーツカをあふつてゐた。夏の彼等はかうして朝から晩まで遊び狂うてゐるのだ。

彼等はその強い慾情の動く儘快樂の淵へと突入して行くのだ。例へばそれはあの廣漠たるシベリアの原野を駈けるトロイカの如く止まる事を知らない。その時は彼等の眼中には何ものもない、たゞ感ずるものは止む事を知らぬ慾情の發作丈である。

前少佐の妻で今カッフェーの女給をしてゐる女が次の樣な事を云つたさうだ。「昔は昔だし、今は今だ。未來は勿論わからないが又どうだつていゝ。たゞこの今さへ美くしくて樂しくさへあればそれで十分だ。私は過去を一切考へない事にしてゐる」。—何と徹底した人生觀だらう。然しそれも終らねばならぬ。

何日か彼等はふと何かの衝動を受ける事があると飜然として自己と現實を否定する。彼等は斷然と醜い過去の絆を切り去る丈の勇氣を有してゐる。その時は彼は既に過去の彼ではない、全く甦つてゐるのだ。人生の洗禮を受けてゐるのだ。

然しそれは決して彼等の技巧ではない。それはあの廣い大平原と、沈欝な穹隆と、深刻な自然とに裏づけられた國民性の飾なき、正直な表現である。否表れそのものにすぎぬ。

そこにロシア人の偉大な馬鹿さ、素朴な藝術味が存在してゐるのだ。

誰か露西亞人を「偉大な馬鹿」と稱した。實際よく表はしてゐると思ふ。飾氣がなく、馬鹿正直で素樸で、少しも怜悧でない。

ロシアに表はれた偉人といふ偉人、パクーニンにしろ、トルストイにしろ、クロポトキン又はゴーゴリにしろ、皆かうした特質を多分に有してゐる。小ざかしい人間から見たら確に馬鹿である。

馬鹿正直だから、考へた事、欲した事を何の躊躇もなく實行する。だから歐洲で生れた思想が露西亞へ入るに及んで一轉して強い實行味を帶びて來る。然も實行するや、それは歡樂を追ふと同樣一直線である。徹底する。

突然露西亞に大暴風が起つた。偉大な馬鹿の群が猛然と動き出した。活躍を始めた。

そこには彼等の行手を遮る何物もない。たゞ彼等は進むだけである。かうして彼等は瞬く間に、世界の怜悧な人々を壓倒する程などえらい仕事を爲し遂げた。

三

ロシア人に接してゐると實際かうした氣分を到る處で彼等の中に發見する事が出來る。これが又僕のひきつけられた最大原因であつた。商店へ買物に行つても或は道で馬車をやとつても、支那人に對する樣な猜疑心は全然彼等の態度で消されて了ふ。

雨の降る日だつた。僕は大急ぎで御者へ金を拂つて歩いた。すると後から頻によぶ。行つて見たら四十錢(ソーロックカペーキ)を返した。僕は十錢と五十錢とを間違へてやつたのだ。

然し北滿にゐる露西亞人は實に憐むべき生活を送つてゐるのだ。ナハロフカへ行くと十二三位迄の子供は大抵裸足で歩いてゐる。女の兒でも裸足で歩いてゐるのを幾らも見受けた。家も狹苦しくて汚い。こゝは殆んど亡命者ばかり住んでゐるときいて尙驚いた。

それでも若い女は外へ出る時は美く化粧して出る。喰はなくても女は飾るときいた。彼等の多くは御者や或ひは小使、又は自由勞働をしてゐる。

且ては富と權力の殿堂の中に華かな生活を送つてゐた娘や人妻で今生活苦の爲に北滿で春をひさいでゐる女が幾らあるかわからない。

停車場へ出て朝から晩まで馬車の客を呼んでゐる背の高い髯深いロシア人がゐる。彼等は曾て帝政時代には中將だつたさうだ。それが突然おこつた社會形式の變化の爲に、故鄕を離れてかうして道行く人に乘車を乞ふてゐるのである。然し彼は日曜日には、貧しいながらも服を着かへ胸に昔を偲ぶ勳章を下げて、教會へ行くさうだ。僕はそれを聞いて涙ぐましくなると同時に、日本人として感謝しなければならない事を強く意識せずには居れなかつた。

四

さうしたロシア人の中で僕は子供が最も好きだつた。共產黨の小學校では、天氣のよい日は全部裸足で坊主頭を日にさらしながら野外教授を受けてゐる。學制は、第一階と、第二階とにわかれ、第一階は修業年限が五ヶ年で日本と同じく八歳で入學して十三歳で卒業する。第二階は十三歳から十六歳までの四年生を收容する。教育は家庭的職業的性質をおび、勿論授業料はなく、貧しい兒童は一切の學用品や又食事も無料で支給されるときいた。ロシアの少年は如何にも子供らしく、快活で然も卒直で飾氣なく又非常な自由な心をもつてゐる。子供は大人にもおとらぬ程の怜悧さを有してゐるさうだ。

よく十歳位の子供が客馬車を御してゐるのを見受ける。勿論それは經濟的關係からも來てゐるかも知れぬが兎も角彼等は一人前になつて立派な働き振を見せてゐる。彼等を好きになつたのには一寸とした話がある。

哈爾賓行の急行列車が、死に切つた原野の夜の靜寂を破つて東へ休み無い進行を續けてゐた。晩夏の弦月が窓わくに靑白い光をてり返して、窓から眺められる月あかりの原野には、死骸の樣な土人の土小屋が黑く立つてゐた。とある驛に着くと、支那人等がカンテラをともして瓜を賣つてゐる。僕は渴を醫やす爲に十箇程その汁多い果物を買つて來た。展望臺へ上つて來るとそこに立つてゐた少年が、「一つ幾らか」と尋ねた。僕は發車が間もないといふ口實で此みすぼらしい少年に半分わけてやつた。汽車が動き出した。

僕等二人は展望臺に立つた儘むしや〳〵喰ひ始めた。彼は半袖のルバーチカ一枚で脛から下は裸足で、月あかりに見る彼の細い顏は氣味惡い位靑白かつた。一つ喰ひ終るとポケツトから煙草を出してすゝめ、自分もさも馴れ〳〵しく吸つた。それが如何にも無邪氣で可愛らしかつた。色々と苦心しながら會話を始めた。なんでも彼は滿洲里から、一年も逢はないハルビンの母を訪ねて行くのだつた。さう云つてさびしい笑を浮べながら胸のポケツトから大切さうに母の寫眞をとり出して、「私の母」と云つて見せた。よくわからなかつたが父が彼にないといふ事だけは知つた。僕は色々と彼の身の上を想像して見た。そしてこの殊勝なロシア少年が心から可愛らしく思はれた。

ハルビン驛で別れた切りどうなつたかわからない。

僕の短い旅行中におこつた彼等に關する小さい事件を印象を、何の組織も方向もなく書連られた。
秋の立つ事の早い彼地の八月末の夜の冷さを感じながら汽車で彼地を去つたのがつひ昨日の樣に思はれる。
僕のこの印象記ともいふべき小篇が隣の大陸に住んでゐる彼等をいくらかでも現はす事が出來たとしたら、それで僕は滿足である。

大陸の零圍氣に立ちて

明治大學　坂田稔

門司—大連—奉天—新京—ハルビン—チヽハル—興安—海拉線—滿洲里—ヤルムスカヤ—ヂタ—イルクーツク—滿洲里—ハルビン—黑河—吉林—四平街—奉天—大連—門司

一、蒙古の旅

懷しい列車と別れてから幾日かの旅寢
蒙古の原始生活に憧れて
私は今呼倫貝爾の原頭にと急ぐ
茫々たる無限の平原の中で
前には雲の彼方に消へる廣漠たる地平線を眺め
後にはさながら巨濤の如く蜒蜿として隆起せる
淡紫色の高原を負ひ
亦しても私はさびしい曠原の旅路を急ぐ

灼熱せる八月の太陽は地の底迄も照りつけて虫の聲さへもきこえない
おゝ！　この烈日の下に靜かに息ひ眠る平原よ
蓁々たる雜草は暗綠の葉末より熱風を吐いて居る
無窮無邊の彼方よ
其處は私の如く世界を失なつた人間のさまよふ所ではないだらうか
友よ！　私は其處に、
煩惱の影消えし清き神の姿を感ずる
疲勞と飢にしひたげられし私の體と魂は
大地の一角より進む事さへも出來ない
茫々たる地平
西の方たそがれの日輪は暗紅色に輝いて居る
陽は沈む
大陸の夜は嚴冬の樣に寒い
物凄い暗黑が大陸を包んだ時

投げつけられた花火の樣に
幾千萬の群星は空一面にまたたいてゐる
この淋しさこの苦しさこの嬉しさこの悲しさ
疲勞せし神經を貫く瞑想はまどろむ暇さへも與へない
懷しい弦月は微笑み乍ら私をのぞいて居る
丁度慕しい故里の父母の樣に
やがて私は本能的慈愛の眠に陷る
雜草の中で暫し假寢の夢を結びし私は
地上を未だ夜の影の匍ふ間に
又しても曠原の旅路を急ぐ
見よ!!　東方漠々たる曠原の彼方
黎明の室は芙蓉色に染め出されて
日の出を待つ曠原の空はプリズムの樣に清い
呼倫の彼方、私は其處に永遠の路を見る

おゝ！　揮身の鮮血は新しく湧きかへつて來た
私は永遠の道を漂泊らふ

二、馬賊

滿蒙と云へば第一に吾人の念頭に想像するものは萬里無味荒寥たる平原に相違ない。この無味荒寥たる平原を想ふ時亦必然的に連想するものは、所謂滿洲の「馬賊」である。その結果滿洲と云へば殺人掠奪爭鬪の巷なるかの如くに早合點をなす輩が多い。が、今私をしてこの誤解せられし滿洲のため、些か述べさしめるならば、滿蒙に働く人々はすべて馬賊にして、而して馬賊なる者は一人も無しと斷言する事が出來る。換言すれば、滿蒙は、恐怖不斷の修羅場であると同時に、藐藐夢遊の樂天地である。何となれば、本土より來住した良民が、其境遇の如何によつて、一夜作りの强盜殺人と化するのも、又馬賊と云ふ事ができるからである。即ち、滿洲の隨所隨所には內地の都市に劣らない大都市が無數に發達して居るのを見る、或は此等都市を襲ひ、或は列車沿線に集つて列車より金品を强奪するの類も、亦等しく馬賊と稱し得るのである。けれども、退いて考へて見れば、是れ即ち內地に於いて常に三面記事を賑はす殺人强盜の類に外ならぬ。眞の所謂馬賊なるものは、此の如き微々たる組織微々たる小細工的な行動は敢てしない。內地に於いても、個人個人の爭鬪は、常に却つて小心翼々たる臆病人の間に行はれ、眞に勇俠を以て任ずる大親分となれば、身を大磐石の如くにかまへ氣を大海の廣きに置いてゐる。これと同じく、大陸に於ける眞の馬賊は、或は山間の僻地により、或は大都市の目貫きの場所に店舗を構へて、堂々と生活して居るのである。

私はこの馬賊を區分して、

(一)大隊を組織して事をなす者
(二)小隊を組織して事をなす者
(三)旅行者に對し個人的に害を及ぼす者

の三種とする。此處に注意して置きたい事は、この(一)の場合に於て最初は大隊に組織せらるゝも、又旅行者等に對して各自分裂行動的に、加害する場合があり、これは、其の賊自身の性質境遇によるのである。

私は(一)(二)の場合を稱して此を眞の馬賊と云ひ、(三)の場合を指して强盜の類となす。或は特に支那强盜と稱してもよいかもしれぬ。私の說くものは大體に於いて大隊を組織して事をなす者で、斯ゝる輩は多く、國の再興、或思想の傳布、義俠心より出でたる弱者助力を目的としてゐるのである。旅行者に對し個人的に害を及ぼす者の輩に至りては唯金品目的女人目的の類が多い。彼等の行動には何分の根底なく、その方法も、馬匹を用ひずして店棧、旅人、列車等を襲ふのみである。當方に度胸さへあれば、敢て恐るゝに足らぬ。彼等は高粱の繁茂期となれば、自己等の書入時なりとして、橫行掠奪をほしいまゝにするけ

れども、これは皆私の第三類に屬するものである。

第一、二類の馬賊團には奉直戰の落武者が多く、官憲に双向つては其勢侮るべからざるものもある。或は又、花恥しき女頭目の小賊を叱咤するもあり、又、仁義軍の各地相呼應して跳梁するもある。便宜上吉林省及奉天・黑龍兩省に活躍する賊團の繩張を分類して示さう。

頭目	繩張	部下
大清國	吉林	三五〇〇
大清樂	磐石	五〇〇
紅字兒	樺甸	三〇〇
大浦德牛	道伊	四〇〇
大中宇	滯江	四〇〇
天林子兒	奉長	五〇〇
双龍順		
野猫		
長山		
常好山		
長勝		
以上仁義軍		
占海	農安	二〇〇
中		
德子	錦蘭	六〇〇
草飛		
上		
土陽	長嶺	一〇〇〇
老五	常	八〇〇
老六		
(以上吉林省)		
長江		二〇〇
江東		五〇〇
龍山		六〇〇
劉放親		一五〇
平北		三〇〇
公平		三六〇
青山		二〇〇

双洋	二七〇
滿天飛	三〇〇
掃北	一五〇
天勝	三〇〇
占山	一〇〇
天勝應	二五〇
靠山	二五〇
紅勝	二〇〇
戰北	二五〇
得勝	三五〇
天龍	二〇〇
來邊好	二五〇
好支	五〇〇
老黑山	一六〇

(以上東支沿線)

趙殿英	鳳城岫巖
大英子	露式長銃一五〇挺
吉星	銃六〇〇挺
天幣心	機關銃三挺
北來	機關銃二挺
司令	三〇〇
天下樂	二五〇

(以上外蒙國民軍)

押龍(女)	膽榆 二〇〇
龜龍(女)	膽栓 七〇〇
黑龍(女)	開通 三〇〇
駝龍(女)	農安・駝虎・野狼・懷德 一〇〇〇
棍輸	突泉 二〇〇

君子人……鎭　來……三〇〇
双江……梨樹双山……二五〇
（以上内蒙古省）
七　國……二五〇
中　華……大　賚……二五〇

東　林……三〇〇
海　龍……二〇〇
無名頭目（三十餘名）
鐵麗、綏化、巴彥、海倫、通化……二五〇〇
（以上黑龍江省）

吉　林　省……八二〇〇名
東支沿線……五八四〇〇名
外蒙國民軍……八七〇名
奉　天　省……二九五〇〇名
黑龍江省……三五〇〇名

抑、馬賊なるものの起原を考察するに、漢の殘黨が公主嶺附近に一團となり、其處を彼等の本陣となしてひそかに漢朝の復興に力を用ひたるも、事遂にならず、結局生活に窮して掠奪を始め、やがては爭鬪殺人を行ひ、遂に一種の賊的氣風を形成するに至りたるを最初とするらしい。今彼等の國別統計を調すれば現在に於いては支朝日露各民族が左の如き比を示して居る。

さりながら、現今の支那馬賊は、その境遇上より勇猛活潑の意氣はいつしか失ひ、淫蕩歡樂の巷に沈溺し女婦の强迫强淫各地に行はるゝに至り、眞に男子の本領を守り、正義人道を標榜とする輩――所謂仁義の道を尊ぶ仁義軍なる者は、稀に見る所となつてゐる。

又朝鮮馬賊なる者も、主として排日鮮人、赤化されし鮮人、性不良なる鮮人卽ち不逞鮮人の類にして、多く頑迷無智なる徒の集團であり、徒らに勞農赤化の風に染みて、獨立的大野望に燃ゆる徒のみ多きを見る。

日本馬賊所謂男と稱する者の中には、古くは、花大盡花田中佐初め、川島浪速氏、逸見十郎太氏、逸見勇彥氏、現今にありては彼の天樂、天鬼（薄益三氏）及び白龍（薄定次氏）、畠山氏等があり、その義俠的熱血は、屢〻日東健兒の爲め萬丈の意氣を示してゐる。而して露人不良の徒も、馬賊と云ふ程ではないが、赤兵の一部に、支那馬賊の群に投じて松花江及び興安嶺の角に蟠り、密輸出入及び掠奪の行爲を敢へてする

ものがある。

馬賊の最も多住せる地點を示せば、

(一)地形が彼等の活動に非常なる便宜をあたへる地點

(二)報知機關の不完全なる地點

(三)警備方法の杜撰なる地點

(四)日支官憲連絡不充分なる地點

(五)禁制品密業者の多住の地點

等である。彼等の日常生活たるや、命知らず、大膽不敵、無茶無暴を以て其生命となし、一度討伐隊の双向ふ所となれば忽ちにして解散し、金品盡き生活に窮すれば亦集合するのである。大隊的組織の馬賊は山間の暗黑面で原始的生活にあまんじ、小隊的組織の馬賊は馬車引き又は軍人・警官を裝ひ、朝の軍人は夕べの賊となり夕べの賊は朝たの警官となるもの、頗る多きを聞くのである。

以上に於いて馬賊につきその大略を記した。あの戰亂たへまなき中國の地に於いて、三軍を叱咤し、中原の鹿を爭ふ、華かなる彼等の舞臺姿もかくして養成されるのである。

三、露西亞について

(1) 勞農露國の現在

傑人ニコライレーニンの所謂共產主義赤色に染める者は、今や結黨員五千餘萬に上つてゐる。ところがレーニンの逝去以來、資產階級は勿論苟も國家の中堅と目せらるる中產階級さへも、沒落悲運の狀を至せるを見る。彼の共產主義の實施せられて以來、國民悉く貧民階級に低落せる一方、世界各國は依然資本主義に則るを以つて、彼等の主義政策には、種々の矛盾を來し、理想と現實に雲泥の差を生じてきた。そして彼等の中には、ひそかに其の不可不能を悟りながら、墮勢的に政策に抗するの勇氣を失したものと、速に政策を改善せんとして努力に汲々たるものとがある。

空漠たる一大平原大西比利亞を有する露國も、その產業は歐米列國に比して比較的振はず、加ふるに生產品の程度は頗る幼稚で、寧ろ、原料品のみが徒らに豐富なるを見るのである。露國は元來農業國と稱せられてゐるが、革命以來地主はなくなつて、小作人のみとなり、其小作人は、國有土地耕作權を有してゐるけれども、其の耕作地たるや面積著しく狹隘にして、辛じて彼等の生活を維持するに足るのみ。而も一方農產物以外の物價は供給不足によりて暴騰した爲、一般農民の悲況は、實に想像に余りがある。此結果、今や、勞農露國の根本主義たる產業機關の國有國營主義は、放棄するの已むなきに至つて、漸次土地の貸付が行れ、土地私有の傾向漸く濃厚とならんとしてゐる。商業も亦個人商人漸增の傾向があり、最早早晩

あらゆる方面に、資本主義を加味せざるを得ざる筋合とならうとしてゐる。彼のレーニンが一生の心血を濺いで建設したマルキズムの殿堂も、かくして十年ならずして、新經濟政策の名の下に、破壞改築せられんとし、資本主義の空氣は日に日に濃厚を加へつゝあるのである。

要するに之が爲であらう、露西亞當局が國內の眞相を內外に知らしめざる樣、十分の努力を拂つて居るのみならず、自國の復活と其の勢力の偉大なる事並に世界赤化の宣傳に、日も是れ足らざる有樣なる事は始めて同國の地を踏みし我等旅人にも、充分感知されたのである。

(2) 視察日程

シベリヤに旅せんとする者は、先づ左の三樣の旅程を考へる事が出來る、

第一線…敦賀…浦鹽…尼港…哈府…武市…知多…哈市…長春…奉天…京城…釜山…下關…東京

第二線…下關…京城…奉天…哈市…知多…武市…哈府…尼港…浦鹽…敦賀

第三線…下關…大連…奉天…長春…哈市…イルクーツク…ノーオニコラエウスク…莫斯科…知多…武市…哈府…浦鹽…敦賀

この中特に、第三線を表で示して見よう。

(備考)列車の等級は軟車及び硬車の二種に別れ、軟車と稱するものは從來の二等車を指し、硬車とは從來の三等を指す。露貨チェルオネツ留及大洋の邦貨に對する換算相場は、常に變動があつて一定しないが、現在の相場は下記の見當と思つて間違ない。即ち、露貨チェルオネツ留は、一留に付き邦貨約一圓二十七錢(變動大ならず)。中貨大洋は、一元に付き邦貨約一圓二十八錢(變動甚だし)。

發地名	着地名	途中日數	滯在日數	汽車又ハ汽船	寢臺料	一等	二等又ハ軟席	三等又ハ硬席	備考
下關	大連	二		汽船		五六、四〇〇	三九、四〇〇	一七、四〇〇	
大連	奉天	九時間		汽車	含マズ	一七、三五	一一、一〇	六、一五	
奉天	長春	同		同	同	一三、二五	八、五〇	四、七〇	
長春	哈市	同		同	含ム	二一、七五	一四、元、三五	七、元、六八	
哈市	滿洲里			同	同	六四、元、一〇	四〇、九〇	二三、七五	
滿洲里	知多			同	寢臺車ナシ	◎一五、チエル、二七	一五、チエル、二七	七、チエル、五六	◎は普通二等車
知多	イルクーツク	十一餘		同	含ム	二人室四、チエル、八三	二八、五〇	一四、三三	
イルクーツク	ノーオニコラエウスク			同	同	同五九、四七	四〇、四七	一九、〇〇	
ノーオニコラエウスク	莫斯科			同	同	同九三、二三	六二、五二	三〇、七一	
莫斯科	知多	十一餘		同	同	一七〇、四〇	一一三、五五	五六、八五	

知多武市	武哈府市	哈府浦	浦潮敦賀	武哈府市	一・五	二	汽車	汽船	汽車	汽船	合人	二室人 八七、二〇	同 一〇、〇〇	三五、一一	五〇、四〇〇
合計所要日數七一日												金一三六、五〇	五チエル一三、五二	大洋八五、八五	
												金九〇、六〇	三四チエル七、五二	大洋五五、二五	
												金四三、八五	一一チエル七二、五六	大洋四一、四三	

(3) 乘車賃金

區間	里程	大人 等級	大人 乘車賃	大人 寢臺車	大人 合計	摘要
長春(新京)—哈爾賓	二二五露里	一 二 三	一五、三五元 九、五二 五、六八	六、四〇元 四、八〇 二、〇〇	二一、七五元 一〇、三二 七、六八	五歲以上十歲迄ノ小人ハ乘車賃ハ大人ノ半額座席料ハ一枚ヲ以テ二人ニ當ツ 但シ一人ナリトモ料金ハ半減セズ五歲以下ノ小兒ハ無料
ポグラニーチナヤ—哈爾賓	五一二露里	一 二 三	三三、六〇 二一、一〇 一二、七〇	六、四〇 四、九〇 二、一五	四〇、一〇 二六、〇〇 一四、八五	
哈爾賓—滿洲里	七八六露里	一 二 三	五七、六〇 三六、〇〇 二一、六〇	六、五〇 四、九〇 三、一五	六四、一〇 四〇、九〇 二三、七五	

驛名	里程	等級	乘車賃	寢臺座席料	急行料	運輸教育費	赤十字費	合計
浦ポクラニーチナヤ驛間	二三七哩	軟	三、一七	一、八〇	一、八〇	二、四	一、〇	一五、〇〇
浦ハバロフスク驛間	七六九	軟	一七、四〇	三、八五	三、八五	五、六	一、〇	二一、四六
浦ブラコウエスチエンスク驛間	一、五三五	硬	二一、四〇	五、二〇	五、二〇	一、八	一、一五	三一、一八
浦知多驛間	三、〇九三	軟	一八、六〇	九、六五	九、六五	四、一	一、一五	五八、九五
滿洲知里多間	三七五	硬	四、八〇	二、一〇	二、一〇	一、三	一、一五	一七、五六
浦イルクーツク驛間	四、一四〇	軟	二四、六〇	一二、六	一二、六	三、八	一、一五	七七、三八
浦モスコー驛間	九、五一五	硬	五四、六〇	一三、六五	一三、六五	四、一〇	一、一五	一七二、八六
知モスコー多驛間	六、四二二	軟	三六、〇〇	一九、〇〇	一九、〇〇	二、七〇	一、一五	一一三、六五

(4) 入國出國

最後に、社會主義『ソヴエート』共和國聯盟の入國出國の規定を示さう。(社會主義共和國聯盟をCCCPと稱す)

(一)入　國

(イ)社會主義ソヴエート共和國聯盟外務人民委員會、同共和國聯盟全權代表領事並びに外國駐在CCCP特別全權代表は、本規定(二)及(三)の(イ)(ロ)に該當する外國人及びCCCP國民に對し入國を許可す。本規定發布後外國旅行券をうけCCCP外に旅行せるCCCP國民は、旅券の有效期間中に於いては歸國する事を得。旅券に査證を受けたる者を以て入國を許可せられたるものとす。乃ち外務人民委員會が許可せる場合、前記代表領事等は、外務人民委員會の通達に依りて査證す。

(ロ)勞働國防委員會附屬農工業移住民取締委員會に關する一九二五年二月十七日附人民委員會の規定に適應せる農工業移民の入國を許可す。

(二)出　國

(イ)CCCP國民にして本規定第二章に基きて交附せらるゝ外國旅行券を有する者にのみ出國を許可す

(ロ)外務並に勤務上の旅券を有する者或は國際會議に到來せるCCCP領土に在留する外國人にして出

國せんとする者は、外務人民委員會及當該共和國外務人民委員會並に其査證當局等の査證を受くるを要す。

(ハ)其他の外國人にしてCCCP領土に在留する者が出國せんとする場合は、共和國聯盟及自治共和國内務人民委員會並に縣及之に相應する國家機關の査證を受くるを要す。

(三)短期國境通過

(イ)國境地方の在留民の國境通過及東洋に於けるCCCP國境通過(特別の目的例へば市場參加等の爲め)の手續は、隣國との協定並に統一「ゲ、ベ、ヴ」CCCP外國貿易人民委員會、各聯盟共和國内務人民委員會の同意の下に發布せる外務人民委員會の規定に依りて定めらる。

(ロ)外國船のCCCP港灣碇泊中外國船員の上陸並に滯在等は、外務人民委員會の提議に基きCCCP人民委員會議が制定せる規定に依りて裁決せらるゝものとす。

私の目から見た露西亞人と支那人

早稻田大學　伊東正義

神戸―大連―奉天―長春―ハルビン―チ、ハル―滿洲里―チタ―イルクーツク―滿洲里―ハルビン―奉天―京城―下關

現代勞農露西亞は、大體に於て、赤軍派と白軍派とに分れて居る。勿論、白軍派とは、舊帝政時代の忠實なる憧憬者であり、赤軍派とは、現代勞農露西亞を其の理想とする派を、稱するのである。赤派の方は白派を指して、舊株を守り、自由の政治に滿足しない、意地を張り、自己の利益を忘却して居る連中と、嘲笑するか知れないけれど、彼等の如く、只、自由と名譽との爲に、忠貞の二字を安賣りする、賣國の士に非ずして、飽くまで、自己の利益等に着眼せず、國家の憂を憂へ、自己の慮を後にする、憂國の志士である。然し此の憂國の士は、極く少數にして、常に赤軍派の反目の的となり、彼等の子供までも、思想の反對よりして、大事な教育すら果す能はず、彼等も亦、政治上及び、社會上に於いても、重要の位置に就く能はず、常に「パン」を得る爲に、赤軍の反目の的となり、窮々たる狀態である。

斯くの如く窮し、斯くの如く、虐げられて居る彼等は、自由、學問、虚榮の或る程度まで味はれる赤派の連中に、飽くまで對抗して、美麗なる服裝にも、談笑しつゝ愉快さうに自働者を飛ばす赤派の連中にも、目貸さず、困窮したる現生活に滿足しつゝ、何かの强き信念を握りしかの如く、悠然として、生きる爲の資料を求めて居る。現代の露西亞否何處の國と雖も、「無理が通れば、道理が引き込む」との諺の樣に其の主張の如何に正當なるにしろ、數に於いて、少なる時は、當然我を折らねばならない樣な、破目に陷る。

其れと同樣に、彼等の內心は斯くの如く淸きに引きかへ、裏面には、「パン」を得る爲に、心ならずも恥をしのぎ、たゞ見た樣な安い賃金、其の上赤派の排斥の的と成りつゝも、忠實に不平をも表現せず、赤軍派の爲に使役されて居る。就中白派に最も多いのは、馬車曳である。風變りの二頭立ての馬車、其れが、彼等の生命であり、財產である。

普通何處の平和な國に於いても、物の賣れ行きの無い商店で、品物を求むれば、大變嬉し相な顏をして會釋する。平和な一國內の或る地方でもさうである。まして白軍派の反目の的、而も勞農の渦中に在る、赤軍派の生命の馬車こそ、尙ほ更ら然りである。老は幼を養ふ爲、幼は老を養ふ爲、如何なる雨の日も、風の日も、彼等の腦中常に現在と、「パン」とを畫がいて、身には、貧素な襤褸服を纏ひ、大陸の果てに、日が沈むを憾みつゝ、人待ち顏に、大通りの一方に、力無げに、古びた運命の馬車の上に、鞭を片手にしよんぼりと、通る人每に、力無げに呼ぶ、馬車曳の姿を見ては、大連より長春邊まで、澤山並んで居て、「シヤマー」と呼べば、競爭の樣に先きを爭つて、元氣よく來る支那馬車の可愛いい姿よりは、何んと無く、乘つてやり度く成る。其の例の「パン」の馬車を呼べば、急に勢ひ付いて、走り近寄り、巧みな露西亞語で、につこり笑ひつゝ迎へる。其の時は、彼等に同情すると同時に、身の日本に生れたるを、感謝せずには居られ無くなる。そして、大連等の支那人連中の馬車曳に、對した時と異なりて、幾分高尙な樣に見え、妙な小さな點までが氣につき、一歩一歩の馬の歩行にも、車の軋りにも、云ひ知れぬ惱みと、忠實其のものの響きを感ずる。

丁度私達が哈爾賓に宿つた、日本商品陳列館に、忠實な馬車曳きさんが居た。一寸見ては、若か相であつたが、顏には、大分老いの波の寄つた、髭を長く蓄えた、五十位の元氣な爺樣が居た。積る苦勞に顏は窶れて居たが、何處とは無しに、威嚴の有る爺樣で、一切其處の用向きを行つて居る相だ。其の獨逸式の髭を蓄へた例の爺樣は、私達が、戸外の散歩から歸つて來る度每に、輕く會釋して、につこり笑うて迎へてくれるのが常だつた。其の爺樣は帝政時代の大佐ださうだ。朝は早くから夜遲くまで、忠實に働いて天氣良い日、館長が外出する時等は、馬車の上に元氣な姿が見られた。其の家族は同館の一室を借りて、生

活して居た。其の妻君も毎日見て居たが、小じまりした、何となく氣品の有る人で、道等を歩るいて居る、赤派の美裝の夫人連中より、何處とは無しに、高尚で、落ち付いて見えた。彼の女は、朝は早くから主人の仕事を終へる迄、洗濯等の外は、讀書に餘念が無かつた。室の構造陰鬱なるが、然らしめるか知れないが、露西亞人は、良く散歩に出るのを好んでるらしい。

然し此の人等は、好きの散歩にも出ない一寸面白い人だつた。一般露西亞人は、仕事から歸ると、夕飯も食べずに、家族同伴愉快相に散歩に出掛け、勿論夏だつだからか知らないが、六時頃まではぶら〳〵公園に行つて、戯れて居る。殊に日曜等は、公園で開かれる音樂會へ行き、音樂の音に合せて、美麗なる服裝の男女が、遲くまで時を忘れて、狂ひ舞ふのが常らしい。大概美しい服裝をして、散歩へ行くのは、赤派の方が多くて、白派の方は、割り合に(經濟上からかしらないが)少なく、綺麗に洗濯した、黑か白かの服裝をして、年頃の女中も男の連も無く、一人でづん〳〵歩いて居る。大概何處の國の年頃の女でも、流行の着物とか、人の纏うて居る、美麗な着物は、中々着たがる者だが、彼等は、赤派其のものをいむと同時に、赤派の娘等の着てゐる—其の「シンボル」たる—赤布の美麗なるを身に纏う事を、大變きらふらしい。

故に白派の娘連中で、赤布を纏うた娘は一人も居ない。誠に不思議に見える迄、白い粗末な服を纏うて居る。何時か態ざ〳〵、服裝の點を尋ねた事もあつた。老人連中は、黑い服裝をして居る。人間と云ふ者

は、何か強い決心が心に有れば、外部の其の服裝等は、丸で問題にしないと云ふが、事實此の清い、何か強いものを心に抱いて居る、白派の方の娘は、(女丈けに限らず男も)、前に述べた通り、服裝等は問題にして居ないが、赤派の方の連中は、虛榮の爲に身を賣り、又「カフェー」の女等は、大概彼等の虛榮の果てださうな。

都會に長く住ひし人は、田舍娘の繕はざる姿に、天女の面影を見出し得るものだ。哈爾賓及び滿洲里等に永年住ひし人に、白派の女の白布が、大變清く見え、「ベニ」を塗つた、赤派の女連中は、毒々しく見えるのも、成程とうなづかれた。方々歩き廻る中、女學生が「ボオイ●スカウト」の服見た樣な粗末な服を着て、跳走で、「ベニ」「お白粉」そうした物は、一寸も見られない素朴な服裝をして、雨の中を傘をも持たず、濡れつゝもかい〳〵しく歩るき、又中學生が、粗末な襤褸服で歩いて居るのを見た。さうした所に、現代の勞農の名にふさわしさを見出すと同時に、疲弊せる露西亞の一强點も見られた。

若い青年の中には、此れは勞農露西亞否歐米の通有性か知れないが、青い樣な、赤い樣な電氣が街頭に點けば、戯れつゝ語り通る二人連は、見受ける事が出來るが、一人姿の散歩して通る男の姿は、中々見當らない。大概「ウォッカ」と「ダンス」と「女」の歡樂場へと向かふのである。而して其の歡樂場こそ、畫に描いた樣に、凄い程「ベニ」と「オシロイ」を塗り、「ワキガ」の臭がぷんと香ふ、濃艶な女が、魅惑的な視線を

來る人毎に投げつゝ、肉體をほこらしげに、强き酒をあふりつゝ、赤き氣煙をあげて、戯れつつ椅子にもたれ、男子の機嫌を取り、息苦しいまで煙草の煙りで一杯な室の中で、醉ひどれの群に混り、面白い音樂の音に合せて、舞ひ狂ふ場所である。之れは、現代勞農露西亞の如き、「生きる爲の働き」と、「自立自營」とを主義として立てられたる國は、さうある可きで、遊ぶ方の男も、自分で得た金で遊ぶのは、誰に一つ遠慮する所無く、當然の事だと考へて居る。かうした歡樂境にも次の樣な哀れな境遇に泣く少女もあるのだ。

或る帝政時代の何んでも、中將とかの娘に、病める母親を養ふ爲、心にも無い戯れに、涙ながらの生活をして居るものが居る話である。肉・酒、かうした歡樂境にも、露西亞の疲弊の跡を歴然として語るものがある。かうした露西亞に對して、只露西亞と呼べば、彼等は、生活の爲か何かは知らないけれど、いやな目付きで見、勞農露西亞と稱すれば、喜んで居る樣であるけれど、かうした喜びは、大多數彼等の眞心から出た叫びではないらしい。

何故かと云へば、一般人民もさうであるが、特に「鐘が鳴ります中空に」の歌の良く味はれる、『たまねぎ』を逆にした樣な、寺院の僧侶等の大多數は、帝政時代の露西亞を、大變渴望して居るらしい。何故かと云へば、帝政の諸國を、大變慕うて居る相だから。從つて、彼等は、日本人等を優遇する相である。だが此處でも彼等は、生と、虚榮、名譽の爲に赤化の假面を覆うて居る樣である。寺院の僧の打ち出す、鐘の音が、中空に、沈痛なる響きを、神かけて訴へて居る樣な感がした。

「物は試し」、「百聞一見に如かず」と云ふが、今迄支那人の支の字も知らなかつた私が、初めて彼の地に到り、次の樣な事を見た。

日本人は、直ぐ支那人と聞くと、只「汚い」と感ずる人が少なくない。然し彼等にも、吾等の到底及ぶ可からざる點がある。彼等は、第一忍耐心が非常に强い。何事をも屈せず成し、一定の動かざる基礎を造りて、然る後大なる目的を成すのが彼等の主義だ。實際僕等も彼の地に行くまでは、彼等の忍耐心の强い事等は、少しも氣が附かないで、只汚い民族とのみ考へて居た。其れは吾が國に來る、勞働者連中のみの服裝より見た、只外面的の誤解に過ぎなかつたのだ。此の汚ないと思ふのは、兩者の風俗の差異から來るのが、大部分の考へだと思ふ。日本人が米國に行き、大變吝嗇家の樣に思はれるのも、一部勞働者から、日本全体を推察される結果に外ならない。

其れは丁度、果實の表面丈け見て、其の肉の美味なるを味はざるより來る。醜いと云つて居ても、實際味はへば、美味いのと同じ結果に外ならないと思ふ。其の証據滿洲に永く住ひし人が、支那人の悠長なるに交はつてより、「日本内地へ歸り度くなくなる」と語る。誠に一理あることだと思はれる。

一世の慷慨の士曾國藩が嘗て自國を指して、「眠れる獅子」と銘打ちたるが如く、實際汚いとは考へつつも、生活と向上の爲には、何事をも忍從して、世界に誇るべき、哲學、宗教、倫理、工業の諸文化の爪を隱くしたる支那は、現代其の眠りより、覺めんとしつゝある時である。一朝此の支那が覺醒せし曉には、天産物は豊富だし、今又此の世界に誇るべき文學を進めたなら、吾が國等は問題外に在る樣に考へられる。此の努力、忍耐の一斑と、考へついた缺點とを左に揭げよう。

丁度哈爾賓街上であつた。自己の領土の中、而も外人の大厦高樓の下にて、卑やしい、靴磨きをして居る支那人を見た時、一所に歩るいて居た、某氏よりの話しによれば、彼等は、あゝして、如何に寒い日も、暑い日も、あゝして外國人の靴を磨いて、小さな資本を貯へ、後に四五人合同で、或る可成の商店を經營する相である。後に書くが、支那街の大商店たら、斯くの如くして形成されて居るので、基礎が中々固くて、而も信用があり、品物が中々廣く集まつて居る相である。此に反し、此の地に居住して居る日本人は、僅かな金が殘れば、直ぐに日本へ歸つて、樂をすると云ふ考へらしい。日本人の努力が一時的で、彼等の努力が永持てするのには、落膽させられる。

一勞働者の生活狀態が、斯くの如くである。まして、有識階級中に在りては、其の備への如何に堅いかが想像される。彼等は、悠然として刻下の急を後にし、遠き慮の爲に備へ、身を泰山の安きに置いて居る。

一國は、人民一人より集成して居る。故に一人の基礎工事は、延いては、國家の基礎工事になるのだ。

大連に上陸して、馬車曳の日本人の一人も居ないのに、驚ろいた位だつたが、要するに之は、一切の虚榮を捨てた支那人勞働者の基礎工事の爲と思はれた。彼等の虚榮精神を捨てた生活狀態に、日本人は、到底並行する事は出來ないから、遂に彼等で其の位置を握り占めるのである。此の勞働者連中は、一日十錢位の生活費で通す相である。其より見て日本人は、粗衣粗食に耐へないと云ふよりは、文明の加味者でありながら、文明の始祖者然として、奢つて居るのである。然しおしむらくは、支那人間には、國家の急を後にして、自己の利益のみに着眼する者が多くある。此の自己的の考へより次の弊が出て來るのである。

其れは、馬賊の事である。之は、勿論人口の稀薄と、學問の一般に普及して居ないのと、土地の狀態が然らしめるのか知らないが、よく滿洲支那と聞けば、馬賊の話しが出る樣だが、彼等は、無職の民の行き詰りらしい。彼等は、晝間は、忠良なる農夫の如く田を耕して居るが、夜になれば、隊を組んで、一部落から他の部落へと出沒し、物品を强奪し去り、生計を立てる相だ。秋の終り等は、特にあの滿洲の大平原の名物たる高粱が、高さ六尺から繁る時には、其れに據り冬籠りの準備の爲に良く出沒するらしい。滿洲西比利亞の地形が、車上から見ると、限り無く、果ても知れない樣に、小さい草野で、只楊柳樹の小さいのが、其の間所々に點々と立つて居る。其の草野に蔭る雲の走る影が、遙か遠くの方まで見られる。此の

大平原に、十里も廿里も行つて、漸く一軒か二軒見出す事の出來る、稀薄な支那人の農家に、城壁を廻らしてあるのが目に付く。其の附近は、警察權等は殆んど無いらしい。

彼等は、時々「カォリヤン」の繁みから飛出し、良民を苦しめる。故に折角の雄飛性に富んだ性質と、彼等の苦心の結晶も無殘掠奪され、變な氣持ちを彼等に植ゑ付けるらしい。

時々馬賊がやられた事を、旅行中二度位耳にしたが、全く彼等の行動は、命懸けであるが、而し生きる爲の苦に耐へ切れず、仕事等の無い勞働者連中が、良く此の危險な仕事をやるらしい。然し「クーリー」等の、職に窮せし者が、仲間入りするのは、幾分汲まれる所もあるが、軍人及び警察官の中にも、馬賊が居るとの話しには、誠に驚ろいた。之は現代支那の、軍事と、警察法の缺陷である。

今一つ「モルヒネ」注射場に就いて述べよう。其れは、哈爾賓で、或る支那通の日本の人に案内されて、見物に行つた。日本人で、此の注射場を見た人は、大變少ない相である。又先方でも見せるのを嫌ふらしい。其の在所は哈爾賓の支那街「フーチヤーテン」と云ふ、繁華な街の裏手だつた。丁度夏だつたから、蒸す樣に暑く、街の兩側の支那人の家の、洗濯せし衣を乾かしてあるのに、「蠅」が一面に付いて居て、前を通ると、一時にぱつと飛び立ち、追つても〳〵、附き纏ひ、誠にうるさかつた。間もなく例の注射場の前に來ると、道傍に一寸人の氣がつかぬ樣に、高さ四尺、幅四尺位の戸が、戸か板壁か、分らない樣なのがぴつたり締つて居た。油ににじんた黑色の戸の面には、又蠅が一面に止まつて居る。案内してくれた人は、平氣相に、腰を二つに折つた樣にして、中へ入つた。僕等も其の後より續いて入つた。

中は、穴の中見た樣に、光線が少しも入らない。向ふの棚には、注射の藥が並べてあつた。小さい油にじんだ戸が開くと、韮肉の匂ひ、阿片の嗅、何だか中へ入り度くなくなる。此の變んな匂に、僕等は無意識の中に鼻をおさへて入る。にじみ出る汗を拭きながら、眼を見はる。十丈敷位の向ふの方に、一寸空氣抜き見た樣に、穴があつた。溶ける樣な光線が中へ差し込むで居る。其處には、十人位の人相の惡い支那人が居て、一時に視線を吾等の方へ向けた。彼等は、度重なる注射に、糜爛しかかつた、足を延ばして注射の爲に、癲病見た樣な足を拭いて居る。蠅がべつたり附くが、追ひもしないで平氣で居る。其の横の方には、支那人が、アルコールランプで、水を混じた固い藥を溶かして居る。

其處に出入する支那人は、大概「盗市」で、働く連中だ相だ。彼等は、「盗市」の利益を此處で使ひ果すのである。案内の人も、注射を一度やつた相だが、誠に止められない樣で、注射した時の氣持ちたら、丸で天國へでも行く樣であると云つて居た。彼等も二日位は、食物も取らず、金を使ひ果し寢て暮す相である。只此んな風に、一時的の享樂に、生活、健康の增進等は、眼中に無い有り樣は、盗資ならではと思はれる。

斯うした支那の裏面から、今少し中央政府の、動かざる經濟基礎と、警察、軍備の確立を痛切に希望し

た。「物の初め、そは見るに足らず」の言句は、適當しないかは知れないが、支那は、今文明再建立の時代だ。天然の資は豊富である。然し人工が不足して居るのである。

今此の工業方面に、協力一致して當れば、廣漠たる滿洲にも、豊饒なる中央の域にも、世界に誇るべき經濟の豊富なる財源を得るだらう。

亞細亞人の一人として、友邦支那に、一日も早く良經濟家、良政治家の出現せん事を欲して已まざる者である。

第二班

駱駝の足跡

東洋協會大學　中島信一

大連—奉天—四平街—白音太拉—コンドウ廟—開魯—愛根廟—バツスル廟—ホンホル廟—巴林王府—ジョゲン廟—南廟—高麗城—舊王府—チラチン廟—林西—大坂上—烏圓城＝ウランハータ（赤峯）＝公翁府—カラチン王府＝モージンバー＝承德—灤州—天津—北京

大連から白音太來へ

昨日からの雨もすつかり晴れて紺碧の海上に浮ぶジャンク、はつきりした輪廓を畫き出して來る大連の冗山は大陸に對する憧れの空想を益々美化して行く。始めて異郷の土に足跡を印する吾々には全てが美しい。丁度正午、停るともなく動くともなく船は岩壁にひつたりと吸付けられて、迎へる人、迎へられる人、埠頭固有の騒然たる空氣が漲る。前途に對する希望も計畫も何物もない。只大連に着いたのだなと云ふ事を意識するだけの猶豫しか持たぬ。それが辛いのであるか嬉しいのであるかわからない。忙しさうに乘客の間を縫つて歩く船員と、下の方でがや〳〵騒いで居る苦力とが目につくだけだ。之れが初航海の誰でも味ふ氣分ではないだらうか。

新聞記者の包圍を受けながら先輩に迎へられて上陸した時始めて全意識が蘇つた樣な氣がした。吉田と云ふ先輩の紹介で始めて遼東ホテルに薄氏を訪れて自分達の旅行計畫を述べて押かけ女房式に一行に加へて呉れと言ふ事を賴んだ。と云ふのはふとした電車の乘り違ひから滿蒙文化協會の――氏に遇ひ氏の話に依れば薄氏が蒙古巴林王と共に入蒙すると云ふ事であるから薄氏に連れて行つて貰ふ方が良いとの入れ智惠で、厚顏しい話しではあるが、ザツクバランの膝詰談判が奇功を奏して喜んで承知され、二十二日白音太來にて再會を約して先輩の家に引き上げた。たゞ此の時單獨行動をするつもりの自負心が東京出發の際の廣言の手前一寸傷けられた樣な氣もしたが後に單騎旅行の至難を感じた時此の好運に會した事を喜ばずには居られなかつた。在住の母校先輩の厚い情けが初旅の吾々にはどれ程嬉しかつたか知れない。

行手を急ぐ旅の身の心を殘しつゝ翌十九日夜吾々のために催された大連第一の支那料理泰華樓の歡迎會の席から直ちに多數の先輩に送られて長春行の列車に乘じ奉天に向つて出發した。機關の音がずき〳〵と頭に響く。汽車は滿洲の平原を北へ〳〵と走つて居るのだ。目をつむつても中々眠られぬ。過去の事未來の事が混然として浮んで來る。車中には吾々四人の外に日本人は居らぬ。話も盡きて眠りに付く頃は二時過ぎてゐたらう。

ふと氣が付いた時は既に夜は明けて茫々たる大平原に生ひ茂つた高粱は三尺以上にも延びて居る。處々の楊柳の下に土饅頭がある。車中の一支那人が怪しげな日本語で日露戰爭の戰死者の墓なる事を教へて呉れた。處が此の支那人中々ずるい奴で沙河を過ぎる頃全で沙河の戰を見た樣な事を吐して散々日本兵を譽めた揚句「洋煙給罷」(外國煙草を下さい)とはうつかり油斷は出來ぬ、奉天に着いて直ちに領事館に赴き護照を貰ひ二十一日夜奉天を去つて四平街に向つた。

翌二十二日朝四時四平街着。朝霧の中に靜に眠つて居る街、鈍い電燈の光、ぼんやり浮き出した楊柳、全て平和な大陸的氣分が濃厚に漲つて居る。此處は日本人だけでも二千人も居る、四洮鐵道の起點であるだけに割合に繁華な街である。此處より四洮鐵道に乘り換へて約四時間で鄭家屯に着くが此の邊の汽車になると冬の奥羽線と同じで時間表が的にならぬから助らない。一時間位遲れると云ふ樣な事は何とも思つて居ないらしい。此の鄭家屯は大正七年西瓜の皮の事から端なくもあの有名な鄭家屯事件を引き起し我が忠良なる將士二十七名が慘虐極る支那兵の彈に倒れた處であつて未だ吾々の記憶から去らない。

汽車は果てなき平原を西へ〳〵と去つた。白音太來に近づくに從つて農作物も少なく遂には純然たる草原地帶に入る。此の間約四時間。街は驛から十五町餘りも離れて居るかの樣に思はれた。淺黄と白のだんだらの日被をかけた二輪馬車、房のついた長い鞭、赤い砂丘はアラビヤンナイトを思はせる。わざ〳〵出迎へて下さつた薄氏と新聞で知つたと云ふ母校先輩の富田氏とに伴はれて馬車で街に運れた。

流石に暑い。赤熱の日光は砂原に反射して目を射る。洪水直後の市街は未だ所々に水溜を殘して居て其の中に浸つてる豚の群も珍らしい。元來支那の街は外廓だけは整然として居るものが多いが此の白音太來は之れと反對に不規則に發達した市街である。人口は二萬等と稱するが支那人の云ふ事だからはつきりした所はわからない。しかし此の街は東蒙の入口だけに其の商業は中々よく發展して居る。日本人は現在四人居る。元はもつと居つたとの事であるが種々の關係から引きあげたさうである。しかし此處に來て支那人の眞中に飛び込んで活動して居る人々の意氣は感ずべきものがある。

白音太來夜話

焦げ付く樣な暑さも血の樣な太陽が氣味惡きまでに滿天を燒いて砂丘の彼方に沈んで行つた後はけろりと忘れた樣な冷やかな風が吹つ込んで來る。宿屋の一室に鈍い電燈の光を便りに花札をもてあそんで居た吾々ははからずも其に來合せた櫻井氏と云ふ人の口から彼の出口王仁三郎の祕事を聞いたのである。煙草の煙を靜かに吹きながら當時を追憶しつゝぽつり〳〵と氏はおもむろに口を切つた。

「丁度去年の五月です。私は或る仕事のために此處に來て三日目の晩の事です。寢苦しい夜も次第に更けて行つた十二時頃、突如市の一角にあたつて五月闇を破つてけたゝましい銃聲が死の靜寂にあつた市民の心臟を衝いて響きわたつたのであります。一發二發、三發、續いて豆を炒る樣に。「スワ馬賊の來襲か」と自分は思はず枕頭の拳銃を握りしめました。身拵らへ嚴重に宿の人々の止めるのも聞かず外に出ました。危險とは知りつゝも好奇心と云ふ奴がどうしても承知しませんでね。一つの星もないどんよりと曇つた空は今にも泣き出しさうでした。銃聲は間斷なく時々流彈がピュー〳〵と耳を掠め屋根の瓦を碎く音が、ワアーと云ふ喚聲とかすかな人のうめき聲にまぢつて聞えて、いやが上にも人々の神經を尖らして行きます。此の樣な狀態が二時間ばかり續きましてぴたりと止みました。市民は極度の不安に包まれてひたすら夜の明けるを待ちました。翌朝直ちに駈け行く人々に交つて當もなく走り續けて、其の事件の眞相を摑むべく現場に馳せつけました。其の現場と云ふのは私の宿とは程遠からぬ旅團司令部の前でした。

口々にやかましく罵り騷ぐ支那人を押しのけて前に出て見た時は私は思はず面を被はずには居られませんでした。まあどうでせう。三十八の死體が鐵の鎖で以つて縛り上げられ苦惱の形相物凄く泥と鮮血に塗れてのた打ち廻つて倒れて居るではありませんか。白ぼたんの樣な腦、牛肉の切れの樣な肉の斷片が地上と云はず土壁と云はず飛び散つて其の凄慘は目もあてられません。

其の横の溝の中から不意に日本語で聲をかける者に再び驚きました。ボロ〳〵の支那服に鐵鎖を以つて四肢を縛され泥に汚れた面を上げて居る三人の日本人が倒れて居るではありませんか。私は何事かと思つて走り寄つて見ると三人の目からは瀧の樣な涙を見ました。それが出口王仁三郎の一味でありました。私

はその時あの大本教の出口かと思ひましたが異郷にあればやつぱり同胞です。いろ〳〵いたはりました。

其の時あの生神様の口からもれた言葉がどうでしよう。『どうか生かる様にして下さい。これから私達はどうなるでしよう』と泣いて頼むだのです。そこで二三の同胞と共に旅團長に面會して彼の助命方を申し出てこの事件の眞相を聞いたのです、旅團長は一寸その名前を忘れましたが氣の好い男でした。いろ〳〵と初めからの事を話して呉れました。此の事件の主人公は盧占魁といふ馬賊です。

初め出口は一本から逃げ出して十七名の日本人を連れて日本官憲の目を掠めて奉天に來たのです。それと云ふのはあれでも蒙古王でも夢みたのでしよう。三十萬圓の金を餌に盧占魁と云ふ四百ばかり部下を持つて居る馬賊の首魁を手に入れて洮南を振り出しに隨所で惡事を成したのです。所が此の白音太來の旅長と云ふのが或る關係から此の盧占魁を殺さねばならぬ樣になつて來たのです。それで甘言を以て此處に呼び寄せて御馳走したのです。王仁なども其の下にも置かぬ歡待振りにすつかり悅に入つていゝ氣持になつて居る時、突如其の一室を取り卷いた兵隊が片つぱしから縛り上げて終つて、其の部下の二百八十名は遼河の畔で三面から一齊射擊でやつつけ幹部三十八名は旅團司令部前で銃殺したのださうです。しかし盧占魁と云ふ奴は流石に首領だけに少しも惡びれなかつたさうですよ。けれど最後に銃口を向けられた時無念の形相物凄くはつたと旅長を睨み付けて『此の恨みは七生までも忘れぬぞ』と一言云うた時は流石の旅長

もギクリしたと云ひました。王仁等は日本人だからと云ふので殺さずに置いたのださうです。『其惡事は銃殺してもあきたらぬが貴國人なるが故に如何ともなしがたい』と云つて旅長も弱つて居ました。

まあそれはそれで宜いですがあの王仁の奴です。泣いて命乞ひをしたくせにいざ助つて歸る時はどうでしよう。『俺が遼河畔で銃口を向けられた時突然光り物がして銃を持つ支那兵がひつくり返つた』とか何とか云うて大威張りで歸つたさうですね內地に。實に私達は憤慨しましたね。後から追掛けて切り殺さうかと思ひましたよ。宗教家とか何とか云うてあの時は實にから意氣地がなかつたですよ。ほんとに日本人の恥を一人でさらしました。」

遠くの方で犬が鳴いて居る。皆なほつと息をついた。外ではほつり〳〵と雨の音がする。

水難

此の地方の旅行には必ず洪水と云ふ事を考慮せねばならぬ。乾期の旅には宜けれど雨期に入つたが最後どこへ行つても洪水にぶつつかる。此の地方は樹木がとぼしいと云ふ關係と山がないと云ふ事からだらうと思ふ。雨が降つての洪水は珍らしゝないが晴天下の洪水だから始末が惡い。又其の水たるや實に危險性を帶びた奴で知らんで居る間に四面をかこまれて立往生も一度や二度でなかつた。

第一回は遼河だ。白音太來を出發して遼河々畔まで來ると增水で舟が出ない。仕方なしに其處に休んで

居る間に今通つて來た白音太來、河畔間の六支里ばかりの間が僅か二時間位の間に滿々たる大湖水だ。吾々の居る柳林三四丁歩を殘して前には遼河が六尺近くの波を立て波頭は白泡を含んで岸を嚙む。後は今の水。離れ小島に島流しの形だ。其の夜は仕方なく柳の下に物凄い水音を聞きつゝ露營して不安な一夜を明した。其の翌日も進むには進まれず退くには退かれず、離れ小島で二日を費して終つた。それでも命に別狀のなかつただけがもうけものだ。

翌朝無理に船頭をおどかし付けて舟を出さして其の域から脱した。此處の渡舟が又實にふるつて居る。舟と云ふよりも筏と云うた方が適當だらう。長さ七間幅二間位の長方形、其の上に人間十五六人、馬六七匹、馬車二臺位積める。其れを川上の岸から川下の對岸に流れにまかして斜に流す。櫓も櫂もなにも用ひぬ。全てが兎も角大陸的である。それが急流に乘つて下るのであるがまかり違へば營口までも流れさうだ。對岸に着く頃になると長い綱を舟から陸に投げる。陸に待つて居る奴等がそれを拾つて舟を引とめて陸に着ける。客が下りて終ふと上手に引つ張つて上るのであるが又之れを引つ張つて上るのが客だから面白い。此處の渡舟場では金を取らない。金のある者は志として置いて行くし無い奴は前述の様に舟を上手に引張つて行くのである。しかし乘逃げは絶對にない相である。流石は面子を重ずる支那人だけある。

第二の水難はこれより六支里ばかり先の二頭河子（アルトウホーズ）と稱する處だ。此處はやはり遼河の氾濫に因るもので

あるが十八九町の間濁水が滿々と漲つて所々では瀨をなし波を立てゝ流れて居る。それが何處がどうなつて居るのか皆目見當がつかぬ。土地の支那人を案内に渡るが途中で馬車が倒れる、馬が深みにはまり込む、中には流れに乘せられて流れる奴がある。此の時には吾々の一行は日本人九名蒙古王以下八十名の大部隊であるが皆命がけで渡らねばならない。元來蒙古人と云ふ奴は水には何等の知識がない。流れる馬にしがみついて居るだけで自分で泳がうとはせぬ。もつとも興安嶺の山の中に育つた奴だもの泳ぎを知る筈もないから無理もない話だ。それでもよくしたもので馬の方で泳いでどうやら岸に這ひ上る。吾々も危く馬から振り落されさうになつたがどうやら渡り切つて終つた。

其の日の行程の豫定は白音太來から四十支里藩家店（パンジヤテン）と云ふ支那町に宿る積りであつたが其の行路難のために二頭河子の七八丁先のコンドウ廟と云ふラマ廟の後に露營することにした。斯くの如く豫定は片端から外れて行く。普通なら白音太來から藩家店までは半日で行ける所であるが(勿論馬で)それが三日半日かかつてもまだ達せられぬと云ふ憂目を見る。此のコンドウ廟附近は既に蒙古地帶で支那人の居住するもの少なく爲に農作物なく渺茫たる草に遊ぶ牛馬の群千切れ〳〵の雲母（きらら）片雲も蒙古氣分を漂はして一種云ひ知れぬ喜びが胸先に込み上つて來て二三時間前の苦勞をもけろりと忘れて終ふ。

此の日に意外な御馳走にありついた。と云ふのは土地の蒙古人が王様に羊を二頭献上した。それを見て居

る間にくるりと裸にして大釜の中に投げ込んで丸煮にしたのを吾々にも御馳走して呉れた。これは蒙古人の最上の御馳走ださうであるが初めて御目にかゝる代物だ。一寸手が出なかつた。しかし食つて見ると仲々美味いもので遂には足を蔫づかみにして頬張る様になつた。此處より開魯まで二日の行程、道はあつても腰を沒する草原、時々飛び出す兎を追ひ〳〵三十一日開魯に達した。

開魯は白音太來の四分の一に及ばぬ小都市ではあるが其の歴史は仲々古いさうである。又それだけに落付きのある町である。四方に城壁を圍らし東西南北の四門を有するほゞ方形の街で其の商業も仲々支那人だけに美事な發達振りである。此處には有名な古塔がある。此の古塔が旅行者にとつては唯一の目標となる。夕陽が落ちて晩鴉の群が一としきり古塔を掠めて横切る時一寸詩的情緒が味はれる。此處には滅多に日本人なぞが來た事がないので我々を見ると物珍らし相に支那人の大供小供が五月蠅くつきまとふ。其の夜は阿爾客刺沁王府の所領管理人の家に王が招かれたゝめ吾々も其の招伴にあづかつた。

此處より王の護衛兵も增加して二百餘騎の大部隊となつた。翌朝出發に際して又洪水である。雨の降らない洪水は實にやり切れない。東西南の三門は既に閉ぢられて北門のみが僅かに開いて居るがそれさへ何時閉めなければならぬか解らぬと云ふ慘めさ。日程の都合上萬難を排して前進に決し王を促して出發した。蒙古王とても決して馬鹿にはならぬ。四流の三角形の王旗を先頭に二百餘の武裝騎兵に護られて悠々馬上

に煙草くゆらし練り出す樣は威風堂々たるものがある。

北門に馬首を廻らして城壁の上に立つて見る時は僅かに市の東角を餘すのみにて前面は渺々たる大濁湖である。處々に高粱が水の中から首を出して居るだけだ。滔々と濁流は音をたて白波を揚げて流れて居る。これを渡るのかなと思つた時は流石に恐しくなつた。勇敢にも其の內に王の馬を中心に蒙古兵が渡り始めたので吾々も其の中に交つて城內を繰り出した。城壁の上には市民の老若男女が聲を擧げて見送つて居る。其の時一寸得意の感がせぬでもなかつたが何しろ馬には始めての自分先づ怖しさが先に立つ。目の前で蒙古兵が馬諸共深みに乘り込んで眞逆さまに水の中に首を突込む。王の馬車や、荷物を積んだ馬車が倒れる。實に氣が氣でない。

約四時間を費して難關を脫し高粱の間を縫つて安全地帶に達した時は後方にしきりに警鐘を聞いた。遲れ走せに走せ付けた蒙古人に聞くと今北門を閉ぢたが水勢激しく西門の城壁が崩れて開魯は水浸しになると云うて大騒ぎをして居るとの話であつた。タイホートンと云ふ部落で一息して居る間に一行中の岩崎等二名が他の日本人二名と共に先達してとう〳〵迷子になつて終つた。其の夜は胡家崗子と稱する部落に王の一行と共に達したが彼等の消息は一向に不明不安に眠られぬ儘に屋外に出でた。王も薄氏も非常に心配して四十名の兵隊に搜索させたが空手で歸つて來る。その內に南方に當つてしきりに銃聲が聞える。宿の

主人は此頃非常に馬賊が多いからことに依ると拉置されたのではなからうかなどと云はぬでも良い事まで吐して不安はいやが上にもつのる。

夜は更けて日は西に沈んで名も知れぬ水鳥が啼き交すばかりだ。夜の冷氣が骨にしみる。星はしきりに流れる。眠られぬ夜もやつと明けた翌日シラムレンの流域に迷子の一同と合した。お互に其の罪を塗り合つても無事で遇へば惡い氣持はせぬ。最後は笑顏で無事を祝するのも旅の味のある所であらう。

蒙古路

シラムレンの徒渉も無事に濟んで愈々これより純蒙古地帶に入る。碧空をだんだらに飾るキラ、雲、渺茫と擴がつた草原、曾てコンドウ廟に感じた氣持を一層濃厚にする。此處より約四時間西北に道をとつて進む中に一つの城廓が遠く平原の彼方に浮び出して來た。同行の蒙古兵に尋ねるとアイゲン廟と云ふラマ廟なる事を告げた。野原の旅は、張合がない。行けども〳〵見えて居て中々近づけぬ。此の寺に着いたのは午後の二時頃であらう。始めて接する蒙古風俗に先づ驚かされた事は此のラマ廟の壯大な事とラマ僧共の汚い事である。物珍らしげに吾々の周圍に集る彼等に相當汚い事にはなれて來て居つたにもかゝはらず少なからず辟易した。王の客人として今一つは薄氏と此處の活佛と知己である關係上非常に歡待された。そして純蒙古食を振舞はれた。此の蒙古食の事について一寸書かう。

彼等蒙古人の常食はホルスンバターと稱する粟の一種を炒つた物と牛乳である。野菜は絶對にない。此の牛乳を種々加工していろ〳〵の物に作つて食つて居る。牛乳からの製品とも云ふべきものは奶豆腐（ナイトウフ）、ウルモ、奶皮子（ナイピーズ）、奶子酒（ナイズチウ）、黃油卽ち純粹のバターなどである。先づ第一に奶子茶と稱して牛乳の入つて居る茶を出す。次に炒米（チヤオシウ）卽ちホルスンバター、奶豆腐、黃油なぞを出して呉れる。最初はとても牛乳臭くて手が出なかつたが後には之等より外に食ふものがないのでやむを得ずなれて終つた。奶豆腐と云ふのは牛乳を乾燥させて固めた物と思へば間違ひない。先づ牛乳をかめの中に入れて貯つて置くと自然に上部に淡黃色の水が浮んで來る、其れがしばらくすると酸味を帶びて來る。それを酸奶子と稱して奶子酒と云ふ酒の原料になる。其の上澄の水を取つて終ふとあとにどろ〳〵して半流動體の豆腐樣のものが殘る。それが暫らくするとどろ〳〵した若干の酸味と甘味とを有するものとなる。之れをウルモと云ふ。中々捨てがたい味のあるもので丁度カルピスの濃厚のものと思へばよい。それを袋に入れて吊して置くと袋の底を通して黃色のバターが搾り出される。後に殘つたものをかためたのが奶豆腐である。之れは彼等が日常缺くべからざるものの一つである。それであるから彼等の食は極く簡單である。通常火は茶を沸かすに用ゆる位なもので此等の炒米にしろ一杯位で一食であるから物の二分はかゝらぬ。

この話はこれ位にして旅を續ける。翌日此處を出發して有名な大平原を西へ〳〵進んだ。暑さは暑し水

はなしアイゲン廟よりバツスル廟に至る三百二十支里の間は一軒の家もない荒凉たる草原である。途中馬の手綱を持つた儘草の中に百何十度の焦げ付く様な日光を浴びて眠つた事が幾度あつたか知れぬ。王の一行を遙か後方に殘し自分達は三名の蒙古兵を連れて薄氏に連れられて先に〳〵と進んだ。太陽は黄金の輪を畫いて草原の彼方に沈んで行つて青白い月がほつこりと中天にかゝる。夜が來てもまだ一つの人家も見えぬ。

「月は冷たく駱駝は遲く向ふ庫倫火も見えぬ」

駱駝にあらぬ旅ではあるが物淋しいセンチメンタルの氣持に包まれる。

夜の十時頃チヨネノールと呼ぶ一小池に到達した。此處は何しろ此の平原唯一の露營地である。池の水は旅行者が飲むと同時に牛馬も中に入り込んで飲む。ために水が夜目にも白く濁つて居るのが見える。けれど一日未明から一滴の水、一粒の炒米すら口にせぬ吾々、黄金にも換へ難き甘露と心得て呑んだけれど渴が醫されるにつれて水の馬糞臭いのに氣がついて來る。

約一時間ばかり休んだ。月は青白く氣味惡いまでに冴えて居る夜である。何處からともなく生ぬるい風によつて聞えて來る異様な啼き聲に氣が付いた。流石に旅なれた蒙古人である。三名の兵隊が「狼」と叫ぶと同時にまごつく我々をせき立てゝ馬に飛び乘つた時は既に怪しい聲に四面を圍まれた。逃げた。ひた走

りに野も岡もなく西に〳〵と走つた。夢中で二時間。やつと一部落に達して寢て居る蒙古人を起して再生の思ひで蒙古包の中に入つた。蒙古人夫婦の心盡しのもてなしに炒米を牛乳で炊いで呉れた其の味は實に忘れられぬ印象を殘した。それもその筈向ふでは勘定に入つて居らぬ思はぬ客人に見舞れたのだから。

翌朝未明に其の家を辭してバツスル廟に向うた。路々各處に遊ぶ牛馬群の間を通つて草原を西に進んで十時頃バツスル廟に達した。此の廟は千五百の僧を有する大廟であつて其の規模もアイゲン廟に比して尙壯麗を極めて居る。此の地方は既に興安嶺にかゝるのであつて土地も高く純放牧地帶である。原野も從來の物とは一寸趣を異にして野生のあやめが非常に多く開花期には見渡す限りの大野原が紺紫色に彩られるとの話である。尙注意すべきことは水鳥の多い事である。雁、鴨、鷺、鶴などが近づいても敢て逃げようともせぬ。

此處に一泊、未明に此處を出發して東ゴビの砂漠にかゝつた。此の砂丘の一寸手前にホロハノールと呼ぶ湖がある。湖面が見えぬ位に水鳥が浮んで居る。獵銃が一つあつたら晩の菜には事をかゝさぬであらう。此の東ゴビの砂漠はそれ程大きくないらしく而も我々の通過したのはほんの一部分であるがそれでも音に聞く蒙古砂漠に足をつけたと思へば何となく嬉しい樣な氣がする。

これより愈々興安嶺の中に入つて行くのであるがだん〳〵に高くなつて行くので原と山との區別がつか

ぬ。夕方なぞ煙霧の立ち罩めた山端に駒を進める時クリーム色に暮れて行く空にクツキリと憎いまでに浮き出して居る山。丁度黒襟の中年増のそれの如く中々に捨て難い趣きがある。所々に點在する部落の蒙古包から立ち昇る夕炊の煙、内地の田舍を思出して柄にもないホームシツクにかゝりさうになる。果なき高原の露營の夢も蒙古路に入つて一週間、やつと大坂土古府に到達して薄氏が曾て經營した蒙古産業公司本部の一室に圓らかならねど六角位な夢を結ぶ身となつた。

最初の我々の計畫としては此處よりタブスノールを經由して滿洲里に拔けてシベリヤ鐵路に依つて歸る積りであつた。が計らずも八月七日滿鐵調査班が東烏穆沁に於いて蒙古赤衞軍の手に捕へられたとの報に接し旅行計畫變更の止むなきに至つた。勿論吾々も外蒙に赤露の勢力が入り込んで居ると云ふ事は知つては居たが其れ程までに重大視して居らなかつたが色々と探つて見ると實に驚くべきものがあつた。經棚さへも其の影響を蒙つて居るとまで云はれて居た。この土は此處より南下して赤峰、熱河に出づるの外はない。所が又此の街道は非常に馬賊の横行が盛であつて到底單獨に吾々を手離なす事が出來ぬと云ふ薄氏の親切に、時期を待つため此處に一ケ月の滯在をする事になつたのである。然し此の滯在は、短期間の旅行中の滯在として隨分永いものには違いないが蒙古旅行として來た以上成る可く長い間蒙古の地に留つて其の空氣に觸れ得たかつたのであるから、又此の旅行を一層に意義あらしめたかもしれない。

此の一ケ月の間に種々な事が起つたが一番困つたのは一行中の岩崎が赤痢に侵された事である。旅行中に病む位困る事はない。其の事に就いては多分本人が書くと思ふから省く。これより蒙古人に就いて簡單に書いて見よう。

蒙古人の生活

彼等蒙古人の生業は牧畜である。それは又氣候、土地の關係上牧畜より外に出來ないからでもあらう。然し所々に移往して居る支那人が農作物を作つて居るのを見れば滿更出來ない事もないのだらうが彼等は農作物としては炒米にする粟の一種を作るの外絶對に外の物を作らぬ。それであるから其の生活資料を盡く畜産に仰いで居る。先づ大低な家に牛の三十頭、馬の四五十頭、羊の五十位養つて居らぬ家はない。御承知の如く内蒙古は所々に小さな砂漠はあるけれど大體に於いて草原であるから實に都合が宜い。それであるから彼等の牧畜も從つて簡單である。特別に狼群の來襲でもない所であると牛でも馬でも羊でも野原に放しぱなしで何等手を加へる事をせぬ。けれど又彼等牛馬羊は夕方になれば獨りで家の圍りに歸つて來る。それであるから大體に於いて遊牧畜生活を營んで居るものが多い。彼等の多くは領内を轉々として、家を牛車に積んで馬を牽きゐ羊を連れて漂浪つて居るのである。よく吾々も旅行中、全山馬に包まれ牛に蔽はれた處を見た。

彼等の日常の仕事としては男は一日中煙草をふかして遊んで居り、女は牛糞拾ひに牛乳搾り其他家事をなす位なものである。生活が極めて簡單であると云ふ事から自然に遊惰に流れるのも無理はない。

彼等の家屋は所謂蒙古包と云ふのであつて蒙古人獨特の家屋である。これには固定的のものと移動性のものとの二種があるが其の構造に於ては大差ない。外觀は丁度蜂の巣を伏せたものと思へば間違ひない。一寸移動性の物を說明して置く。高さは大低天蓋の最も高い所から地上まで九尺位あるだらう。直徑二間內外の筒形で親指の二倍大の太さの木を斜に組み合せて其の合せ目を皮の釘で止めてある。それは丁度小供の玩具にある樣に伸縮自在になつて居る。その幅五尺長さ九尺位のものを四つ繼ぎ合せて鳥籠の樣なものを作つて上から傘の柄を取り去つた樣な屋根を置き、雨の漏らぬ樣に羊毛で作つた氈子と稱するもので卷いてある。側部は夏は葦に似た草で作つたすだれ樣の物を卷くが冬になると氈子を卷いて風防にする。入口は必ず南面して居る。やつと腰をかゞめて這入れる位である。內部は正面及び側面に一疊敷位の板を置き其の上に例の氈子が敷いてある。正面の板の後に長持があつて其の中には彼等の重要食料たる炒米が保存されて居る。其の右手に佛壇があつて奇怪なる佛像佛畫が祭つてある。而して家の中央には必ず鼎を置いて其の上に大鍋がかけてある。家の構造は大體に於てこんな工合で其の中には多くて三人しか住はれぬため家族の多い家になると幾つもの蒙古包がある。

一寸前にも述べたが元來蒙古地帶には木もなければ石炭もない。けれどもあの不毛の地に成吉斯汗も立派な大帝國を建設すれば女眞も舍を建てた。其の昔から彼等に與へられた燃料は牛の糞である。これはかりはいやしくも蒙古人の住んで居る所にはない所のない代物である。しかも其の乾燥したものは非常に火力が强く年中品切れの怖れがない理想的の燃料である。それであるから蒙古包の前には必ず牛の糞の山を見受ける。

蒙古人の性質は日本人に似通つた點が非常に多い。純蒙古地帶の者は非常に溫順ではあるが慓悍の處も少くない。彼等の容貌に就ては顴骨が高く鼻梁も割合に整つて居る。服裝は支那服の袖の細いものを着て必ず帶をしめて居る。之れは全てに馬を用ひる彼等には此の方が活動がなし易いためであるからであらう。男は所謂新しがり屋とラマ僧を除くの外は全部辨髮を着け、女は兩把頭に結んで居る者は旣婚者で三つあみにして下げて居る者が未婚者としてある。

最後に一つ述べなければならぬ事は犬である。此の蒙古地帶にあつては勿論警察力の及ぶ譯もなく又彼等の生命財產を保證する樣な機關のあり樣苦もない。從つて彼等は自守自警をしなければならん。その機關として彼等は野犬を用ひたのであるが、流石に野犬だけに多年來飼馴されたとは言へ決して其の獰猛性を失つて居らぬ。其の上に家人以外は誰れ彼れを問はず咬み付く樣に仕込まれて居るから助からない。吾々

も其の餘惠を蒙つて屢々之れ等の包圍に陷つて悲鳴を擧げた事があつた。それであるから彼等蒙古人間でさへ日常の挨拶に先づ人の家を訪問した時第一に口から出る言葉に「ノホーヘイ」と云ふのがある。それは「犬を呼んで呉れ」と云ふ事である。それに應じて家人が出て犬を集めて後始めて其の家の園の中に入る。彼等にして斯の如き有樣で警戒するのであるから語らずしても其の性が如何に猛惡であるかゞ知られるであらう。これが又彼等の生活に於いては缺くべからざる機關であると云ふ事に注意して貰ひたい。

尙外にも述べ來るならば限りなくあるけれど彼等の生活に就いては簡單ながら大體を記したと思ふ。

此の滯在中、此の大坂上を中心として出來得るだけの旅行は行つた。高麗城探索にも出掛けた。砂漠に駱駝乘りもした。けれど愈々九月に入るや颯々たる秋風胡沙を卷く秋が來た。原野は忽ちに靑色を失ひキラ雲の流れも早く雁さへも南に飛ぶ樣になつて來た。旅の身として故鄕戀しも又無理からぬ所であらう。

九月九日斷然意を決して薄氏の好意で巴林王から借りた五名の蒙古兵を案內に大坂上を出發し、再びニコロタイの山嶺に懸る。煙霧に暮れ行く大坂上を馬上に振返つた時一日一日と故國に近づくと云ふ嬉しさと住馴れた土地を後にする名殘惜さとの錯綜した感じに包まれて知らず知らずと涙が頰を傳つた。

砂上に殘された駱駝の足跡は昨日の風にかき消されたけれど我々の頭に刻まれた駱駝の足跡は永久に語り草として殘されるであらう。

亂舞歌

東洋協會大學　岩崎儀三郎

大連—奉天—四平街—白音太拉—コンドー廟＝開魯—愛根廟—バウスル廟—ホンホル廟—巴林王府—ジョゲン廟—南廟—高麗城—舊王府—チラチン廟—林西—大坂上—烏圓城＝ウランハータ(赤峯)＝公翁府＝モージンバンバー＝承德—灤州—天津—北京

灤河下りの一日

二十六日、いよ〳〵熱河を後にして灤河を下ることゝ成る。此河は外蒙古の沙漠地帶にその源を發し東に走つて喇嘛廟で名高い多倫諾爾(ドロンノル)を過ぎ此處より東南に向ひ、郭家屯●豐寧●灤平等を眺め灤平の少し下流で熱河を橫切り來る小流を合せていよ〳〵東南に駛り、喜峯口にて萬里の長城を貫き灤州を右に見て渤海に注ぐ約二千五百支里ばかりのものである。

朝五時起床、出發の用意をして六時頃馬車で河岸に行く。見ると長さ五間、幅一間半ばかりの荒削りの舟が十艘近くも並んでゐる。勿論屋根も無ければ敷物さへしかれてない。今が朝めし時と見えて何の船でも髭面の親爺共が盛んに炊事をやつてゐる。我々は之れを見てスツカリ喜こんでしまつた。大抵舟に乘つたら自分達が勝手に炊事することが出來るだらうと思はれたので、途中で食へと云つてハータイの領事館

でもらつた白米二升、醤油四合、味噌三斤、白糖二斤、食鹽一と瓶は、大事に大事にしてとつておいたのである。何はともあれ酒は忘れる可からずとあつて、船に荷物を下すや否やIは市場の方に走つていつた。肉や葱その他食糧品が不足なく調へられた時、何ともいへぬ嬉しさが込上げて來るのを禁ぜられなかつた。さもしい奴と笑ふ人もあるだらうが、實際旅行中は飲む、食ふ、寢るの三つの外何等の慾望もなかつた。

燒き付けるやうな炎熱の日、喉をカラ〳〵にさして原野を行く時などはたま〳〵水溜でも見出されるとそれが牛糞や馬の小便で茶色に色付いたやうなものであつても、喜こんでむさぼり飲み、朝早く出發したま〻打尖(タチエン)の時間に成つても運惡く人家を見出す事が出來なければ炒米に水かけたものでも舌皷をして腹を滿し、亦日暮れて漸く人家に辿りつくことが出來ても狹い蒙古包では寢る場所が無くて鞍を枕に月を望みながら野宿もした。實際忘れてはならぬ。我々はかうした飲み物、食物、宿にさへ人生無上の快樂を見出したのである。

今迄一度も用ひる時が無くてそのま〻リユツクサツクの底に丁寧に疊まれてゐた大きな旭日旗が帆柱高く掲げられた。今日を晴れと朝日に映えてひら〳〵と飜る。七時出發、向ふの山陰には未だ朝霧が立ち込めてゐる。錨を揚げてひと棹させば舟は輕く流に乘つて氣持よく下つて行く。鋸の齒のやうな峻險な峯、はては南畫そのま〻の景色が走馬燈のやうに展開されて、舟は切立てたやうな山峽を矢のやうに馳せ下る。

暫らくはまつたく夢心地だ。廻り角などに來ると今にも岩角にぶつかりさうに思はれる。實際見てゐる者の方がハラ〳〵してしまふ。今度こそ木葉微塵だ、ソラ來た、と思ふ瞬間舟は巧みにヒラリと避けて暫らくにして亦悠々として下る。

出發の前夜、德といふ軍人が六七名の部下を從へて我々の宿にやつて來た。彼は日露戰爭當時黑木將軍のボーイに使はれてゐたとかでなか〳〵日本語が上手であつた。

非常に親切に何くれとなく世話をしてくれたが彼の言ふ處に依ると近頃は所謂馬賊の跳梁期で貴兄達が通つて來られた所などは一番危險な所である、此の灤河にもコソ泥が多く鐵砲などを發つて船頭を威嚇して金品を卷上げるやうな事が屢々あるから必ず日本の國旗を揭げて行けなど〻、旅が終る時分に成つてからとんだ事を聞かされて怖氣つく。そして之れも彼の好意の計ひかと後で氣が付いたのだが、我々の舟には絶對に他の客を乘せなかつた。それで一諸に出發した後の船などは常に船客が滿員であつた。

三時間も下つたと思はれる頃舟はとある小さな部落に着けられた。もう百支里以上も下つたといふ。馬車の一日以上の行程である。Iは船から降り旭日旗の下に立つた我々をカメラに納める。若者は竈に火を焚き付けて頻に南瓜をきざんでゐる。我々の爲に打尖の用意をしてゐるのだ。斷つて置かねばならぬ事は此河は河底が石や砂であり岸も岩石ばかりであるにかゝはらず、水が非常に濁つてゐる。多分上流地方の

關係ででもあらう。船頭達は皆平氣で之を飲んでゐる。兎に角この濁水と粟、南瓜とで打尖のめしは出來上つた。一寸食つて見ると甘味があつて非常においしい。遂に三人で釜いつぱい平げてしまつた。

「オイ／＼船頭の奴眼を廻してゐるぜ」

「你們好行厨」なんてIは御世辭を言ふ。

「好説々々」

髭親爺すつかり機嫌がよい。

さて錨を揚げて出發せんとした處、後の船の客どもが我々を助けると思召して是非貴兄の旗を我々の方に借して下されと申込むで來た。日本の旗の有難味を知つてゐるとは誠に愛奴(ういやつ)であるとスツカリ偉く成つてしまつて喜んで貸してやつた。貸してやつたのは好かつたが、お蔭で灤州に著く迄の三日のあひだ彼等に獨占されてしまつた。併し考へて見ると可哀さうなものだ。自分の國内をかうしてビク／＼しながら旅をしなければならぬ不便さ哀れさは到底日本人には想像も及ばぬ事でせう。赤峯から熱河に來る途中は領事館で借して下さつた小さな國旗を車のわきにずつと立てゝ來たが、我々の眼から見ると何だか馬鹿に子供らしく又業々しくも思はれたので熱河附近に成つた時とり外してしまつた。すると馬夫と巡警の奴吃驚したやうな顏をして、取り外してはいかん是非立てゝくれと言ふ。それで再び車に結び付けたが此邊ばかりでなく内蒙古地方でも日本旗は相當威光があるやうだ。

部落を出發した頃から流れが非常に急である。途中に清水が瀑を成してゐたので、水を飲むから一寸船を停めて呉れと言つたら、あんな水は飲めぬ、飲めば下痢をする、川の水は濁つてはゐるが體によく甘味もあるから是非これを飲めとクソ頑らしい事をほざく。問答してゐるまに舟は二三丁も下つてしまつてゐるぢやないか。エエまゝよ蒙古で鍛へた胃袋だ、といふ自惚も手傳つてつひ二三杯飲むでしまつた。

支那旅行に依つて得らるゝ知識は、旅行中吸ひ込むだ泥と埃との量に正比例するさうだ。

此の河を上るには、帆柱の先端に二本の細綱をつけて二人の船夫が之れを引き船頭が船にゐて舵を取るのである。船員は皆三人づゝであつた。赤銅色の筋肉隆々とした若者が、身に一物をも纏はない素裸體に成つて峻險な岩角や石原を匍匐して行くさまは、秋の院展に此のまゝ持つて行き度い程である。如何に粟を食ひ、濁水を飲むで生活してゐる者とは云ひながら六百支里もかうして上つて來る苦勞を考へると灤州まで舟一艘が銀二十八枚はたしかに安い。

さて此の灤河下りで忘れられぬ滑稽な話がひとつ出來た。ハーターの領事館で戴いて來た鼻紙は熱河まで來ぬうちに全部なくなつてしまつた。それで我々はたつた一冊あつた講談雜誌を一枚々々使用して來たのだ。それも丁度熱河まで丶無くなつてしまつてゐたのをつひ出發の時誰も氣がつかずに乘船してしまつ

た。迂濶な事を仕出かしてしまつたものだ。手拭は三人で一本しかない、不用な夏シャツは全部パーターにおいて來てしまつた、船夫達が紙など持つてゐるとは思はれなかつたが一寸尋ねてみたら勿論ないといふ。石原に出たら其處で用をたして小石で拭けとぬかす。蒙古旅行をして來た猛者でも石で尻拭く程イシはケツしてゐなかつた。仕方がないので餘分に持合せがないのだが、使用してゐたヘコを一寸位ひづゝ切つては使ひ切つては使ひ、とう〳〵北京入りの際にはヘコは既に尻の方だけチヨビリとのこりヘコの使命をはたす事が出來ぬ狀態に成りはてゝゐた。ブラで都入りとはハテヘコたれざるを得ぬ話である。

熱河までは隨分頭腦を痛める樣な心配な旅をして來た爲三人とも確かに神經衰弱に罹つてゐたが、この呑氣な灤河下りでスツカリ延び〳〵してしまひ、ボートの遠漕にでも行つた氣に成つて船の中にひつくり返つて歌ばかりうたつてゐた。

かくて岩にからんだ蔦葛に夕陽が赤々と映える頃遙か彼方の峯に萬里の長城の一端が見え初めた。

「オイ長城だ！」

「ヤー長城が見えた」

まつたく偉大なるもの丶前には何の言葉も出ぬ。船は又左廻して切り立てたやうな峯と峯との間を一氣に馳け拔けて行く。長城も暫らく影を沒した。思へば我々は出立の時から此の長城を見んと如何程待ち設けてゐた事でせう。恐らく支那に始めて遊ぶ人の誰れしもが等しく感ずる所ではないでせうか。

旅に出て見る三回目の左弦の月がきら〳〵と流れに浮ぶ頃、船は長城の見える所に止められた。夜のとばりが全く下されて恐ろしいまでに靜かな世界と成つた。聞えるものは水の音ばかり、左手はおほひ被さつたやうな岩が魔物のやうに峙ち、右手は峯から谷、谷から峯へと走る長城が月の明りに畫き出されて此處の頂きあそこの頂きと點々として見える。

艫の竈には火が點ぜられて、炊事の臭ひが腹に染む。何はさておきソレ酒だ〳〵とNは白乾兒を溫め、Iは味噌と生葱を用意する。船頭が羊の肉をあぶり久し振りのすき燒に陶然として醉ふ。昔隋の煬帝とかは官女三千人を裸にして躍らしたと聞くが俺れは今それにも增した豪遊をしてゐる。見よ此の偉大なる景色を背景にして月は裸になつて躍つてゐるではないか。

拓大の亂舞歌は期せずして三人の口からうたはれ、船端をたゝく音流れに和して秋の夜はいよ〳〵靜かに更けて行く。

一、忘れられぬぞ灤河の畔　船を停めて月を見る。
一、長城仰いで酒くみ交し　下る灤河の秋の月。
一、ひとり息子は必ずやるな　石で尻拭く胡北旅。

斯くして灤河下りの第一日は船側打つ流れになぐさめられながら靜かに故郷の夢に入る。

忘れ得ぬ事ども

旅をすると誰れしもが等しく感ずる事ではあるが殊に我々第二班のやうに衣、食、住に最も事を缺く不便な地方を旅する者には、人情の溫いとか冷いとかといふ事が痛切に感ぜられるものです。

我々が旅を終つてそして過去りし日の事を顧みて非常に嬉しく思ひ又誇りとも感ずるのは、此の三ヶ月の旅行中我々と交渉のあつた全ての人々に對して少しでも惡い感じを與へるやうな事がなかつたと思ふ事と、自分等も亦何等惡い感じを受けずに旅を終へることが出來たことであります。

國や風俗、人情を異にする所ではありながら我々は至る所で涙の出るやうな溫い人の心に接する事が出來た。

其の一　道に迷ひて

七月八日　開魯を出てアゲン廟に向ふ時でした。たまたま開魯は大洪水にひたされてゐて僅かに北門のみが開かれてゐた。そして巴林王が先を急ぐ旅であつた爲に十支里にわたる俄か湖を渡渉しなければならなかつた。深水馬腹をひたす濁流が滔々として流れてゐて何處が道で何の邊から畑か何んな處に窪みがあるか全く解らぬのに始めて乘せられた馬に對する恐怖心も加つて全く生きた心地はしなかつた。忽ち小車は倒れ馬は泥深にはまり込む。一行中には時計を落すものステツキを流すもの大事な荷物を水にひたしたり、はては落馬するものさへあつて、その行路難はとても筆や言葉で表はす事が出來ない。

この洪水のため大變故障が出來て流石王の行列も滅茶苦茶に成つてしまつた。我々がやうやく平地に出て來た時にはあの三角形の、赤でギザ〳〵に縁取りをした、丁度元が我が國に來襲した時使用したといふ旗と同じやうな王旗はもう目に付かなかつた。王は我々一行を殘して先に出掛けたのであらう。

此邊は蒙古氣分たんまりの原野が果てしなく續く。太陽は草木も枯れよと照りつける。零時半頃だ、俺れとIと寫眞班のKとは、馬を捨てゝ王の食糧車について徒歩で行かうぢやないかと、薄氏一行を後にして一足先きに出掛けた。

まつたく綠の毛氈を敷きつめたやうだ。人家も見當らぬに所々白い羊が群を成してゐる。歌をうたつたり話をしてゐるまに余程歩いた。美しい草花が咲いてゐる眺めのよい所で、

「煙草でも吸はうぢやないか」

とIが言ひ出した。これがそも〳〵事の起りであつた。

「蒙古に寧日なしさ。先づ時の觀念を捨てゝからでなくては蒙古旅行は出來ないからね、大陸旅行はゆつくりと構へるにかぎる。そして薄一行でも待つ事にしようぢやないか」と遂ひにそこに腰を下ろしてしまつた。俺れは煙草を吸はぬので勿論持つてはゐなかつたが、二人の中でIがタツタ二本持つてゐるつきりであつた。しかもその一本は洪水の泥水につかつてビショ〳〵に濡れてゐた。

「嗚呼悲哀の至りだネ」

と言つてそれを捨てゝしまひ、殘りの一本を二ツに折つて二人は仲良く吸ひ始めた。肺の奥までもといつたやうな口付きと、此の味ばかりはといつた顏付きで勿體らしく短いやつに何時までも吸ひついてゐる。まつたく煙突のやうな奴だと思つた。それよりも俺れのこの喉のかはきを何とかしたい。それが目下の急務だ。水筒はIが一個さげてゐた丈で其ももうとつくに空に成つてしまつてゐた。燒きつくやうで口の中がかさ〳〵である。とても堪へられない。ステツキに切つて來た高粱の皮をむいて一寸嚙むでみると少し甘味のある青臭ひ汁がスーツと喉を通つて行く。それでも渴を癒すには充分であつた。丁度ガチ〳〵に成つた機械に油をつぎ込むだかの感がある。

突然Iは、

「今捨てた煙草を探してくれ、乾かして吸はにやならぬ」

こんな事をしてゐる中に三十分以上も過ぎたらう、一緒に來た食糧車はもう影も見えぬ。

いくら待つても薄一行は來さうにもないのでボツ〳〵食糧車の後を追ふ事にした。

暫らくにして道が三つに分れてゐる。此處まで來た時は全く當惑してしまつた。どつちに行つてよいかサツパリ判斷に苦しむ。此邊は道と云つても決して內地に居る人が想像するやうなものぢやない。廣い野

原を支那商人の如きが時々商用の爲に通ふたのだらうと思はるゝ車の跡を道と云つてゐるのだ。だから轍の數の多い道丈それだけ信用が出來る理窟である。

それで我々も成る可く轍の數の多いそして今通ふたやうだと思はれる新らしい轍のついてゐる道の方に從はざるを得なかつた。此邊一帶は非常に起伏の多い所であつた。餘り不安に思はれるので近くにある一番高さうな丘に駈け登つて見たが遠くに羊の群らしいのを見るの外、車らしいものは更に見當らぬ。一體何の位歩いたらう。

「時間で考へるともう日本里數の三里は歩いたらう」

とIは言ふ。

此の日我々は朝から一食もしてゐなかつた。もう空腹を通り越してしまつて感じが無い。若し道に迷つたといふ不安さがなかつたらとても歩く元氣はなかつたらう。支那內地ばかりではなく內蒙古地方も皆二食である。旅をする者は朝四時頃の涼しい中に出掛けて十時十一時頃始めて食事をする。之を打尖(タチエン)と稱してゐる。それから熱い盛りの午後三時頃までを晝寢で過し、三時半頃から復ボツ〳〵出掛けるのだ。

午前中洪水のためにつひ打尖する時がなくて瓜を二三個食つたに過ぎぬ。王の食糧車について行つたのも何か食へるだらうといふ野心が無いでもなかつた。とり返しのつかぬとんだ野心である。併し腹の心配

などしてゐられる場合でない。もう道などに頼らず西と思はれる方面に向つて驀地に歩く事にした。

何でも此の先きでもう一つ河を越さねばならぬといふ事をふと耳にしてゐたのでその河に出合ひさへすればイヤでも本隊に合する事が出來るだらうと考へたからである。足にまかせてとはまつたく此の事をいふのだらう。「蒙古に寧日なし」なんて先き程の呑氣さは何處へやら眞劍に成つて歩いた。そして暮れ方近くに成つてやつとある部落を見つけ出す事が出來た。その中で一番大きな家の門口に辿りついたのはもう六時頃であつたらう。空に成つた水筒を肩から下して、「請給我冷水」とやつとこれ丈言ふ事が出來た。そこの若者はこの意外の客に眼を見張つてゐる。早速冷い水は運ばれて始めて甦つたやうな氣持に成つたが我々を見ようとして澤山の人が集つて來た。

「お前達は何處の者で、何處から何處へ行く」と聞く。

「我々は日本人で林西へ旅行するものだ」

とそれ丈は支那語で言へたが道に迷つたといふ事がどうしても言へなかつた。それでも先づ河の有無を聞かうと思つて、

「這邊兒有河沒有」

とやつて見た處この河の意味がサツパリ通じない。字を書いて見ても駄目だ。確かホーと二聲の發音であつたがと學校で先生に試驗されてゐるやうな、それよりまだ緊張した態度で尋ねるが何うしても解らぬらしい。上平、下平、上聲、去聲、有氣音、卷舌音と全部やつて見たら、何れかにぶつつかるだらうとホー〳〵〳〵と盛んに連發して見る。暫らくして

「啊河呀」

やつと通じたらしい。實際ホー〳〵の體だ。そこへ此處の東家らしいのが出て來て、

「從這兒還有十三里地、有一條河、這條河往北走」

と地面に書いて丁寧に教へて呉れる。お前達は何うして荷物はないのかと不思議さうに尋ねる。まつたくかう尋ねられるのも無理からぬ事だ。支那や內蒙古を旅行するものは、それが旅館のある地方であつても旅行中入用のものは例へば日本人には考へも及ばぬ夜具類までも携帶せねばならぬのである。我々が水筒一個の外何にも所持してゐないのでいぶかしく思つたのであらう。そこで筆談で詳しく道に迷つた事を說明した處、非常に同情して呉れて親切に教へて呉れた。

困つた時にはそれがタツタ水一杯の御馳走であつても相手の態度ひとつで何んなに有難く感ずることだらう。我々は此處で水をもらひ道を尋ねた丈に過ぎない。それだのにその純朴で親切な態度をいつまでも忘れる事が出來ない。

見渡す限り一望千里の大平野、方角定めのサインに成るものとては太陽ひとつだ。もしあの日あの原野で部落に出合はさず、又出合つても正しい道を教へてもらはなかつたら、何んな結果に成つたらうと今思ひ出しても恐しく成る。

こんな事をある本で讀んだ、或る人が戈壁の沙漠を旅してゐたら「至西——里 至東——里 有水」と刻まれた道しるべがあつたさうだ。篤志の人もあるものと近寄つてその裏面をのぞくと其處にはたゞ「南無阿彌陀佛」と六字の頌字が深く刻まれてあつた。その人は思はず合掌拜跪してしまつたと書いてあつたが、それがおもはず思出されて成程とうなづかれたので、

一、西日照る〳〵砂塵は燒ける
　地平線上雲もなし。
一、黄砂に塗れて胡北を行けば
　汗と涙に日は暮るゝ。
一、雁は南に夕日は西に
　心南に身は北へ。
一、馬賊出るかと待ち待ち行けば

馬賊出もせで月が出る。
一、駒の蹄に朝露しめる
　今日は巴林か烏丹城。
一、馬糞たき〳〵酒くみ交はしや
　何處ぢやかすかに笛の音する。
一、可愛あの子と巴林の奥の
　蒙古包住ひがしてみたい。

其の二　蒙古の奥に病みて

我々が巴林旗の王府、大坂上に著いたのは八月五日であつた。此處で一週間も休養したら薄氏等の一行に別れて直ぐ北京の方に向ふ考へであつた處、不幸にして俺れは到著の日より何となく腹ぐあひが惡く三日目から血便が下るやうに成つた。

隨分藥ものんだが少しも効目が無い。五日もしたら恢復するかと思はれたのに、十日經つても依然として赤い片栗のやうな便は止まらない。血便を見た日から赤痢だといふ事が解つたので何に拘はらず食事は

一切せずに斷食する事に決めた。五日、六日は體もしつかりしてゐたが十日、十五日と日が重なるにつれて腹が痛むのと食事をせぬ爲に寢てゐてさへ目が眩む程である。

八月の中旬と云へば日本では暑い盛りで、まだ海水浴をやつてゐる時分だのに、此處の朝晩の冷え方といつたらまつたく日本の十月の半頃と同じである。溫突式に土でたゝき上げたうへに薄いアンペラやうの物が一枚敷かれてあるばかりだ。夜に成つて其れが冷えて來ると腰が折れるやうに痛む。寢られぬまゝに腰に毛布を纏うて起上つてゐて過すやうな夜も度々あつたが、終には起き上がる氣力さへ無くなつてしまつた。

俺れが寢てゐる暫らくの間に野原の草は全部黃色く成つてしまつたさうだ。亦此の王府の喇嘛廟のお祭りを當て込んで千里を遠しとせずはる〴〵遠隔の地からやつて來て居た支那行商人等も天幕を疊んで二三日前に引上げてしまつたと云ふことである。

暮方に成ると窓から吹込むで來る風も身にしむやうに成つた。丁度野原の草がしをれて行くやうに俺れの體も見違へる程痩せてしまつた。友が氣をきかして室のそば近く便所の代りに穴を堀つて呉れたが、其處迄足を運ぶのさへもどれ程辛らく感ぜられたか知れぬ。

何時に成つても血便は止みさうにも無いので俺れはもう助からぬのぢやないかとさへ思つた。子供の時

分から病氣をした經驗がない丈に心細さも又格別で、夜に成るととりとめもない詰らぬ事ばかり考へ出されて此んな鬼のやうな頑固な奴もつひ涙がにじむのであつた。

思ひ出せば出立の日である、その前日まであつたお守札が何うしても見當らぬので心を殘して乘船したがそんな事がどうも此度の旅行が不幸であるといふ、所謂虫の知らせとでも云ふのではないのか、などゝ考へ出されるのである。

昨日も今日も幾百とも知れぬ鶴が群を成して羽音高く西の空から東の空へと消えて行つた。窓ぎはの柳の葉に羽を休めてゐた赤蜻蛉が又何處ともなく飛去るのを見て、冬に成らぬ中にどうあつても北京の方に出たいものだと俺れは眞劍になつて病氣の全快するのを神かけて祈つた。

忘れもせぬ十八日の晩の事だ、NとIは俺れの病氣があまり捗々しくないので、二十二日頃好便があるのを幸白音太來の方に引返す事にしようぢやないかと言つてすゝめて呉れた。汚ない異樣な古机に立てられた蠟燭の火がともすれば窓から吹き込む夜風に消えさうである。毛布を打ちかついで心配さうに溜息をする二人の顏を見るにつけ、何とも言葉の出ぬ先きに涙がにじんで來る。

二人に總てを任せていよ〳〵二十二日には白音太來に歸るやうに相談がまとまつたのであるが薄氏に相談した處、とんでもない事だ。之から十日近くもあの大車に搖られて見給へ、治りかけた病人でも死んで

しまふ、と一言の下に嚇かされて又此處で全快するのを待たねばならぬ事と成つた。

聞くところに依ると同文書院の學生も毎年四五人は此の病氣に罹つて旅先きで倒れると云ふ事である。醫者もゐない藥も食物も不自由なかうした不便な土地では死ぬのが當然のやうに思はれる。それでも廿四日頃になつてやうやく血便が止まつたので輕いおもゆを食ふことにした。薄氏が白米を持つて來てゐたのでおもゆも作る事が出來たのであるが、此處では買ひたくても米などは藥にする程もないのである。携帶して來たうめぼしと食鹽が此のうへもなく役に立つた。

血便が止つてからは非常になほりが速く廿七日には始めて普通の便があり、回數も一日に一回ですむやうになつた。實際をかしな話であるが久し振りで普通の便を見た時には、まつたくそれを拜んでしまつた。

床に入込んで、嗚呼自分は助かつたのだと思ふと嬉し涙が知らず識らずに頰を傳うて來るのである。

廿八九日頃からはおかゆも三杯づゝ食へるやうに成り、歌でも歌ふ丈の元氣が出て來た。三十一日は天長節であり且又俺れの誕生日にも當る日だ。此の日床上げときめて午後の暖かな頃を見はからつて湯をわかしてもらひ廿八九日振りに行水をした。病氣中唯一の友達であつた虱にも暇をつかはす事にして釜の中で引導を渡してやる。これでスツカリ人間に返つたやうな氣がした。

今は衰弱した體の恢復を待つばかりである。馬も鞍も調へられて、天高く澄みきつた秋の野に鞭を振つ

て北京に向ふ日が近づいた。

此の病氣中に忘れてならぬ事がひとつある。此の王府で相當權力のある蒙古警蒙團の團長で趙桂林といふ人がある。曾て薄氏に伴はれて日本に遊んだ事もあるといふ所謂蒙古では洋行歸りの新人なのである。

この人がある日俺れの所に見舞に來て呉れて、夏着ではさぞ寒いでせうと言つて自分の袷せの支那服を一枚下さつた。此處は王城のあるところとは云ひながら衣類など賣つてゐる店は一軒もないのである。蒙古人でも珍らしく情のある人だ。まつたく御禮の言ひやうもない程有難く感じたので早速何とかして自分の誠心も表はしたいと思つて持つてゐるものでさほど必要でないと思はれたものは何でもやつてしまふ事にした。

ドロップスひと鑵、針、白赤黑の木綿絲、赤のさらし木綿一反、鉛筆手帳、眼藥、腹藥、終ひに銀時計一個までふんぱつしてしまつた。處が一番喜ばれるだらうと豫期してゐた銀時計よりも、一瓶二十五錢の大學眼藥の方が遙かに喜ばれたのにはいさゝか面食はざるを得なかつた。それを以つても內蒙古地方が如何に埃が多いかゞ推察されるのである。一年中で春が一番ひどいと聞く。

九月九日まだほんとに恢復したといふのではないのだが、飛び行く雁の聲に誘はれていよ〳〵北京に向ふべく名殘を惜むで王府を後にした。

一、蒙古の原野に秋風立ちて
　今日も渡鳥南へ飛ぶ。
一、音信したくも蒙古の旅よ
　まさか矢文ぢやとゞくまい。
一、蒙古包近くコーロギ鳴いて
　あゝ今滿月白く冴ゆ。
一、ウルモかきまぜ炒米をかめば
　蒙古美人の味がする。
一、駱駝の首根に鈴子がひとつ
　靜かにひゞきつ日は暮るゝ。

偶言偶語

早稻田大學　川原一男

大連—奉天—四平街—白音太拉—コンドウ廟—開魯—愛根廟—バツスル廟—ホンホル廟—巴林王府—ジョゲン廟—南廟—高麗城—舊王府—チラチン廟—林西—大坂上—四平街—大連

第二班の詳細なる報告は東洋協會大學の中島君なり岩崎君なりに依つて完全になされる事と思ふから、私は一寸した見聞や感想を書いて報告に代へようと思ひます。

(一)我國の人口問題の對象としての蒙古

神話に傳へられる豐葦原瑞穗の國といふ大自然の惠みの最も多かつた大八洲も、大正の今日では國土狹少、人口過多、食糧不足の大問題に逢着しなければならなくなつた。

年々增加する七十萬の人口を何處に移すかといふ事は、政府當局、否一般國民の等しく惱む所である。よしそれが今日の國家組織を最高なるものとして禮讃し固守せんとする人々であつても、若しくはユートピヤの世界を憧憬してそれを否定せんとする人々であつても、「日本人入る可らず」といふ事がアメリカの議會を通過して法律化したのが一九二四年七月一日であつた事は、熱し易く醒め易いと云ふ健忘性を多量に持合せて居る日本人の耳にも記憶未だ新らしい事でせう。

加奈太あり南米あり濠洲ありと云つたところで、何地で日本人を喜んで迎へるの國があるか？　政治經濟宗教等々あらゆる方面に行詰つてゐる吾が國とは謂へ今更ながら國力の基礎要件である人口問題解決の道の近きにない事を痛憾せずには居られない。

此の時に當つて吾國民の頭に強く響くものは、所謂特殊權利内にある滿蒙である事は當然過ぎる程當然の事であらう。果して然らば滿蒙は日本の植民的對象になり得るであらうか？　どうか？　日本人に知り過ぎる程知られてゐる滿洲はさておいて、私は未だ其の事實に於て餘り知られてない樣な蒙古について是を觀察して見たいと思ひます。(蒙古といつても普通日本人の指すのは内蒙古の事である)冒頭一言にして結論を下せば、私は、蒙古は日本の植民的乃至は經濟的對象として價値なしと斷言する事を憚りません。

今迄多くの所謂蒙古通なる者は口を揃へて曰く、蒙古は土地肥沃にして一望無限の平原天涯に連り、牧草豊饒にして數百數千の牧群は悠々好餌に飽き、巨江大川は縱横に灌漑して肥沃の土壤を形成し、天然特産物としては大小の鹽湖と無數の曹達湧出が至る所に散在し、巨川湖沼に棲息する魚屬、山林曠野に產する藥草、又鑛物としては金銀銅石炭あり等、恰も寶の山かの如くに宣傳し誇張するけれども、實際に見たる私は――例へ其間四ケ月の短日月とは言ふものゝ――却つて其の宣傳の眞實でなかつた事を、邦家の爲に、長大息せざるを得ないのであります。眞實を知り得た――其の眞實を知り得たが爲に!!

蒙古には何物もない！ all nothingだ！　私は此の一言に依つて盡きると思ひます。なる程牧畜は盛んであるかも知れない。羊が山羊が牛が馬が。それが日本のために何を齎らすか？　それ等は今日の日本を救ふ九牛の一毛にもなるまい。或人は云ふかも知れない、直接人口問題の對象にはなり得ずとも、經濟的對象には十分になり得ると。一笑に附すべき言である。何物も無い所に投資して何を求むるか？　少くとも以上の事は私が實際に見たクラハン、アルコロテン、大小巴林、東西ウデムテンの各旗についてである。殊に蒙古各旗が殆んど開放地となつた今日では、肥沃なる土地は盡く漢人の所有に歸し、不完全とは謂へ其の金融機關、商業機關共に亦漢人の獨占する所で、恐らく此上邦人の侵入は到底許されない事である。

以上の如く私は蒙古について思考し確信するけれ共より以上に我國と植民的經濟的或は政治的に密接な關係を持つ滿洲について論ずべく餘りに研究の足らない事を遺憾に思ふ次第であります。

(二)　誤れる植民地特殊會社の保護政策

國家は其の植民地發展を圖らんがために種々なる方法政策を講ずるが、我が當局者は植民事業の經驗や研究に乏しく從來の特殊會社は多く甚だ不成績であつた。桂公の苦心した東洋拓植會社も、今回問題となつた朝鮮、臺灣銀行も亦然りで有る。殊に甚だしいのは私が實際ついて知り得た奉天の〇〇〇〇公司である。表面は麗々しく植民地開發、在滿鮮人救濟等と掲げて居るが其の内容に至つては實に驚き入らざるを

得ない。水田、牛馬買出、其の他いろ〳〵と經營しつゝあるが收支償はず而も年々缺損續きで有るに拘らず會社は不思議にも相當の利益配當をなしつゝある。收益無くして而も利益配當、眞面目に考へれば不可思議には違ひないが其の會社には缺損しても是を補つて尙且つ利益配當するに足る丈の金額が政府に依つて補助金として下附されつゝあるからである。何の爲の植民地發展ぞ！　かくの如くんば當初から其の金額を貧民に分ち與へた方がより以上に實際的で社會政策的立場から言つても有効で當然な事で無いか。貧民より徵稅して而して是れによつて一部資本家階級の懷を肥さしむる、此處迄行けば國家の植民政策も立派なものだ？　爲政者として十分考慮すべき事だと深く考へさせられた。

（三）　所謂顧問國賊なり?!

支那の督軍なるものには日支條約に基く特務機關なるものゝ外に所謂私設顧問といふ者が存在する。彼等は自らを以て任ずるに私設領事、日支親善の第一線に立つて活動する國士、大亞細亞建設のヒーローなりとして居るが、私をして言はしむれば吾が國の對支政策を誤らしむるのも、支那の排日を終息する所なからしむるのも、在留邦人の發展を阻害するのも、彼等所謂私設顧問なりと言つても、彼等は其の責の總てを囘避する事は出來まい。

彼等が表面國家を口にしながらも其の裏面に於て自己の利益に汲々たるを見る時、在留邦人の總べてが

彼等の横暴を叫んで居るのを聞く時、殊に大正十三年第二次奉直戰爭の際張宗相の軍に義勇軍として參加した同胞二十名の慘殺事件が起つた時、彼等が其の事件を隱匿せんとしたるが如き、發覺後彼等が其の事件解決の關係者たる事を拒んだるが如きは、明かに彼等に國家意識なく民族的意識なく單に張作霖乃至督軍等の一使用人に過ぎざる事を公表したるが如きものである。吾等はそれにつけても何故張作霖有つて督軍有つて日本帝國の存在を知らざる者が、速に帝國の籍を去つて中華民國に歸化しないかと疑ひを起さゞるを得ない。尙さうした人達が如何なれば日本帝國の衆議院議員たらん事を欲し且如何なれば左樣な人を帝國議會に送らんとするか、所謂選擧民の意志も忖度し兼ねる次第である。

（四）　在滿邦人は支那人に嫌はれる筈

人間は感情の動物である。若し他人が自分の家に來て我物顏に振る舞ひ、果ては自分の面上に唾し罵るに至つては、誰しも立腹し嫌惡せざるを得ない。日本人が滿洲に有つてかくの如くだとしたならば支那人の慣慨するのも無理はない當然な話だ。たとへ日清日露兩戰役に於ける多くの同胞の血に依つて得たる特殊權利があるにせよ、俺達は優秀民族だ、一等國民だと云つて威張り散らす、俺達は大和魂を持つてるんだと云つて力む。何が優秀民族だ、何が一等國だ、歷史を繙いて見ろ、東洋文明は何處から發生したんだ。吾が國の文字は何處から貰つたのだ。明治から大正迄五十有餘年、歷史にしたら一行に足らぬ位ではない

か。それが何で他を侮蔑する理由になるか。大和魂は何かと問はれても判然と返答も出來ない癖に。一歩進めてもう少し考へて見ろ、將來日本が支那といふものを切り離して生きて行けないといふ事を。貧乏な癖に二等車に乘りたがつたり、往來や汽車で不行儀不體裁な事をやつて平然として居るのは日本人ではないか。よし組織的な形式的な教育は受けてゐなくても孔孟の教は傳統的に彼等の品性を作つてゐる。もう今日からたとへ苦力に對してにせよニヤーとかチヤンコロとか云ふ言葉は無意識にでも發しない樣にしようでは有りませんか。

（五）被征服民族なるが故に、弱小民族なるが故に

今回の旅行中蒙古で支那兵三十名ばかり支那商人十五名ばかりと一緒に十日間程旅行をつゞけた事が有りました。其の時の記錄を茲に書いて見ませう。

それは何れの國でもの現象であるが、征服民族の被征服民族に對する强大民族の弱小民族に對する態度は實に目にあまるものがある。彼等支那人が蒙古人の家に入るや（家と云つても直徑一間半乃至二間位な移動式天幕みた樣なもので俗に「モンゴボー」と云ふ）案内を乞ふ所ではない、忽ち亂入して戸棚から押入れから食物を探す。若し鍵でも掛けて有れば鍵は銃の臺尻でぶちこはして了ふ。さうして蒙古人の生命の糧であるウルモ、ナイドウフは一朝にして彼等に平げられるのである、家の近くには折角蒙古人が丹精して

取入れて來たミイヅ、粟の類が高く積まれてある。彼等が驅て來る秋の其の日迄の食物として收穫された其の穀類は同じく支那人の馬糧とならなければならなかつた。支那人の乘馬や駄馬が足りない時彼等は蒙古人から馬を徵發して行く。炎熱燒くが如き中を彼等は其馬に鞭打ちながら馳驅する。徵發された馬の持主は之と共に進まなければならない。人と馬、彼等蒙古人は流汗衣を通して息は將に切れさうである。然し蒙古人は歸る事を許されない、死ぬ樣な思ひで次の宿泊地に到着するとはじめて解放されるのである。其勞力に對しては一錢の金すら與へられるのでなく寧ろ蒙古人自身で三拜九拜して歸つて行くのである。即ち尙明日迄も引張られないのを僅かに喜んで、彼等が用を命ずる時蒙古人すべては奴隷の樣にむち打たれながらも彼等に犬馬の勞をとらねばならない。犬は蒙古では家族の一員といつた樣な風に重用され愛されて。若し吾々が犬にむち打ちでもする樣な事があれば蒙古人の機嫌は甚だ惡い。家族以外の人が家の前に來ると一丁位先から猛然として吠へかゝる。例の如く勢よく群犬が吠へかゝると横暴なる支那兵は忽ち短銃を以て一頭を射殺した。然し弱小民族である蒙古人は是について一言の反抗すら出來ないのである。然し愛犬とは謂へそれは單なる犬一匹に過ぎない。私は茲に書く事さへも出來ない樣な事實を目擊したのである、彼等蒙古人の唯一の倉庫（堂々たる樣だが實は矢張りモンゴボーで周圍を土で圍繞したるもの）には彼等の貴重品や一年中の食物が貯藏されてあるのだ。狂暴なる支那兵は彼等の好奇心と持つて生れたる

盜癖心とに驅られながら鍵をこぢあけて中に入らんと努力して居た。是を見た五十ばかりの蒙古婦人は入られては一大事と極力防止せんと試みた、玆に這入る這入らせぬの爭鬪が起つた。氣狂に刄物と良く云ふが彼等の一人は面倒と思つたのか、拳銃でさへぎる蒙古婦人を倒した。ほんの一瞬間前迄動いて居た老婦人はもう動かなかつた。鮮血は淋漓として砂上を染めた。兵の上官らしき人も之を見て別に何とも云はない。他の同僚も驚いた樣子すらない、恰も當然なさる可き事を當然なしたかの如く聲さへ立てゝ囃した。同じく神から惠まれて此の世に息して居る者を、同じく神の子として生存權を有する者を、殊に何の罪もない者を、强者は强者なるが故に殺しても良いのか？　私は泣きたくなつた。罪なくして彼等の野獸性の犧牲となつた老婦人のために神に祈りを捧げる氣持になつた時涙は無限に兩頬に落ちて來た。殺された老婦人の夫らしい人も其の子供夫婦や小さい可憐な孫達迄が赤い死屍に取りすがりながら大聲をあげて永久に歸らない亡き人の魂を呼んで居る。何と云ふ人生の愁嘆場でせう。泣く事を許されたる蒙古人には、其の不法を訴へる法律的自由は與へられてないのだ。法的人格を許與されてない人達の慘さをつくづく感ぜしめられた。おゝお互ひは生きる權利を持つてゐる筈だのに、彼等は蒙古人たるが故に！　彼等は弱小民族なるが故に！

私が此の事件を目擊してから、日本に歸つて來た時支那には關稅會議が開催せられました。そして治外法權の撤廢、領事裁判の廢止、自由平等の要求等が支那に依つて提出せられて居ました。そして支那の若い人達が思想的にイエスの Humanity Love や Democraticism を高唱しマルキシズムやレーニニズムが肯定される聲を聞く時常に私は一人悲しくも虐げられつゝある蒙古の同胞を思はざるを得ません。

（六）最後に

或人が旅行したとしたならば其の人は屹度自分の旅行して來た地方は特別に珍しく、特別に良い所で、金山があるとか針山があるとか、まるで寶の山の樣に左もなければ特別に危險な所で、命掛けの冒險をやつて自分一人が此の難關を突破して來たといふ風に、又は、自分の旅行は行程何千哩で云々と云つた風に一種のヒロイズム的な事を云ふものである。かうした人情の弱點のために如何程人々が誤らされるか知れない。例へば內蒙古の如く何も取り立てゝ宣傳するものゝ無い地をまるで日本の行詰つた人口問題が之に依つて解決出來るかの樣に考へ込ませてしまふ。又、私達學徒の立場から言へば、所謂冒險旅行とか特殊的な探險とか、行程何千哩とか美文的な旅行日誌とかはさうした方面の專門家か乃至は單なる旅行者に任せて置けば十分だと思ふ。學徒としての旅行、其處には何か別の重大な意義があるのでは有るまいか？

總べてを科學的に觀察する、單に事實を見る、事實を紹介する、是で十分でないかと思ふ。かう考へたものゝ私は自分の不注意等から右の主旨の萬分の一も果し得なかつた事を非常に恥しく思つて居ります。

第三班

支那を旅した男の手記から

帝國大學　大槻文平

神戸―長崎―上海―杭州―南京―浦口―濟南―青島―青州―天津―北京―張家口―大同―雲崗堡―北京―大連―旅順―奉天―撫順―長春―吉林―ハルヒン―奉天―京城―釜山―下關

（一）上海學生聯合會を訪ふ

七月十八日、苦しい船酔ひから慣れの陸に着いた。そこは支那と云ふ國であり、上海と云ふ港だ。辮髪の苦力が淺黄色のダブ〳〵した服を纏つて譯のわからぬ掛聲で舟をひつぱるのもまだ夢の様な氣持で支那だと云ふ感じはちつとも起らない。稅關の出口で一少壯海軍士官がなつかしさうに話しかけたり、英國の巡査が馬の尻をたゝくやうに支那人のしりを擲りつけるのを見たり、馬車や人力車が見事に立並び金文字や黑文字の看板の町を眺めたりする内漸く支那に來たんだなと思はせられる。その夕から僕たち三人は雪竹、松代と云ふ拓大の親切なる先輩の下宿に落付いて懇切なる指導と厄介なる案内人の勞をとつて貰ふことになつた。

その翌日も暑い日だつた。東京なら郊外と云つた格の支那趣味を離れて全く西洋臭い所にある同文書院を訪れての歸り路電車を待つ間に雨が降つて來た。電車も日本の電車の様に絶えず動いてゐるのではなく時々思ひ出した様に溢るゝ計りの人を乘せて通るだけだ。その上頭等と三等とで頭等には主に外國人と上流支那人が乘り三等は中流以下の人が乘るとの話だ。餘り雨が長かつたし電車は待てども來なかつたので車で頓宮寛氏を訪れることにした。

一行中の宮崎君が途中ではぐれて苦しい異郷の家探しをやつたのもこの時だつた。

頓宮寛氏と云ふのは明治四十三年東大出の醫學博士で上海に居をかまへ開業してから既に五ヶ年、日、支、比、印度の四ヶ國人士よりなるアジヤ協會の首唱者として盛んに日支親善の爲献身的努力をなしてゐらるゝ方である。俺たちは種々歡待を受け意見を承つた後、氏の好意によつて學生聯合會の長たる顧穀宜氏に紹介の勞を採つて貰ふことを約して辭去した。

同月二十三日僕達は暴動の餘波未だ消えやらず各國の官憲尙租界の境を守備してゐると云ふ狀態をも顧みず平時にても邦人などの餘り出入しないと云ふ南市滬軍營上海學生聯合會に自動車を飛ばした。苦力の群がる細い看板道を自動車は素的なスピードで走つて行く。やがて降された所を見れば、東亞醫院と云ふ病院の前だ。古ぼけた病院だがその中に所謂這般暴動の黑幕として又急先鋒として活躍した聯合會は巣を

作つてゐるのだ。入ると直ぐ一人の人なつきのする顏付の胸に接待係の徽章をつけた學生がつか〳〵と進んで來て何しに來たんだと英語で問ふ。そこで名刺を出して二三押問答をなしやがて二階の應接間に通された。可成り亂雜に新聞や色んなものが散らばしてあり學生連は忙しげに右往左往しいかにも活動盛んなることを語つてゐた。應接間も頗る簡單なものだ。窓を通して向側に見える二階建はこの病院の寄宿舍で下は自習室上は勉强室で病院には學生も居ること宛も醫學專問學校の如く、學生聯合會の連中も總てこゝに起臥してゐることなどを彼等の口から知ることが出來た。

時にドアを排して入り來れる眼鏡を掛けた目のくぼんだ額の廣い、青白いと云ふよりは連日の活躍で生氣を失つたと云ふやうな顏付の左程大きくない一人の紳士が丁寧に一枚づゝ名刺を渡した。名刺には南洋大學機關士顧穀宜と書いてあつたので「この人だな」と思つた。氏は靜かに口を開いて態々訪ねられた勞をねぎらひ併せて今次の學生運動に關する意見を叩かれたが私見は有するも發表する程度のものではないからと斷つてしまつた。その後氏は淳々として流暢なる英語を以て支那の現狀を說き轉じて日本の明治維新當時の歷史を語り自分等の運動の是認せらるべきを主張し再轉して日本政府の從來の高壓政策に萬腔の反意を漏し一個人としては好感を有するのみならず世界に對抗する上から云ふも黃色人種の提携すべきことを溢るゝ許りの熱心と誠意とを以て述べられ、且つ五卅紀念のパンフレットや紀念繪葉書及 Union 血潮日報と云ふ機關新聞を貰ふ。氏は會議ありとて約一時間の後辭去、更に僕達は謝仁劉、袁文彰氏等と約三十分談笑の後門前迄送られて自動車の人となる。僕達は我友邦の學生と彼地に於て會見して彼等の流暢なる英語に魅せられ、更にその抱く所の正義感と目醒めたる人種的觀念とに感を同じうするものである。その繪葉書には總て官憲にやられたる男女の傷口等を示し住所、氏名、現場及びその後の經過等を記錄し以ていかにその慘忍にして冷酷なるかを示したものである。而してパンフレット中にても彼等は『凡てこれ等の傷はその背後より受けたるに注意せよ』と論じてその遺口の如何に卑怯にして如何に非人道的なるかを痛烈に非難してゐる。又その序言に於て、

「全支學生及び漢口の英國居留地、上海共同租界内の商人、日英兩國人經營の工場勞働者、及び汕頭廣東のストライキの際極度に達したる支那勞働者、學生等の慘殺ありし以來慘酷なる帝國主義者は傲慢にも彼等の欠點を自ら無視し、吾々中華の民たれば印度人、朝鮮人よりも更に冷酷に取扱ひ、彼れの欠點を洗ひおとさんとし、その巧みなる宣傳の力に乘じて支那はボルシェヴィズム或は攘夷の思想、或は赤色共產主義の思想に感染せるものとし、剩へ、支那新聞の發刊をも妨げたり。さればその事件の眞相を內、國民に對して公にする能はず而して外國人よりは徒に怨嗟の聲を聞くに至れり。かくの如き狀態の下に耐へ忍ぶは吾人の能はざる所今にして速に彼等の採りし態度に對して反抗するに非れば支那の國家的存在は全く危險に瀕するならん。これ吾人が悲劇の眞相を腹藏なく支那人並びに諸外國人に公にせんとしたる動機なり（と冒頭しその遠因たれば日本工場等に於ける支那勞働者虐使の反動に歸し、數多の例を擧げてその動物的取扱を指摘してゐる。その直接原因としては五月十五日日本工場に於ける Koo Cheng-Huang の射殺事件に端を發し、こゝに上海學生聯合會の活動となり、演說會のことより遂に五月三十日の南京路事件が突發し、全支に

渡る排外運動となつたものであるとなし、その間盛んに行れし各所の虐殺事件を述べ、最後に)要するに英日兩國人の目には支那人は恰も豚や羊の如きものにして人間として取扱ふ價値なきが如く映するものなり。前に述べし如く五月三十日に行はれたる慘劇の際の彈は盡く背後より打たれ又六月一、二、三、四日の上海を擧げて人々は戰々兢々たる折に際して彼等はその冷酷なる手段を緩和せずして愈侵略的となれり。今や頑强なる反抗をなす爲に支那全土はその精力を消盡して最善の努力を拂ふべき時なり。一致の反抗は吾人の前に開かれたる唯一の道なり。』

と結んで明なる反抗の强い叫聲をあげ擧國一致以て國難にあたらずんば遂に支那國の滅亡あるのみとの確信を吐露してゐる。吾々同胞が支那に於て他の文明人に對すると同樣の禮讓や親切さを以て支那勞働者を待遇してゐないと云ふことを彼等のパンフレットには誇張して書いてあるの傾向は無きにしもあらずであるが、事實無根には非ざるべしと思はるゝ多くの點を認めるものである。而して又彼等が現在受けてゐる待遇以上に價する熱心と教養と責任感とを有してゐるや否やについても疑なき能はざるものであるが、尙今夏の事件の遠因が確かに過去の支那人を冷遇したるその慣習を以て目醒めたる今日の支那人をも遇したと云ふ點より發してゐることは誰しもいなむことの出來ないことだらうと思ふ。又吾々がこれ等の運動に於て注目に値する處だと考へるのは凡てこの運動は盡く學生が主となつてやつたものだと云ふ事である。

北京に於ても亦五月三十日の上海事件の影響を受け北京の商界工界その他の商賣人よりなる各後援會及び學校側にては各校後援會學生聯合會等の連中が穩健なる思想の下に眞に國を憂へ徒らに驕激の擧に走ることなく只管着實を旨とし上海の同胞の運動を援くる意味に於て主として排英の宣傳を行つてゐたさうである。その後北京に於ける百四十三の學校の中五十三校迄加入して居つた學生聯合會に內訌起り、穩健派と過激なる徒黨とに分れ過激なる分子は所謂雪恥會なるものを組織し或時は聯合會の名の下に韜晦し或時は雪恥會の名によつて活動を續け排英のみならず排日をも大いに宣傳した。これ等過激なる分子は概ね露國より月額四十弗以下を支給せられ居る關係上主義に對する信念よりではなく只露西亞への義理立てと云ふやうな考から徒らに大言壯語をなし奇矯の行動をなし煽動騷擾をなしてゐるに過ぎないとの事である。一方學生聯合會の方は北京大學の教授連がその領袖となりて眞面目に活動してゐるものなるは衆目の疑はざる所である。後に吾々は青島を訪れ青島絲廠の鈴木格三郎氏を訪問したる際左の話を承つた。

鈴木氏がある年青州に行つた時(青州は濟南と青島との間にある寒村にして僕たちも同氏の好意によりこゝに下車し支那の田舍の風物に接し且つ監獄を見學した)丁度そこで排日運動が行はれ多くの學生を先頭に女學生迄が旗を持ち歌を歌つて示威行列をなして練り歩いてゐた。その時氏はその盛んなるに驚きつゝ立つて見てゐたさうであるがその夜同縣知事よりの招宴の席上で畫間行はれた示威運動の眞面目にして力强きものなることを賞讃し將來大いに爲すある青年の意氣を祝福した所が座に居る人々は凡て彼等の運動の餘りに外面的にして根據なく馬鹿騷ぎに過ぎないと言ふことを語つてゐたさうである。又吾々は上海

にて學生運動が起れば必ず學生に花柳病患者の續出すると云ふ話を耳にした。私はこれ等の人々の話にも拘らず尙支那學生運動の將來力强きを思ふは單に背後に露國のある故ではない。只彼等には眞に國を想ふの念が燃え上り彼等の中不眞面目なる分子を除いた多くの人々は心からその運動を起し而して支那全土の民も亦この運動に加擔し共鳴して動くと云ふ確かなしかも大きい事實があるからである。吾々はこゝに古い支那を見ないで新しい支那――即ち過去の慣習的な考へより脱した新しい眼を以て支那同胞を眺めねばならないと思ふ。

（二）上海から杭州まで

目が醒める。もう夜は明け放れてゐるが太陽はまだ登つてゐないらしい。妙に暑苦しくて石室の中に入れられて外から蒸されてゐるやうだ。寐卷は汗でびつしよりになつてゐる。と、ぎら〳〵照りつけて居ても立つても汗だくな上海の日中のことが重苦しく頭に浮んでくる。

紅塵、蟬の聲、車夫の群、上海は又してもかまびすしい生の渦卷と化してしまはうとしてゐる。やがてみんなが眼を醒して乾いた唇からポツリ〳〵物を言ふ頃になれば杭州行のことが一樣に思ひ起されて床を蹴る。

成るたけ輕い身仕度で、大銀に代へた重い財布を首にかけて外に出る。外には相不變車屋が三四人恰も僕達を待つてゐる如く端然として車をそろへてゐる。一三押問答の後小銀二十錢で一氣に停車場まで飛ばす。汽車は日本のものに較べると段違に巾廣だ。はゝあ廣軌式と云ふ奴だなと田舍者は獨り首肯く。一等二等は日本のと殆ど變らない設備らしいが三等と來たら可成りみじめだ。何のことはない日比谷公園あたりにある木製のベンチを背中合せにして中央にならべ兩側にも其ベンチを一列にならべたと思へば間違ひはない。從つて日本のやうに二人宛入るべしと云ふやうな不文律もない。だから電車式にお互ひに讓り合ひさへすればいくらでも座れるのだが支那人は大の字に寐そべつたり、猛烈に荷物を運び入れたりして知らん顏して煙をふかし他人が立つてゐようがそしらぬ面だ。蓋し大國民の襟度とでも云ふ所なのか。汽笛一聲と云ひたい所だがさうではない。支那式と云ふのかガン〳〵と兩三度鐘をならしたと見る間に汽車はノロ〳〵と動き始めた。勿論速力などには變りはないが時々停車場でない所に止まつて人を乘せたり機關手がポインターに手紙を渡すなど誠につまらない私の用件の爲に速力を緩めたりされるのには閉口した。

僕は初見參の支那の山河に少からざる興味を持つてゐたんだが沿道の畑や田はまるで日本と變らない。始めは田と畑とが錯綜してゐたが後には廣々とした水田許りとなる。竹籔もあつた、川も多かつた。働いてゐる多くの人を見たが小學校の讀本で習つた所謂樹下石上に煙草をくゆらして、行く雲を眺め走り去る汽車を見送ると云ふ景色は殆ど見ることが出來なかつた。只呑氣さうに水牛の群を追ふ子供達の姿が美しいま

でにのんびりしたものだつた。所々に堀立小屋のやうなものが突立つてゐる。一寸日本の四阿と云ふ形だ。その中の一つで一匹の牛が臼でもひいてゐるやうに一生懸命にぐる〳〵廻つてゐるのを不思議に思つて眺めたが歸途支那の學生からブロークンイングリシュで水を田に上す器械だと教へられて成程と首肯れた。

廣い廣い野原、四億の民を養ふと云ふも農家らしい物は所々に點在してゐるに過ぎない。極めて心細いものだつた。汽車の中では絶えずボーイが大きな聲で怒鳴り乍らやれ肉の煮つけたのや、パンや、色んなものを持つて來る。それを錢のありさうな者はその器物の中に指を突込んで甘さうな奴を取出す。ひどい奴になるとそれを掻き廻して底の方から自分の好きな代物を堀り出してゐる。あたりかまはぬ利己主義はこんな所にも發揮されてゐる。田夫野人らしい夫婦者などのこんなことをするのはあたり前だ位の感じしか起さないのだがつゝましやかなるべき女學生までがそれをやつてゐるのには一寸肝を抜かれた。彼等はよく食ふ。絶えず口を動かしてゐる。動かしてゐなければ淋しいのかしらと聞きたくなる。それから茶がある。ボーイは茶を賣れば茶器と茶椀とを置いて行きその後は幾度も幾度も新しい暑い湯を入れて廻る。日本よりも一層便利に出來てゐる。僕達も買つたら、銅幣二十四枚持つて行つた。恐るべき排日の宣傳はこゝまで入つて來て「英日貨抵制」と云ふビラが貼りつけてある。中で Beware of Pickpocket (すり御用心)との注意書が書いてあつたのには國辱をも忍んでやつて呉れたその親切さに驚くの外は無かつた。嘉善や硤

石と云ふ町には立派な城廓もあり小高い丘には昔ながらの塔が空高く聳えて五千年の夢を嘯いてゐるのもいかにも頭の中に描かれた支那と云ふものとぴつたりして嬉しかつた。停車場のプラットホームではよく教練してゐる兵士の群を見た。所々で新兵らしい五、六名の兵隊の一團の前に日本なら上等兵位に相當するらしい男が立つてゐて一人一人歩かしたり、鐵砲を擔ふことを教へたりしてゐた。「一」と號令をかけると兵士は一歩前に踏み出して同時に銃を前に持つて來て支へる、「二」と云ふと右足を一歩出して右手は銃の尾底に行く、「三」と云へば左足は更に一歩出て銃は肩に行くと云ふ風でまるで小學校の生徒にでも教へてゐるやうだつた。それでも大低一歩踏み出す毎にぐら〳〵ぐらついて大分叱られてゐるらしかつた。その兵隊さんには若い小い可愛いゝのも可成りなおとつさんに見えるのも居つた。汽車は一度止る毎に可成り多くの人が出入りする。いつの間にか僕達の側に一人の汚れた青い服を着た青年のゐるのに氣が付いた。彼は大分大きな果物の籠を持つてゐる。そしてニコ〳〵笑ひ乍ら僕達を見てゐる。帽子の徽章が例の支那國旗の表徴だつたので兵隊さんだなと直ぐ感付かれた。彼は大分ベチヤ〳〵話しかけてるらしかつたが支那語の分らない僕などは只その身振りから好意を持つてゐるらしいと推測することが出來ただけだつたが一行の宮崎君が話しが分りかけたのをきつかけに、いつか話を聞いたり筆談に耽つたりして杭州まで愉快な時を持つことが出來た。彼は僕達の差出した帳面に「我知中國字」と記してニコ〳〵してゐる。そこで僕

達は「你杭州行乎」と書いたら、いかにも人のよさゝうな顏をして笑ひ乍ら二三度首肯いて見せた。暫くたつて「我問你多少年記」と聞く。そして相不變嬉しさうに笑つてゐる。僕達はをかしさをこらへて當時剃刀もあてないで鬚面だつたのを幸ひに山本君を二十八とし宮崎君を二十五僕を二十三だと答へたら、僕の所を指さして笑つてゐる。恰も一番小僧なんだなと嘲けるやうに或は揶揄するやうに。その頃上海では江蘇省にも戰爭のあることが傳へられ河南省邊では既に開戰してゐるとの話が新聞紙に傳へられてゐたので「徐州邊如何」と書けば「平定」と恰も將軍の如く得意になり「何時北京歸乎」と問へば「三日後」と答ふ。

彼は籠を動かし始めたので「籠中何物」とたゞせば「網藍何物是草木實」と答ふ。彼はその一を取り出して僕に呉れた。それは支那でよく見受けられる日本で云へば海棠の大きい林檎の小いやうな形をし味もするものだつた。「名」を訊けば「鮮沙冥」と記した。「美味多謝」と愛嬌を振りまいてやつたら矢張り大聲出して笑つてゐる。北京は上海よりも暑いこと等を彼によつて知ることが出來た。

やがて杭州に着く。彼は重さうにその籠をさげて僕達に愛嬌を示し乍ら出て行つた。しばらくして僕達はうるさい車屋や宿引の列を漕ぎぬけて杭州の町を歩いてゐたら彼が得意氣に車を走らせ乍ら笑つて行くのに會つた。

三　南京から濟南まで

南京の停車場にも車屋は一杯群つて異郷の旅を賑はして呉れるが困らしても呉れる。汚い場末の町の様な通りを過ぎて城門に着く。番してる兵隊さんの目が異様に光る。これをくゞれば兩側に楊柳をなびかしてゐる支那獨特の道は領事館迄隨分長く續いてゐる。小銀三十錢では安い。漸く赤い鼓樓の立つてゐる一寸した廣場から右に折れて領事館につく。又金勘定で一騒動だ。分つたつもりだつたがとよく〳〵聞いて見れば上海で堂々と通用してゐた民國九年の小銀はこゝでは通用出來ず反對に上海では流通しなかつた民國八年の小銀はこゝでは流通してゐると云ふ奇妙極まる現象が原因であることを知つて、むづかしい國だとつく〴〵思つた。

南京は靜かな町だ。どちらかと云へば田舍臭い町だ。領事館の近藤氏に案内せられて明の孝陵を見る。齊燮元が李秀山暗殺の疑を晴す爲に作つたと云ふ秀山公園に遊ぶ。前者は夏草徒に生ひ繁つてそゞろに往年の盛時をかくし武士の夢の跡は僅かに數多の乞食が參詣人の後より面白いコーラスを演ずるに淋しさを癒してゐる。

後者は時めく人の手によつて四十萬元を費やされ、茶店、博物館、活動寫眞などの文化施設をほどこした西洋臭い所を見せて紳士淑女に散策の場所を供してゐる。

朝六時あわたゞしく汗臭い旅の衣に身を堅め好意の馬車に身を乘せて領事館を後にした。

昨日は人力車、今日は二頭立の馬車、長い道も石疊みの通りも、排日運動の渦中百二十人の同胞が一塊となり一團と固まつて悲壯なる沈默の反抗を續けたと云ふ凄壯な事件に追憶の絲をたどつてゐる中に、早くも過ぎて車は上海銀行前で止る。降りて直ぐに濟南行の切符を敎へられたまゝに買つて下關に着く。こゝは揚子江の岸、對岸は浦口、水は全く赤濁りだ。成程支那は溶けてゐるわいと思はせられる。浦口行の汽船は間もなく對岸に着く。停車場は目の前だ。可成り大きいがいかにもガランとした感じだ。

長いプラットホームの兩側には僅かに二臺の汽車が横はつてゐる。一つは裝甲列車で他はおなじみの普通列車だ。僕達は直ちに裝甲列車に乘らうとした所が車掌が切符を見てこの汽車に乘つてはいけないと右手の普通列車を指さす。僕達は驚いて驛長の所に行つて話した所が、『一方は特別急行で他は普通急行だ。そして君達の切符は普通急行のだからどうしても特別急行に乘ることは不可能だ。然し普通の二等に乘ることは差支へない』と頑として聞かない。僕は不足額は支拂ふから是非乘せて呉れと歎願したんだが彼は傲然として No it is impossible を繰返してゐるので取りつく島もない。日本風に考へて特別急行には急行券でも買へば乘れるのだらうと思つてゐたのに特別急行の切符は全然別物だつたのには驚きもし注意の足りなかつたことを殘念にも思つたが後の祭で如何とも仕方がない。見れば特急は各等共三人乃至四人が定員らしい部屋部屋に仕切つてあつて、美しい位コンホタブルなのに引かへ、一方は例によつて板詰の小屋だ。何時何處へ着くかも知れぬと人々に敎へられてゐたこの普通列車に乘り込むことは可成り淋しい氣持だつたが覺悟をきめて乘り込むことゝした。板のベンチにはもう慣れてゐるが蠅の多いのと天井の空氣抜などはどれも壞れてゐるのと就中電燈の設備のないのには閉口してしまつた。

やがて八時五十分、裝甲列車は天津差して動き出した。しばし悲しい氣持を經驗する。しかし僕達の汽車も十時が來ると走り出した。汽車は楊柳の道を驅け拔けつゝ進んで行く。左右は渺茫たる平原で果しがない、が全部開拓せられて田と畑とになつてゐるのに驚かされた。

日はカン〳〵と照りつける。汗は居乍らにして流れて來る。汽車の煤煙は粉になつて天井の空氣拔から猛烈な勢で降り注いで寐てゐると顏と云はず手と云はず凡て窪みのある所には盡く溜り込んでしまふ。外を見れば雲は廣い平野の中に點々として黑い影を投げてゐる。山もない、汚い水溜りが川ともつかず所々に道の樣に光つて見える。或所では鴨が泳いでゐた。畑には大低高粱が植ゑてあるので高粱の大海原を眺めてるやうだ。四億の民の饅頭(マントウ)を作るのかと思へば無理もない。

二時半頃だつた。弱音を吐かぬ約束だつたが遂に飯を食ふことした。兵隊を引連れて這入つて來る支那の車掌はうまい英語で食堂のあることゝ三等客も入れることを敎へて呉れた。僕達は席を爭ふ支那人の群

を後にして荷物をかつぎ乍ら食堂に入つた。にんにくと汗の化合した何とも云へない臭のする箱の幾つかを通つて僕達は食堂に來た。入るとすぐ兵隊さんがいかめしい顏付で『票！票！』と云ふから三等切符の青いのを出して見せたらこれではこゝへは這入れぬ。出て行けと云ふ態度を見せるで、隅で冷したサイダーを飲んでゐる先刻の切符係に話したら食つてもよいが食つたら直ぐ歸らねばならないと敎へてくれた。ここでは先づ〳〵豪遊に屬した一人前一元三角と云ふ Ti fin をとる。食ふわ食ふわ、パンは國辱も忘れて二三度許り代へて貰つた。二角のコムがきいたのかボーイは別に追ひ立てもしなかつた。止る停車場毎に兵隊が多數居つて何となく不安な樣子を敎へてゐるやうだ。僕達はやがて再びにんにくの部屋や、荷物を置く棚に蒲團を持ち上げて呑氣さうに寐てゐる奇妙奇天烈な部屋を驚異の眼で眺め乍ら最初の部屋に來た。既に最前の場所はよく太つた男が占領して蠅にたかられ煤煙に塗れ乍らうまいに耽つて居た。

約一時間の後僕達は再びゆつたりした座席を占め依然として降りしきる煤煙に惱まされてゐた。この車中の支那人は非常に僕達に好意を示し僕自身茶も呑まして貰つたし煙草なども呉れられた。只例の肉の煮つけはとても食ふ氣にはなれなかつた。八時日は漸く沒して異鄕の夕が訪れて來た時汽車は徐州に着いた。

その夜は一生懸命にトランクを腰にいはひつけて寐た。起きて見れば豆ランプが前と後にかすかな光を投げてゐるだけだ。煤煙は降る、汽車は不相變走つてゐる。後の方から時々サーチライトを照すのは馬賊を

敬遠するつもりなのか。車の中では殆ど凡ての人が默つて寐てゐる。こぼれ來る光で時計を見れば四時半だ。五時に着くと云ふ濟南の里も間もないわけだ。漸く明け放れた日は雨ぐさかつた。一時間の後僕たちは領事館に平塚氏の登廳を澁茶をすゝり乍ら待つてゐた。そして二時間の後には氏の好意でくまなく濟南を見物すべく馬車にゆられてゐたのである。

現實と印象

東洋協會大學　宮崎專一

神戸―長崎―上海―杭州―南京―浦口―濟南―青島―青州―天津―北京―張家口―大同―雲崗堡―北京―大連―旅順―奉天―撫順―長春―吉林―ハルビン―奉天―京城―釜山―下關

人種の前衛戰

上海！　詩と戀と劍のローマンスの町だなんて、淡い甘い豫想を抱いて行くならば、立所に裏切られる程、上海の現實はもつと深刻な、切實な問題を物語つてゐる。

上海、こゝは人種の市場である。白、黃、褐、黑等雜多な皮膚の色、樣々な顏面の構造。動物を燒く臭氣がプーンと鼻をつく街路に半裸體の苦力が叫び乍ら走る樣、棒を手にして巧みな交通整理をやつてのけ

る印度巡査、自動車を飛ばす英目米其他各國の爲替ブローカー、騷動成金、相場師、タバコを噛り乍ら勢よく歩くアメリカ水夫、お白粉をつけた下等な表情の白色婦人――それが皆デブ〳〵と肥つてゐる――淋しさうな土耳古人。

實にこゝは人種の前衛の混然雜然たるうごめきそのものである。うすぼけた赤煉瓦の町並に立つて聞くあの騷音は、世界の二十餘種からなる民族生活の騷音である。

この騷音の中に最も強く、あらゆる意味に力強く響くのは白人のそれである。

先づ上海統治の最高機關工務局を押へる者は殆んど全部が白人である。彼等は巡査を私有してゐる。機關銃を持つてゐる。大砲を備へ沖には軍艦が碇泊してゐる。

上海に來て白人の横暴を痛感しないものがゐるだらうか。

マドロス上りの無賴漢が安く土地を買込んで今では大した資本家になつてゐるものも多いさうである。彼等に金、利益の外に何の目的があり得ようか。あつさり言つて了へば金をあさる俗人の集合地、合戰場が上海だ。そこには人道も理想もない。愛とか平和とか合理的經濟組織の建設とかなら恐らく絶望の頂上であらう。支那人から見れば大臣でも殺人强盗犯でもボーイでも大學教授でも兎に角洋服を着てる白人なら皆一樣に偉く見えるに違ひない。

苦力は我々が好意を以つて接しても人間とは思へぬ位である。支那人の前衛は苦力から商人であるが之に對する白人の前衛は理想も愛も同情もない黄金狩りの連中である。極度の輕蔑心と武器とでドシ〳〵と侵入して行くのである。

彼等の本國に於て若し共産黨が天下を取つたと假定しても例を近く英國に取るまでもなく――巧みに財産を保管する事を心得てゐる彼等は依然として不正の搾取を續けて行く事は解り切つた事である。

支配されてゐる民族、壓迫されてゐる人種の下級生活者は三重四重の搾取と暴虐を受けてゐるのだ。之が果して平和的手段によつて解決出來るだらうか。只に上海のみでない。

吾々が經廻つた都は全部白人の鮮やかな足跡に蹂躙されてゐた。

例へば南京である。領事館のバルコニーに領事代理の近藤氏は指示して說いた。

「前方に大きな建物が見えるでせう。あれが米人經營の病院です。その右方の建物が教會で、病院の左方が學校でグーツと手前の方の廣場はゴルフ場です。こんな具合にして何時の間にか彼等は廣大な土地を獲得して了ふのです。こんな大仕事な大盗が今頃何處探したつてあるもんぢやない。金を持つて基督教の看板をかついで行けば利權の交換なんて實に好都合に行く國だからねー」と。

こんな陰險老巧な政策は到る處で見受けられる。白人の前衛は實に無人の境を行くが如くに進んで行く

のである。その數は決して少くない。

上海に於ける現實はやがて各地の現實に變化して行く性質のものではないでせうか。

これが果して平和的手段で解決出來るでせうか。その唯一の方法は白人の自發的退却である。然し之が可能でせうか。或は若し之等東洋諸人種、諸民族が武力に依つてこの横暴なる侵入者を驅逐し得たならばどうだらう。然しそんな事が果して可能でせうか。

上海のフランス租界には世界の弱少民族のあらゆる秘密結社があつてその支配民族の壓迫の爲に白晝も血腥ぐさい爭鬪が絶えないと云ふ事である。

若し果して世界の何處かに當然人種的爭鬪が具體化するものならばその前衞戰は確にこゝ上海ぢあないかと思ふ。

城　壁

支那は城壁の國である。都は素より田舍の少さな鎭に至るまで苟くも相當人の集まつてゐる所には必ず城壁がある。

北京、南京、四安は支那三大城壁、これに成都、開封、三四年前除かれた廣東の城壁など有名である。

尙ほ支那の人家は一軒々々小城壁に圍まれてゐるし、眼を擧ぐれば萬里の長城は支那一國の城壁をなしてゐる。

更に面白い事は支那人に接してゐると支那人各自が皆心の周圍に無形の城壁を廻らしてゐるのである。支那人の保守的な陰險な消極的な國民性及び獨立自尊と云ふ樣な一人よがりな國民性はかうした環境から生れ出たものと考へられる。

夏、周時代から城は已に存在してゐた樣だが支那の城壁は今の城でも日本の城とは大分異つてゐる。日本の天子又は封建諸侯と人民との關係は王侯の地位が安全であれば民も安全であり、王侯亡びて民亦亡ぶといふので王侯の居城ばかりを堅固にする。そして城下町だと云つて人民は城を取圍んで生活した。然し支那は四民平等で個人と個人とが對等の關係にあるからして一人の安全が必ずしも他人の安全を期する譯には行かぬ。

外敵を防ぐ城壁は凡ての民の城壁であらねばならぬ。で一般人も皆城壁の中に居住する。人が一杯になると更に外城を築く。日本の一の丸、二の丸と支那の內城、外城とは成因が全く異つてゐるのである。

かつて極東に遊んで支那を見たパートランド、ラッセル博士は城壁について左の如く言つた。「支那今日の不進步の大部分の原因は城壁にある。支那が城壁の爲、如何程保守的、不進步的、秘密的になつたかは殆んど想像以上にある。今日支那を改造せんと欲するならば先づ城壁を破壞せねばならぬ。」と力說し是は

心理學上一見して明瞭であると言つた。そこであの廣東の城壁は壞されたんである。

私は强ひてラツセル博士に反對する譯ではないが、老大國の天地には實に相應はしいあの城壁は何時までも取つておきたいものであると思ふ。

廣漠たる綠の平原を縫つて走る南京城の樓門が、生血の滴る樣な落暉に燃える樣に輝いてゐたあの雄大さ。海原の波の樣に起伏してゐる沙漠の中に屹然と立ち連らなる大同の城壁の上に、物凄い鎌の樣な弦月を仰いだあの神秘さ。そして蔦の葉の生ひ繁つた北京の城壁に接した時、あらゆる努力を費してもこればかりは保存して置きたいものだと思つた。

古代趣味豊かな公家樣町とでも云つたあのおつとりとした而も甘い感傷的な情緒は矢張りあの城壁の反映とでも云つた樣なものぢやあるまいか。

擊壤歌

北京から京綏線に投じて張家口を過ぎると大同に行く途中には未だ穴居民族の生活が見られる。

我國での穴居民族と云へばあの土蜘蛛と云つて已に古代の歴史を回想してみねばならぬ樣だし、武藏野に穴居の跡があれば目を圓くして珍重しますが、お隣りの支那では尙二千年以前の土蜘蛛を今でも現實に見る事が出來るのである。

見る所に依ると入口は幅四尺位で、高さは六七尺位のものである。崩れない樣に入口は木で支へられてゐるのもあるが支へられてないのもある。天井も床も勿論土である。

穴居せる山腹の土質は所謂黃土層で、固からず柔からず穴を穿つには最も適した土質であらう。山腹の土中に作られた家と云へば家だが、光線の透る由のものでなく溫氣も勿論强い。生活程度が如何に低いとは云ひ乍ら、此の陰氣な濕りの多い穴で生活して行く事は我々は想像だもなし得ない事である。

家族が死滅した爲だらうか。或は土地の崩壞した爲に他に遷つたのか所々に廢棄した穴を發見する事は何となく悲哀を感ずるものである。けれども穴の入口で支那人が長い煙管でスパリ／＼と煙を吐いてゐたり、裸の子供が驢馬を引いて穴から出て來る所などは堯舜時代の原始生活の有樣を如實に見る樣である。

そして彼等は至極太平な顏付である。

百姓も頗る呑氣さうに鋤を動かして居るし、牧童も相變らずの平和な草笛を吹いては羊を丘より丘へと追つて居る。

それかと思ふと皆首に鈴をつけた毛深いアフガン駱駝の隊商が昔ながらに悠揚として民族去來の舊道を旅してゐるのを車窓に見ると餘りに遠い時代の隔離に驚かざるを得ないのである。而かも彼等は何の不安も何の屈托もなさゝうである。

私は思はず「日出而作、日入而息、帝力何有干我哉」と歌つた太古の擊壤歌を思ひ出した。日本人は此の歌を解して帝力の普遍を謳歌し太平の象徴として讃へる。然しそこには生活の不安がなく、道德がなく法律がなかつた。井を鑿ちては飲み田を耕しては喰ふ。五卅事件も、關税會議も、大動亂も、共和政體も糞も何ぞ我に在らんやである。

支那に於ては或る問題の起きた地點を中心に十里の半徑を以つて圓を描けば、その圓周以外ではその問題は何等の論議の價値はなく、何等の反響も餘波もないもんなんだと云つた或る人の言葉を思ひ出して成程事實だと思つた。その地の情勢や問題の性質に依つてそんなに數理的には行かないにしても、半面の眞理は穿つてゐると思ふものである。

支那の兵隊

「日本人は何時も日本人の眼で支那と云ふものを見るから間違つてばかり居るんだ。よく俺は日本の人が支那つて實際譯の解らぬ國だ、とこぼすのに會ふが日本と云ふ觀念で支那を見てゐた日にや何時まで經つたつて解る筈はないよ。支那に來たら支那人になり切つた氣持で支那を見なけりや駄目なんだ。」

北京に居て支那風物研究會に立籠つてゐる中野江漢氏はムキになつてこんな氣焔を擧げた。書物の上でこんな事を讀んだ事はあつたが、上海上陸以來見る物、聞く物、食ふ物、只珍らしいと云ふ氣分一杯で、金のない上に暑さは暑し、唯もう夢の中を游いでゐる樣だつたが、北京に來て中野大人の慣語で成程さうだつたなあと氣が付いた。

日本人の眼で支那を見て最も大きに間違ふものは支那の兵隊さんだと思ふ。

支那の兵隊さんと云つても色々ある。けれども要するに支那の兵隊さんは全て現代の支那人であり、そして現代支那には多大の損害を蒙らしめてゐる兵隊さんである事は全國共に變りはない。一斑を見て此が全豹であると云ふ樣な誤信はしない積りであるが一部と全部の間に或る共通性の存する事は事實であると思ふ。

支那の兵隊さんは殆んど苦力の成り上りである。懶惰な苦力で食ふに困る樣になると直ちに兵となる。兵に居て不遇になると再び轉じて土匪となる。若し土匪に居て官兵の追擊急なる時は、又化して苦力となり、或は農夫となるのである。彼等はかうして常に苦力、兵隊、土匪と此の三界を循環して行く。それで見樣によつては支那の兵隊さんは苦力より土匪に移る過渡期の一變體であつて、蠶なら桑の葉を食つてゐる幼蟲時代である。

寒暑を超越して車を曳いたり、荷を運んだりして苦しくなつたら食ふには困らぬ軍隊に入るのが彼等として上策であり、軍隊に居て戰爭にでも負けて四散する樣な時には土匪になるに限るのだ。何故なら彼等

は軍隊に居て鐵砲の操法、散兵の仕方、略奪の方法を練習してゐるからである。

日本ばかりでなく何處の兵隊でも兵隊さんは國家を守り戰爭の時は眞先に飛び出して國家の爲に命を投出して呉れるもんだが支那の兵隊さんはこんな具合で片端しから國家、人民を蠶食して行くのである。風變りもこの位になると、あきれ反るよりも驚異である。

上海から杭州へ行く汽車の中である。我々の座席の横に軍服を着た一人の男がやつて來て腰を下した。見ると帽子も被らず大きな籠を持つた未だ二十歳位の男である。早速私は尋ねた。「君は軍人さんですか」ところが奴さんグツと反身になつて「勿論さ、ゲートルをしてゐるぢやないか」と云ふ。成程見れば足袋見た樣な鞋子の上に脛の半分程まで卷き上げたゲートルは破れかゝつて今にも崩れ落ちさうである。「帽子はどうしたんですか」と聞けばこれは又「こゝにしまつてある」と籠の中から取り出したのは正しく奴さん奉天軍だ。

「何故帽子を被らないかね」「帽子は一番大切なもんぢやないか」と嘯く。「では銃は君は持たぬ樣だがどうした」「銃は未だ隊長が呉れぬ」と少々しよげる。「君等の大將は何と云ふ人かね」「張大人」おや此奴知つてゐやがるなアと思つて「あゝ張作霖大人か、あの人は俺も知つてる。今支那で一番偉い人だらう」と云ふと「ウンさうだ」と先生得意になつてすつかり碎けて話しだした。そして籠の中に手を突込んだと思

ふと林檎見た樣な果物を取り出して喰へと云つた。

驛から驛には露營のテントが近くの野に幾つも見えて、プラットホームでは盛んに練兵をやつてゐる。そして嘉興驛の一つ手前の驛まで奉天軍だつたが、嘉興驛に來ると孫傳芳の軍隊が一杯居た。おやこんなに接近してゐてよく戰爭が起らないなあと驚ろいてゐると横に居た奉天の兵は呑氣に鼻歌なんか歌つてゐる。「おい君は何處へ行くんだ。もうこゝは孫軍だぜ」嘉興驛を出ると直ぐ私は云つた。「俺は杭州の屯所に行くんだ」と平氣なものである。杭州は孫軍の本營のある所である。私は何が何だか解らなくなつて笑ひ出してしまつた。全く妙なものである。

それから浦口で津浦線に乘る時である。三等車はギツシリつまつて宵の頃の東京の電車の樣な混み樣である。所が一番後ろの二臺はガランと空いてゐるので變だとは思つたが乘り込んで行くと四五人居た兵隊が「不行々々」と眼玉をムキ出して銃を構へる。こりや駄目だと思つて仕方なく前の方の入口に立つ事にした。汽車が動き出して暫くすると「査票」と黄色い聲で叫んで切符檢べが初まつた。十人ばかりの兵卒が二列縱隊に列んで銃を肩にして、何だか知らぬが長い劍を吊つて金條を肩に幾つも付けた隊長見た樣な奴と、それから紺の洋服にあつさりした金條を一寸肩に付けた奴が挾みを持つて乘込んで來る。頗る堂々たるものである。

査票は簡單で一寸切符を見る丈である。でも中には護照を見せろとか、名刺を出せとか、何處から來て何處へ何の用事で行くんだとかうるさく聞く奴が居る。解りもしない護照を丹念に讀むふりする奴がある。汽車の中での兵隊さんの威張り方と云つたら可笑しくなる位で、引つ切りなしに二三人連れで通るのである。日清戰役時代の遺物見た樣なモーゼルをズル〳〵引きずつて行く。幅二寸もある樣な皮で大きなピストルを木の箱に入れて吊つて歩いて行く。それに途中で二つもカーブした古い劍をしつかりと手に握つてゐる奴も居れば、幅の廣いグーツと反身になつた青龍刀の樣な刀を肩から吊つて一人々々を睨んで行く奴も居る。中には十七八の美少年も居るし五十も過ぎたかと思はれる樣な翁も居る。兎に角呑氣なもんだとつく〴〵感心する。只彼等は要するに食へば良いんだから。そして威張つて歩けば彼等の生活は充分滿足されるのである。

塵と汗と空腹とでグタ〳〵になつた體をやつと濟南領事館に休めてボーイの取次を待つてゐると「今直ぐ向ふで日本人の店が三軒も支那の兵隊に襲はれたさうだから行かねばならん」と警察署の人が云ふのを聞いた。

町を歩いてゐても軍服のまゝ銃はそこら邊に投出して柳の木蔭に氣持よく眠つてゐる兵隊さんも居れば帽子は小脇に抱へて上衣は肩にかけて裸で西瓜を食つてるのも居る。かと思ふと町角なんかに四五人集まつて煙草なんかふかして一體何してるのか知らんが歌を歌つたり話しをしたりしてるし、歩き乍ら燒餅を嚙つてる奴が居ると云ふ始末である。

善良な兵隊は羊の樣に命ぜらるゝまゝに走り、少し骨のある奴は民の物を掠め犯すことを能事とする。文字を知つて膽玉のある者は上に立つてそれを少し大仕掛に擴張する丈である。上督軍より下兵卒に至るまで只私利を圖るに汲々として國の產業がどうならうが平和がどうならうが一切御構ひなし。

上に立つ者は勢力を張る事を維れ努め、下に在る者は食を增さん事を維れ圖る。現に京漢線の收入は全部吳佩孚の軍費に入るが如く、稅は勝手に徵收する、兵は自由に濫發する。支那の民は自分達の安寧幸福の爲の兵に依つて反つて自分達の安寧幸福を侵害されて行く。支那の民は禍ひなる哉。

私は支那の軍人に對して將來の支那に何等の期待もなし得ない。實に彼等は支那を救ふ干城に非ずして支那を汚毒し、支那を滅亡に導く有害無益の徒である。軍閥は支那の癌であり、兵隊は支那の寄生蟲である。この爲めに支那のあらゆる機關は疲れ切つて彈力がない。廢督裁兵、現在の支那を端的に救ふ道は之である。然しそれは不可能である。何となれば現在の支那に兵力と金力の一番あるものは各地に割據する督軍であるし、支那人を職業別にした統計では兵隊と苦力が群を拔いての最大多數であるからである。

北京にて國民性を思ふ

今度の旅行で一番永く滯在した所は北京である。それ丈私としてはより多く、より深く支那人に接し、支那に觸れたと思ふ。滯在日數は勿論長かつたとは云へぬ。が私としては旅行中一番ゆつくりした氣分で居る事が出來た。あの消極的な、女性的な、そして文明が爛熟し切つた末路の悲慘を味ふ樣な氣のする北京と云ふ周圍の關係からでもあつたでせうし、一つは旅程をもう殆んど終つたと云ふホツトした氣分が伴なつたのでせう。

一國の都を觀ればその國の情勢を察する事が出來ると云へよう。我國の情勢は東京が之を代表するし、倫敦の英國に於ける巴里の佛國に於ける如く、全部と言へずもその大半はその國の首都が物語つてゐます。現代支那の大半は正に北京が代表する。今自分は見たまゝ聞いたまゝに可成漫然たるを免れ得ぬかも知れぬが支那の國民性に就いて少々記して見ようと思ひます。

一、金錢を尊んずる事

支那人が一體に、金錢を重んずると云ふ事は支那人に少しでも交渉のある人には直ぐに解る所である。一寸でも油斷したらすぐに胡魔化される。支那人は金を得る爲には手段は選ばない。賄賂の盛んなのもこんな關係から來たものだと首肯出來る。うまく金を使つて買收すれば大概の事は出來る樣である。

賄賂は支那人の血管にして、富は彼等の血液であると誰かゞ云つた。蓋し至言である。そして相手に弱みがあつたら幾らでも貪り取らうとする。こんな性質は支那人ならどんな地位にある者でも持つてゐるらしい。實に金の前には法律も、道德も、國家もない。

二、現實主義者である

支那人は徹底した現實主義者である。自分自身の毎日々々が愉快に暮して行ける丈で彼等の生活は全部である。

支那人が生命を掛けてまでも金を貯へると云ふ意志は、より面白く、より樂しく生活しようとする意志に外ならぬ。腹が減れば食ひ、渴すれば飲み、金がある時は呑氣に遊んで、金が無くなると出て働く。人の事は一切お關ひなしである。

三、國家觀念なし

支那は古來より天子なるものはその當時最も有力なるものが天子となると云ふ國であつたから、忠義と云つても常に其對象は變つてゐたのである。こんな具合で常に朝には北狄を天子と仰ぎ夕には又南蠻を天子と仰がねばならぬ樣な狀態であるから一國の天子に對する觀念よりも、一定不動な親子の間に於ける尊敬と慈愛との觀念の方が遙かに强くなつたのは自然の勢であると言ひ得る。故に支那に於ては、君

臣の關係が同一の君に對して一貫する事は不可能である。こんな所から支那は國家と言ふ觀念が薄いのではあるまいか。卽ち主權者に對する觀念が念頭に確定せぬ爲、この觀念が得られないのではあるまいか。支那を旅行する者は首都北京へ來ても、直ぐにこんな印象を得る程である。

こんな事からして自然祖先を尊ぶ樣になり國家よりも家族の方が重大視されて、家族主義が盛んになつたものと思はれる。

四、形式を尊ぶ

形式を重んずると云ふ事は善意に解釋すれば、禮儀が正しいとも見れる。然しあまり禮儀正しいので自分は此位人に敬せられてゐるのだと思ふのは早計であると知つてよい。支那人を訪問するにも挨拶丈で並大體でない。見ず知らずの他人でも非常に愛想(?)よくもてなす。だが眞心ではないらしい。

そして非常に體面を重んずる。所謂面子である。下から出て無暗に煽てると、嬉しさうに幾らでも調子に乘ると云ふ始末である。

それから外面を繕ふと云ふ思想から誇大妄想になるらしい。長江天を浸して流るは未だ良いとしても白髮三千丈とか、濁流天を排すとか大きな事を言つて喜んでゐる。計畫は出來ても實行がない。豫算は建つても決算がないのである。

五、文弱である

支那人は勇ましいキビ〳〵した所がない。從つて武に弱い。戰爭も弱い。軍隊の敎練を見ても實にまどろこしい程ノロ〳〵で不活潑である。其反面には氣の長いと云ふ長所もある。持久力が强くてグズ〳〵して何時までも力を持ち續ける所がある。で感激性に乏しい。排外運動で騷ぎ廻る奴等は感激の結果でなくて、金をもらつた無賴の徒の附和雷同が多いのだ。

六、質素である

支那人は一體に質素である樣だ。着物でも普通は木綿である。其他食物から住宅まで凡て質素である。こんな表面に現れてゐる物から見れば非常に彼等の生活は單純であると思はれる。然し彼等の心理狀態は非常に複雜である。一面質素で一面又華美である。質素であるのは金を貯める事からさうなるのであらう。幾らでも金を儲けた人の生活は仲々に華美である。

七、樂觀的である

支那人は實際呑氣である。應揚である。何となく大きい所がある。神經質でケチ〳〵した鋭角的の人間の前では、何だかゆつくりなれない樣な氣がするが支那人の前では概して氣安く戯談の一つも云へる樣な氣がする。

支那人は非常に天命を重んずる。天の命之を道と云ふの思想は支那人を一貫してゐる。支那人間に一番多く聞く言葉は「沒法子」である。あゝ天命だ、仕方がないと直ぐ何でも諦めて早く安心するらしい。早く云へば支那人は殆んど宿命論者である。

又支那人は相手が弱さうだとすぐ馬鹿にして了ひ、若し強ければビク〳〵である。支那人はそれをすぐ現はす。そしていやになる程、そんな事をして平氣でゐる。

八、大體に於て陰性である

支那國民は大體に於て陽性の國民ではないらしい。女性的である。消極的である。彈力が內的にも、外的にもない。尤も地勢の關係から南方人は可成に急進的な所もあるし、又砂漠の民である蒙古人は古來慓悍で有名である。亦宗教的關係からあの甘肅省あたりの回教徒は非常に勇敢であるらしい。

が大體に於て支那の國民は粘液質であると云つても大誤はないと思ふ。その顏面や、態度が如何にも鈍角的である。

以上は大體自分の氣付いた所を書き付けましたが非常に雜駁です。尙ほ仔細に觀察したならばその國民性は未だ未だ色々な事、色々な場合に現はれてゐる事でせう。そして地理的關係や宗教的關係から非常に複雜してゐる事と思ひます。

支那九省の監獄を訪ねて

明治大學　山本圭四郎

神戸—長崎—上海—杭州—南京—浦口—濟南—青島—青州—天津—北京—張家口—大同—雲崗堡—北京—大連—旅順—奉天—撫順—長春—吉林—ハルビン—奉天—京城—釜山—下關

今夏第六次旅行班の第三班に加はり中部支那研究の使命を帶びて約二ケ月の旅程を終へこゝにその報告をなすの光榮を有す。元より淺學にして菲才、加ふるに當時支那は排外運動熾烈を極め然も研究の範圍廣きに拘らず日時に制限あり從つて研究の徹底せざりしを遺憾とする次第である。尙余の視察したる監獄は上海に於ける江蘇第二監獄、濟南城外山東第一監獄、青州山東第四監獄、北京京師第二監獄、奉天第一監獄であるが是等各個の監獄についての詳細なる報告は紙數上しばらく割愛し、こゝには單に上記監獄の一部づゝを綜合してその概略を述べる事を諒とせられたい。

抑も法治國に於ける監獄制度の重要なることは今更余の喋々するを要せざる所である。彼の Holzendorff は "Der Urteil der Strafe ist nur die Form der Vollzung giept den Inhalt." と云ひ Van den Tek が "Sagt mir erst wie Eure Jelfangnisse beschaffen Sind, und damn werde ich Euch sagen, ob Euer Entwurf gut ist"

と答へたのを見ても刑制の實體たる監獄の施設が如何に重大なる意義を有するものであるかゞ解かることであらう。若し監獄辯護の位置に立つて之を見れば刑法及び裁判の運命は一に繫つて監獄制度の適否如何にありとも云ひ得らるゝのであるが、少くとも刑法と裁判と、行刑卽ち監獄とが互に睦じく握手して三角同盟を形作るに非ざるよりは到底圓滿なる刑事制度の活動を全うし能はざるべしと斷言する事が出來る。卽ち刑法及び裁判に生命を與ふるものは實に行刑であつてこの行刑機關の備はるものあるに依つて始めて刑事立法をして有終の美を濟さしむることが期待し得らるゝ譯である。然るに近來隣邦支那に於て治外法權撤廢の聲喧囂を極む。この時に當り余は斯る見地より假令杜撰なりと雖も支那の監獄の施設を紹介することを以て意義あることを信じ敢て一斑を紹介する次第である。

現在の監獄は淸朝の末期に於て各省に模範監獄囚人作業練習所を建設したるに始まる。然るにこの監獄は數年ならずして終に不首尾に終つた。この失敗の原因は監獄を總括指揮する中央の權力なかりしに起因する。玆に於て民國元年七月（西曆一九一二年）全國司法部を統括する一局が設けられた。之れ卽ち行刑局であつて此處には局長一名課長數名が置かれてゐる。而して前模範監獄の中第一第二第三は司法部の直轄となりその他のものは檢察廳に屬することとなつた。次いで民國三年九月（一九一四）監獄行政組織に關する法令を發布し各監獄には典獄長一名課長三名教誨師醫師作業技手各數名を置く、而して之等の者の中大總統の任命に依る者もあり、又司法大臣の任命を受けて就任する者もある。尙囚人の收容人員少き小監獄に於ては典獄長の代理に看守長を以つて之に充つることが出來る。看守長とは科長の官名であつて科長は看守長の職名である。

次に監獄はその事務を處理するため科を分つて三となし、之に各一名宛の科長を置き各科の主管事務に關しては、監獄處務規則第二十三條以下に於て之を規定すれども第一科は文書會計第二科は戒護第三科は作業用度を司る。

註　監獄處務規則　第二十三條第一科主管事務左ノ如シ

一、各種文件規則之起草及審査
一、職員之登用轉任免職叙等進級賞與懲戒年金給助及履歷簿之編輯保存
一、在監人領置物品之受付及保管
一、刑期之計算及刑之執行處分
一、公用及在監人使用書籍之整理及保管
一、在監人之携帶乳兒及分娩
一、赦免假釋減刑之申請及執行事序

一、在監人出獄及疾病死亡之通知
一、在監人接見及餽遺物之處分
一、預算決算及經費之出納
一、男監守及女看守一切傭役之用免試驗
一、不屬各科所主管事項
一、印信之典守及蓋用
一、統計之編輯及其材料之收集並各報告之成作
一、文書之收發處理及編纂保存廢棄等項
一、職員人民在監人之請願等之審査及處理
一、收發室之監督管理及值班順序方法之査定
一、在監人書信及令狀等一切文書之收發
一、在監人身分調査及身分簿之編制管理
一、在監人之撮影及保管

第二十四條　第二科主管事務左ノ如シ

一、監獄警備及在監人之戒護檢束
一、男看守女監守之勤務配置及休息
一、看守以下之教習及訓錬
一、看守寄宿舍之管理
一、戒具及防火機之使用試驗及管理
一、監門及諸門之啓閉並其鎖匙之管理
一、在監人之押送
一、在監人之食糧衣類臥具雜務之分給及保管
一、衛生消毒清潔法之施行
一、作業之督飭檢査
一、購入物之分配及管理
一、作業器具之檢査
一、在監人監房工場之異別
一、在監人各種呈請之調査

一、在監人之行狀視察
一、在監人接見書信之監視檢閱
一、在監人之疾病死亡及屍體之處分
一、在監人逃走之追捕
一、在監人入浴理髮之施行
一、監獄出入者之管理
一、監獄內全部火具之管理
一、在監人書籍之授受及管理
一、看守以下使用公物之監督及檢査
一、在監人賞罰之施行
一、在監人教誨教育之管理
一、食品之檢査
一、在監人餽遺品之檢査
一、監房及工場之檢査

一、墓地之管理及灑掃

第二十五條　第三科主管事務如左

一、物品之購入收支及保管
一、建築及修繕之工事施行
一、不要品之變賣及保管轉換
一、製作品之定做保管變賣
一、物品賣價及工錢之徵收
一、保證金之保管及郵券之收支保管
一、傭役之雇人
一、建築物及官有財産之管理
一、工業之種類選擇
一、工業之存廢調査
一、工業之課程工錢之估計及等級之升降
一、作業者之配置及轉役

一、作業日課表之調査
一、工錢及給與錢之調査
一、製作品販賣之評價
一、作業之原料製品機器之收支及保管
一、在監人食單更衣之調査
一、看守以下貸與品之調製及保管授受
一、在監人被服臥具雜物之調製及保管授受
一、工業請負之契約

而して前掲の幹部になるためには監獄の研究をなしたる者であることを條件とする。現時各省全部に於て、大總統の任命に依る典獄長十四名、司法總長の任命に依る者、典獄長、分監長合せて六十八名である。又科長たる看守長二百十四名で普通の監守長一千六百二十二名全國に配置せられてゐる。

民國二年(一九一三)十二月監獄官廳の組織及び行政に關する規則を公布し、續いて各監獄官吏の資格、及び職務監獄事務處理の方法、看守昇進に關する規定を發布す。民國の當初に於ては監獄の研究を目的としたる學校を設置したる省もあつた。次いで、政府はこの學校に關する規則を發布し、その規則に依ればこ

の學校に於ける必要科目は左の如くである。

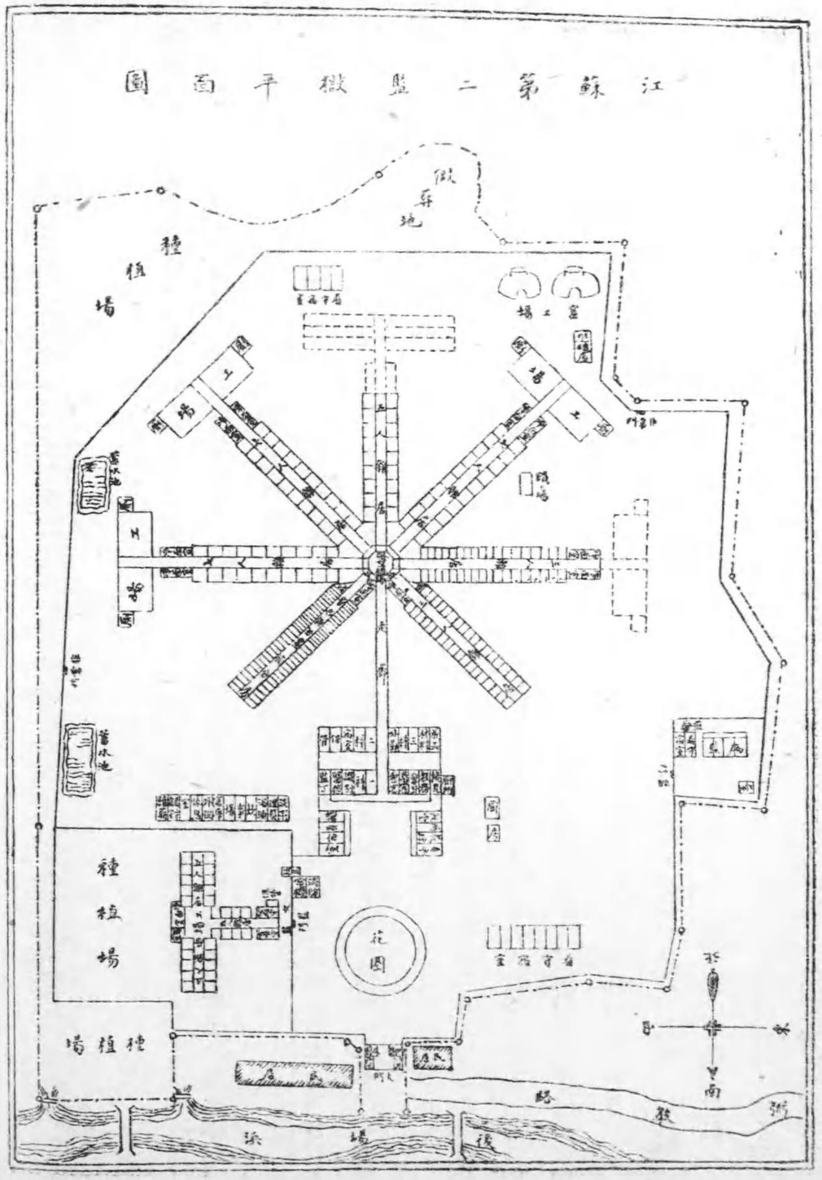
法學通論、憲法、刑法、裁構法、監獄學、監獄及び監獄事務に關する法令、刑事政策學、感化事業、免囚保護事業、指紋法、警察學、社會心理學、衛生學、統計學、監獄建築學

この學校の卒業生は、實務練習のため新式監獄に行く。又民國十年(一九二一)行刑事務調査會及び行刑制度研究會に關する法令を發布した、この法令に基いて新舊監獄官吏は交互之等の機關に入るため召集せられて、こゝに練習訓練せられることゝなる。

司法部は監獄を改良する目的を以て、監獄を新築すると共に舊監獄の改良を計畫してゐる。この計畫によれば、年々北京及び各省首府及びその他重要都市に於て新式監獄を建築することゝなつてゐる。その收容人員は大なるものは二千人、小なるものは四百人乃至五百人である。建築方法は、獨居房、雜居房を併有するものであつてその一房の面積は衛生を顧慮して定め、囚人の待遇は感化主義を採用して居る。

既設監獄中最も完全なるものは、北京第一乃至第三、直隸、奉天、吉林、山東、山西、江蘇、浙江、湖北、安徽、江西の各第一監獄であつてその數總計拾個所以上あり、これらの外に稍不完全であるけれども新式の部類に屬するものが四十以上を算し得る。その他は全部舊式のものであるが之等は前述の如く年々歲々建てかへることゝなり、舊式監獄の改良の計畫としては、舊監獄を修繕改良し、作業場を增設して監

江蘇第二監獄平面圖



獄官吏の任命を愼重に詮衡し、獄の清潔囚人の教化を期することゝなつてゐる。以上の如く監獄改良の目的とする處は從來の獄吏の惡習を除き囚人の苦痛を輕減するにある。試みに新式監獄に於ける收容人員數は別表の如くである。

監獄名	人員
北京第一	一〇〇〇
北京第二	一〇〇〇
北京第三	五〇〇
直隸第一	五〇〇
奉天第一	一〇〇〇
山東第一	五〇〇
山西第一	一〇〇〇
江蘇第一	五〇〇
安徽第一	三〇〇
江西第一	五〇〇
浙江第一	五〇〇
湖北第一	五〇〇
吉林第一	五〇〇

以上は支那に於ける監獄の沿革並びに一般制度の一端について述べたのであるが、之より更にこの制度が如何に實施されてゐるかに就て書いてみたい。

現在山東省には六個の新式監獄がある。卽ち第一監獄は濟南城外、第二は芝罘、第三は濟寧、第四は青州、第五は濟南城內、第六は青島にあり、現在凡て高等檢察廳に一任して監督せしめられ、第一第二の監獄は司法部の直轄ではない。從つてこの第一第二監獄の費用も政府より支給の形式であるけれども現在は全々不支給である。又殘り四個の監獄費用は山東省より支給せられることゝなつてゐるが、尙訴訟用紙代及び罰金を以つて之に充てゝゐる。因に訴訟用紙代は一ヶ月約二萬圓、罰金約五千圓である。此監獄で一

ケ所五百人收容して一ケ月に要する費用は三千五百圓である。

高等檢察廳長は梅光義氏と云ひ、早稻田大學法科の出身で大正五年就任、今年七月までその職にあつて拾個の新式監獄建築計畫に向つて努力し、第六まで完成したのであつたが七月末日を以て辭任せられる樣になつて居た。

監獄の建築方法は別揭の圖の如く放射狀をなし甲乙丙丁戊己庚の七枝に別れてゐる。一棟の中央をコンクリートの走廊が縱貫してゐて、この兩側が監房となつてゐる。甲監は三人の雜居房で三十六房、乙監も亦三人雜居で三十六房、丙監は七人の雜居房で二十房、丁監は五人雜居で十八房、戊監及び己監は七人雜居で各三十房、庚監は晝間及び夜間の獨居房で、六十房あり、現在在監者は男女民刑併せて六百二十二人である。一房の廣さは獨居房は十五立方米、三人雜居房は三十五立方米、七人雜居房は之に準じ、通風設備としては橫約二尺、縱一尺二寸の鐵柵の窓あるのみで座席は土間より二尺位の高さに床をはり白布にて作れる厚さ約五六分位の上下二枚の布團を敷く。この布團は支那に於ける一般人の布團と變りなく就寢の際でなくても之を敷き起床の際只上布團のみ疊みて下布團の上に重ねておくのである。夜間に於ける燈火設備は、日本の刑務所のそれと變りなく二監房の間に十燭光の電球がある。排便の方法は房內に便器を置き使用後は之を各自排便所に持ち行きて掃除するのである。

作業は委託と官司のみであつて請負はない、勞役時間は午前が七時間、午後が六時間でこの外晝食が一時間、敎誨が一時間となつてゐる。而して作業の主なる種類は左の如くである。

布織、紡績、獄衣製作、靴底製作、燐寸製造、製粉、洗衣、炊事、椅子製作

以上の作業に於て得らるゝ純益は毎月平均二千圓位で、囚人の口錢は成製品の五分即ち一日三十錢乃至四十錢位である。

次に食事は一日二食とし常食として高粱、粟、大豆を製粉して之を混合し團子となしたもの及び麥製の團子で、その一食分量は普通前者後者を各三個宛給與することゝなつてゐる。この團子一個の目方は十八匁である。副食物は一日銀四錢である。然しこの食物の分量については作業の成績及び作業の種類に依つて增減があることは我國の刑務所に於けると同じである。又作業の成績を五等に分ち、百五十點を以て滿點として最上等とし、百點以上百四十九點迄を上等、八十點以上九十九點迄を中等、六十點以上七十九點迄を下等、五十九點以下を以て最下等となし、上等には黃色、中等には赤褐色、下等には灰色、最下等には白色の獄衣を着せるのであつて最下等の者に對しては減食を命じ、給料の支給を斷つ事になつてゐる。

尙附言したいことは山東第四監獄に於ては作業衣と房衣と同一であつて、奉天軍の軍服の拂下品を使用してゐたことである。これについて典獄長崔凱廷氏は、「目下監獄の財政上止むを得ざるに出でたるもの」

なる旨辯明してゐた。

次に獄則に違反するものに對してはその輕重に依つて次の如き罰を以つて之に臨む。

一、面會通信の禁止
二、減食
三、手足捕繩聯鎖
四、窄衣
五、獨居房
六、暗室獨居房(四等に分れ一日、三日、五日、七日間施行)
七、中腰の儘にてゐる設備の獨居房

尙囚人相互の間に於て逃走準備を發見したる者に對しては二十圓の賞與金を與へ、更に衣類の新しきものを給し、惡事をなさゞる樣指導したる者に對しては新しき衣類を與へる。

圖書については囚人のためになる書を監獄より貸與することになつてゐて、その冊數は一回一冊に限られ讀み終るまで之を貸し、終れば直に教誨師に渡して更に次の本を請求することが出來る樣になつて私本や手紙は係官の檢査の結果獄則に反せざる限り幾冊幾通でも之を許してゐる。こゝに獄則に反せざるとは

監獄が囚人の教化を期する上に支障を來さざる限りなることを意味し、囚人のためになる書籍とは宗教書技術方面に關するもの、及び偉人の傳記等にして宗教書は主として佛教に關するものが多數である。最も之は山東省、浙江省、江蘇省の各監獄に於ては、教誨をなすに佛教を採用してゐる結果であると考へられる。尙教誨のことについて附言したいのは、山東省に於ては高等檢察廳長自ら監獄に赴いて囚人に教誨をなすとのことである。

入浴については時季や勞役の種類に依つてその回數を異にし春秋は十日に一回、冬季は一ヶ月二回、夏季は一週間に二回、一回の入浴時間は十五分間乃至二十分間に限定されてゐて設備は浴漕とシヤワーの兩樣がある。

次に假釋放については累犯者に對しては之を許してゐないが、全國に於て民國四年より同十二年迄の間に於て假釋放を受けたるものを示せば次の如くである。

民國四年　二十件
同　五年　七十二件
同　六年　八十二件
同　七年　百二十一件

同　八年　百二十九件
同　九年　百四十七件
同　十年　二百十四件
同　十一年　三百四十九件
同　十二年　三百三十件

而して奉天第一監獄に於ては民國九年に三件同十三年に三件を出してゐる。

最後に矯正院及び拘置監について少しく述べてみたい。

民國に於ては滿十二歳以下の幼者に對しては刑責を負さず、十六歳以下は減刑することになつてゐるから十二歳以下の犯罪者は之をその家族に引渡し、十二歳以上二十歳以下の者は普通の監獄に收容される。是等の囚人は他の成年囚と雜居を許されず適當なる教育が施される。卽ちこの教育の方法は讀書算習字唱歌を以つてし十八歳以下の少年犯罪者の監獄を矯正院と稱するのである。民國十二年(一九二三)に之が完成せられこの經營は司法部より前總理大臣熊希齡氏に委託せられたのである。同氏は現に山西省に於ける貧民學校の校長を奉職してゐる。最近この矯正院に對して各省より少年の犯罪者を移さんとの計畫があるけれども未だ實行に至らない。その外普通の監獄以外未決の被告人民事被告人中義務の履行を强制する目的を以つて拘留を必要とする者に對し、拘置監が設けられてゐる。各拘置監に對しては一人の長その他數人の官吏が置かれてあつてその監督は地方檢察廳長に屬し檢察廳のない地方に於てはその監督は司法權を併有する知權に委ねられてゐる、拘置監の管理、誠護、衛生に關しては一般監獄に於ける規則と同樣であるけれども、その規則には作業に關する部分なく勞働に關する義務を免除してゐる。

尙監獄の醫師について一言しておきたいことは、監獄には支那式の醫師一名と西洋式の醫師一名が置かれてあることで病を得たる囚人は何れの醫師に診察を受くるも彼等の自由である。

以上五個の監獄を訪ねて予に最も印象を深からしめたるは作業の盛なる事、(尤も前述の作業については都合上最不振なる山東第四監獄を例示するの止むなきに至り盛んなる江蘇第二監獄、その他に就て述べ得ざりしを遺憾とするが)囚人の取扱について徒らに規則にとらはれざること、衛生諸設備の不完全なる點であつた。而して作業の盛なるは現在の如く中央の權力微弱にして監獄を支持する費用の支給不可能なるに於ては監獄は自給自足以つてその任務を全うせざるべからざるが故にその生命を支持する食物たる財政に於て、梅氏の言の如く作業は實に生命をつなぐ重大なる一要素である。而して生命をつなぐためには之に依つて利益を獲得しなければならない。この點に立つて監獄を見ればそれが營利を目的とする社團に非ずとも結果から見れば卽ち一の犯罪人收容會社と云つてもよいと考へる。余の斯の如く極論する所以は斯の

如き傾向が惡いと云ふのではない。又この傾向を喜ぶからでもない。唯止むを得ざるに出でたる此事實が余りに規則にとらはれ經濟的觀念に於て缺乏せる我刑務所に何等かの暗示を與へらるゝが如く感ずるが故である。

衞生設備不完全なりと云ふも之を民國一般の社會を標準として考ふる時は監獄は衞生設備不完全なりと云ふを得ず。何となれば民國一般民衆の衞生思想不發達なるが故である。其一例として夏季に於て蠅の著しく多いことは周知の事實であり、尙余等一行が到る所に於て少からず困惑を感じたる如く便所の設備殆ど皆無なる事を以ても想像することが出來ると思ふ。然もこの衞生たるや科學に立脚して考察せざるべからざるものなりと信ずるが故に、彼の科學的に不發達なる民國人の一般社會の狀態を標準としてこの設備をなすことは頗る誤れるものであると考へる。即ち余が衞生設備不完全なりと云ふは支那一般社會を標準として云ふに非ずして科學に立脚して文明諸外國民の社會生活に於ける衞生狀態を基調として述べたのである。然れども江蘇第二監獄京師第二の監獄は此點も可なり完備してゐた樣であつた。次に食物の點に就ては前に述べた如くであるが民國一般人は一日二食であつて、その常食とするものは前揭のものと略同等であるとのことであつた。讀者殊に一日三食を採る我國人が一日二食にして食物の內容が異ることを以つて直ちに甚しく民國に於ては囚人を虐待してゐると感違することを恐れてこのことを附言する。

今や民國は醒めつゝある。吾人は叙上の監獄の制度並びに施設に於て之を見る。此現象は決して馬賊上りの軍閥や老獪にして私利私慾に汲々たる所謂政治屋連中が醒めたと云ふことではない。實に純眞にして愛國の念燃ゆるが如き青年學徒の醒め來つた結果なのである。彼等が有する五千年の歷史より傳統的に養はれ來つた大陸國民特有の艱難に處して悠々泰然たる氣分と、根强い持久力とは、それが愛國の炎と結合することに依つて必ず近き將來に於て驚異に値すべき新なる民國の建設を實現せしむることを疑はない。假令內財は政の混亂と軍閥の跋扈に痛み外は二三大國の貪慾あくなき利權侵害に苦しむと雖も、斯くて治外法權も求めずして徹廢せられなければならないであらう。

第四班

朝鮮滿洲を經て黄河流域に遊ぶ

帝國大學　野村市治郎

下關―釜山―京城(仁川)―平壤―新義州(安東縣)―奉天　撫順　―(長春)―哈爾賓―大連―(天津)―北京―天津也(北京)―鄭州―漢口―西京―蘇州―上海(杭州)―長崎

△近來夏期の報告書中に朝鮮に關する記事が少しも見えないのは甚だ奇異な現象である。斯會の趣旨から見ても當然この地の狀勢を知らなければならない。若し朝鮮の地が我が國に併合された故に研究しなくともよいと云ふならば、それは大いなる偏見ではなからうか。勿論知り盡されてゐるならば議論の余地はない。然し私の考へる所ではこの方面の知識はまだ〳〵乏しいと思ふ。それ故に先づこの同國内の民族の研究が第一に必要ではあるまいか、依て將來この地に旅行員を派して眞の融和に貢獻したいものである。

△小學校でよく聞かされたあの一葦帶水の對島を越えて釜山に上陸したのは七月十六日の夕方であつた。人口約七萬の中内地人が二萬餘人である。この少數の内地人の爲に鮮人は壓迫されて見る蔭もない。服裝こそあの純白のゆつたりした清雅なものを着けてゐるが一つの動作を見ても完全に被征服者であると云ふ感じを與へられる。あの馬の毛で作つた帽子を載いて歩く樣は誠に貴公子然としてゐる。又狹い乍らも緣に立膝をし乍ら長い煙管でスパ〳〵煙を吐いてゐるのを見るといかにも悠長で恰も英雄閑日月と云ふ感も與へられさうである。私は目のあたりこの光景を見たのであるが想像と離れること甚だ遠い。何處に獨立の意志があり努力があり根氣があるか疑はざるを得ない。何う見ても彼等はその日その日を氣樂に暮し得れば足ると云ふ格好である。鮮人部落と云はれる所は云はゞ得手勝自己流とでも名づけたい樣な、道具も何も用ひない石と土と自己の勞力とで作つた小さな堀立小屋が多い。之は防寒裝置の上から狹いことを必要とする點もあらうが、主としては經濟上の關係からであらう。遊んでゐる人が多いため彼等の收入が那邊にあるかは疑はざるを得ない。小規模の少數の農業の外には此の地では殆んど正業とも云ふものは見當らない。或は内地人經營の會社等に雇はれてゐる者も可成り多くあるであらうが稠密せる建物の周りにウヨウヨと蟻の樣に澤山ゐるのを見ると徒食してゐるとしか思はれない。

△十七、十八と引續いて雨が降つて錦江、漢江は氾濫し京釜・京仁・京元・馬山の諸線は不通となつた。電信

も通じないので何時修復するか分らないので甚だ不安であつたがやつと二十二日の午後から龍山へ約一哩と云ふ鷺梁津迄通じたので直ちにその汽車に乘り北上する。鐵道は目下朝鮮總督府で經營してゐるが本年四月迄滿鐵の經營する所であつた。機關車は內地のものと異り車輪が十個もある偉大なものだ。內地にあるものゝ最大は九個、小さいものは七個しか車輪がないと云ふ。客車も勿論大きくして三等寢臺附である。長い旅をしなければならない私達には甚だ好ましかつた。鐵道沿線は耕作山林共によく發達してゐて、子供の時朝鮮には赤土の山ばかりあると聞かされてゐたのに案外少いので豫想を裏切られる。奧地に行けばまだ〳〵赤山の所が多いと言ふ。汽車が水害地に近づくに從ひ一望水で洗はれたと云ふ悲慘な光景を目擊する。稻は最早何の役にも立たず水で枯れはてゝゐる。その損害は實際何萬町歩か分らない。鷺梁津から一二驛手前の處などでは客車の座席の邊迄浸水し、坐つてゐる私達の眼と殆んど並行の電信の針金に塵芥の懸つて確然と其の跡を殘し、如何にその侵害程度が甚だしかつたかゞ覗はれる。此の大洪水の被害地に對し總督府では四百萬圓とかの馬鈴薯稗等の種苗を給して農作?の應急策としたとか。鷺梁津に着したのは翌日の午前九時過ぎであつた。こゝから龍山迄の途中の漢江の　鐵橋が破壞されたとの事でこの間は徒步聯絡である。汽車が着すや否や何處から現はれたかと思ふ程澤山のチゲーの群が文字通り列車を取卷いてずらりと列をなしてゐる。チゲーとは負笈を持つた荷物運搬人を言ふのである。連絡の狹い道路は人力車や馬車が通るので洪水のため餘程惡くなつた道を彌が上にも狹められ一列縱隊をなして進行せざるを得なかつた。破壞された人道橋の方は約一町半位砂洲の上を步かねばならなかつた。この漢江の鐵橋は通常の水面から四十尺の高さにあるが今度の洪水により十六七兩日の雨では三十八尺五寸に及びその後直ちに襲つて來た十九、廿兩日の雨で遂に溢れ出し、四十三尺五寸と言ふ高さに增水し橋は流さるゝに至つたと言ふ。勿論直ぐ近くの龍山の町は大部分浸水の憂き目に會ひ暑き炎天の下に被害物は曝されてゐた。

△京城に這入つたのは廿三日の眞晝中、都のあつた處丈に市街が整然としてゐる。水道破壞されしため水攻めに會つたには私達も可成り閉口した。この地の大學豫科の敎授の話に依ると豫科にも鮮人學生が約三十名ゐるが內地人學生よりも一般に成績がよい。是は或は鮮人學生は家庭にあつて遊ぶ道具や機會が少なくして專心勉學に沒頭するに反し內地人學生は語學その他凡ゆる點に於て惠まれた地位に在り乍ら遊ぶ時間が多過ぎて殆んど勉强をしないからだと。鮮人は一般に敎育程度が低い。小學校でも義務敎育はなく僅かに學齡兒童の約二割が敎育を受くるに過ぎない。始めは鮮人と內地人の兒童を區別して敎育するが小學四年生頃から一緖にしても立派に並行して行くことが出來ると言ふ。如何に彼等が語學の才能に優れてゐるか是を以ても分る。高等敎育を受くる者は主として法律經濟等を選ぶと云ふ。之は多分權利義務を知らんとする自然の慾求から出たものであろう。又鮮人の習慣として若し一家の中誰か一人出世して高官になる

とか金滿家になるとかする、その緣故の者が總べて寄食のために集まると云ふ。この習慣は却つてそれ等の人を自滅に陷らしめるのだが、この習慣を無視する者は絶交される危險があると。

總督府の脊後にある南山の朝鮮神社の境内から市街を一望すれば内地人街と鮮人街とはその建築に依て劃然と區別される。市街を取卷いてゐる山の所々に萬里の長城を眞似たと思はれる壘壁が長く連つてゐる。景福宮は舊宮殿である。その中國王が外國の使臣に謁見されたと言ふ勤政殿は特に立派で人目を惹く、四十八本の大花崗岩柱で作られた慶會樓は蓮池に圍繞され昔時の宴會の盛大さを彷彿たらしむるものがある。美術館には新羅時代の佛像彫刻を始め三國時代の發掘物、樂浪時代の遺物、その他各時代の彫刻、繪畫陶磁器、金物細工等が陳列され文化の跡を一堂の中に集めてゐる。現在製作不可能と聞く精巧な高麗燒を見ては、時の推移と人間の文化の必ずしも相伴はざることを深く印象される。一日李王殿下の御住居である昌德宮の拜覽に出掛けたが生憎時刻に遲れて殿下只今御庭散策中と云ふ理由で拒絶される。

△朝鮮には音樂がない。否民衆娯樂としての音樂がない。是は甚だ不思議な現象の一であると思ふ。李王家には今尙立派な所謂禮樂あり五十四の樂器が存してゐると言ふ。彼の支那の聖人周公旦時代に用ひられた孔子の所謂禮樂は六十六種の樂器から成つてゐたものであるが、本家本元の支那には現在存せずして傳來國の李王家に僅かに十二種欲けたのみで傳へられてゐるのは、實際奇妙な對照であり又喜ぶべき事である。斯の如く王家には立派な音樂が存してゐるのに一般民間には殆ど音樂と名付くべき娯樂機關の存しないのは何を物語るものであらうか。音樂の如き趣味なければ自然生活が無味乾燥になり潤ひも慰めも情も無くなるのは當然の事である。彼等の顏を一見した者は誰しも、木石の樣に表情なく曖昧などは少しも感ぜられず、喜怒哀樂を總べて灰色の皮膚に押包んだ人形の樣に思ふであらう。それ故に何うしても生活改善の一方面として音樂の普及は是非必要な事と思つた。今一つは朝鮮には子供の玩具、遊戯道具が少ないことである。私達日本人の家庭では殆んど全部の家庭で子供の玩具を見受ける。玩具の子供を慰め撫育する力は偉大であると考へられるのに、この玩具遊具の無いために彼等の子供は殺風景な性質に化せられ形式的にのみ教育され一面文化の進歩を阻止されてゐるものと言ひ得よう。この故に幼時の精神的の教育と云ふものを朝鮮民族に與へる事が目下の最大急務ではあるまいか。

△何故京城に都を定めたか成程漢江には臨み三方山に取圍まれて要塞地であらう。然し發展の餘地が殆んどない。私は何故こんな處を擇んだかを一つの謎として七月廿七日京城府に別れを告げ北上平壤に着いた。かの日清戰爭の古戰場として名高い牡丹臺、乙密臺を訪ひ、箕子廟に詣でる。こゝには甜菜糖の製造工場がある。砂糖大根は微妙な作物で栽培が甚だ難かしいさうである。又町の近くに樂浪都時代の古墳が澤山ありこの方面の研究が盛んになつて來たと言ふ。

△短い淺い眠りを起され急いだが停車場迄の電車は仲々來ない。時は刻々迫つて來る。眠れる車夫を起して走らせんとしたが見掛取りの暴利に憤慨し空元氣を出して駈足をやつたが發車時刻に間に合ひさうにもない。止むなく又もや車夫をたゝき起して走らせる。車上で氣のみはやきもきするが肝心の車夫には言葉が通じないのか平氣な者だ。乘込んだら發車と云ふ危い目に合つたが乘車すれば苦心は笑にまぎらして辛き經驗として葬つて了ふ。切詰めた旅行はつらいものだと云ふ事を今更乍ら味ふ。汽車は北へ北へと走つて行く。平壤には米國人の建てた學校及基督教會があつて米人が盛に布教してゐる。彼等は布教するにも朝鮮語を數ケ年間習ひその上鮮人の習慣を知り家庭に出入して人望を得以て鮮人の精神教育に從事しその影響甚だ大なりと言ふ。而して彼等は命を堵してその道に進み實に固き信念の下に活動してゐると。さる米國の女宣教師は故國に歸省中死亡したが、遺言により布教地たる平壤にその墳墓を定めて遺骸を送り來り埋葬されたと言ふ。是を以てしても如何に彼等精神教育に携はる者が進取の氣象に富み、全生命を自己の天職に拋つかを知ることが出來ると思ふ。

午前十一時新義州着。紳名をライオンと呼ばれてゐる北鮮の開拓者多田氏の好意に依りプロペラー船に乘り鴨綠江を溯る。此の水が我が國と支那との境をなしてゐるのだと思ふと何となく同じ水とは言へ重大な意味がある事を感ずる。氏は此河の航路作成の先驅者にして幾多の危難に遭遇しつゝ遂に四百哩の上流に達する事に成功し爾來定期船を運用して交通不便な北鮮の地に一大福音を齎した。その開發當時は北鮮の民が五里餘の道を遠しとせず雲霞の如く集り迎へて瑞喜の涙を流したと言ふ。夕方鴨綠江上の鐵橋を徒歩で渡る。橋の眞中は鐵道、兩側は人道である。人力車は通る事が出來るが自動車は通れない。斯く道幅を狹くしたのは當時自動車なる觀念なく、唯密輸出入を防ぐためにしたのだと。河幅は約七町、河上は支那側の岸にあるジャンク船と上流より流れ來る筏で彩られてゐる。この筏とには實に大規模なものあり筏上に家を建て數家族住むも稀ならずと言ふ。日本人の作つた筏と支那人の作つた筏とは材木の結合の仕方が異つてゐるので一目して判然する。卽ち前者は葛にて流れに自由自在になる樣にしてゐるに反し後者は材木の端に穴を明けその中に小丸太を貫きて之を結合してゐる。午後六時(日本の)頃安東縣卽ち外國の地に生れて始めて足跡を印し、私の生活の上に一大歷史を作つた。此處は僅か七八町しか離れてゐないが新義州とは全く趣を異にし何となく支那と云ふ氣分がする。人種生活風習が凡て新しく印象され流石に大支那と言ふゆつたりとした氣分に取卷かれる。その上支那料理を饗應され支那の實際の一部を嚙る。僅かに橋一つ境として輸入となり或は輸出となり、物の値段に上下あり氣風生活が全く異るのを見ては甚だ奇異の感を懷かざるを得ない。我が日本租界と支那街とが警察權の違ひから全然秩序が異つてゐるのも面白い現象である。

新義州にて鮮人小學校を參觀し、二年六年の男生徒と六年の女生徒の話を聞いたが皆元氣で恥かしがらない。二年の生徒はまだ日本語を習つてから日が淺い爲テニヲハを間違へたが六年になると內地人と少しも變りがない。その話す所は皆教訓格言じみたもので私達の幼時流行した事が今行はれてゐるものと思はれる。稅關は橋の袂に嚴然と控へてゐて通行人を一々取調べる。汽車でこの橋を通過する者は日支稅關合意の上協定に因り安東縣の驛內に兩國の稅關吏が出張し共同して取調べる。稅關長の話に依れば年々歲々密輸入多、く之が取締りのため北鮮の境一帶に關員或は雇人を派して防止に努めてゐる。殊に冬期結氷の時期に至れば徒步連絡を爲し得るを以て殊に、甚だしく密輸入者と關員との雙方の掛引は實に巧に且盛に行はれ、密商は同業者相互聯絡をとり關員の隙を覗つては出入する。三回に一回成功すれば安樂に生活し得るを以て、勞せずして生活せんとの望みより敢て危險を冒すのだと言ふ。而して若し發見さるゝ時は大抵荷物は遺棄し身を以て逃ると。是は捕はれし時は密輸入の故を以て罰金を科せられその上に品物は沒收されるからである。

△安東縣にて一時間時間を遲らせる。標準時が異るからだ。廿九日午前十一時二十分發の汽車にて南滿洲の野を橫切る。沿線は高粱大豆が主して栽培され長白山脈の支流の起伏に數多の河川の繞るありて實に景色がよい。遼陽に近づくに從ひ丘陵の上に日露の役に我軍が血を流せし章の石碑が默然として當時を物語つてゐる。奉天に着いたのは夕方であつた。此處はもう純然たる支那と云ふ感じを起さしめる。驛前が廣く放射狀の道路が先づ私の目に付く。滿鐵公所から紹介狀を貰つて同善堂と云ふ慈善孤兒院兼養老院を視察に行く。之は日淸戰爭の時開壤の激戰で勇名を轟かした趙將軍の滿洲督軍時代の個人創設に係り爾來省の經營である。孤兒教育が完備してゐて徒弟學校の如きも中にあり立派に生活し得る技能を與へて社會に出すと言ふ。棄兒の方法は先づ窓あり兒を棄てんとする者は此窓から中へ入れると窓の戶は閉ぢ同時に棄兒の重量に依り鈴が鳴つて事務所に棄兒あることを通知する樣な仕掛になつてゐる。鈴鳴るときは棄兒を拾ひに行き直ちに乳母を募集する。この時よくその母親がすう〳〵しくも平氣で乳母募集に應じ來りて雇はれると言ふ。この樣に棄兒が平均一ヶ月に七、八人位あると。小學教育を終へると男は約十二才に達して自己の好む職業を見習ふ。多くは技術上の仕事卽大工織工鍛冶工の養成であつて自活出來得る樣になれば社會へ出で、女は十七、八才迄女の爲すべき事を一通り教へ込み一般希望に應じて結婚せしめてゐる。勿論之には一定の金額を支拂はねばならない。又此處に浮浪人とも言ふべき食ひはぐれの老人が三十名餘居たが多い時は七、八十名に及ぶと言ふ。隨時に出入を許してゐる故に人數の增減絕えず外でいゝ職業があれば出て行くと。之は養老院と思はれるが生活が絕對に安定な上に至極簡便で甚だ合理的な制度であると思つた。この樣に無料で徒食せしめると、益々浮浪人を增加せしめる樣に考へられるが彼等支那人は面子

を重んずる爲に比較的少いと言ふことである。斯の如き大規模な慈善院は少ないであらう。紛れる處があるためか毛の一部に種々の色彩を施した羊の群と土饅頭の如き雜然と起伏せる墓地とを兩側に見て隨分道の惡い中を馬車を驅けさせ北陵見物に出掛ける。北陵の前で太鼓や鐘を鳴らし黃色赤色の服を着けた妙な格好の行列に逢つた。後で聞けば北陵へ雨乞ひの參拜に來た者だと。莊麗且偉大な建物にしばし驚の目を見張る。皇帝の徵であると云ふ黃金色の瓦、或ひは赤綠の色彩が燦然と金箔に映えて、偉大なる國の統治者淸の太祖高皇帝の寢陵たるに恥ぢない建築である。城內に張氏の住む公署を見、中央公園の中央にある日露役の我が忠士の碑を弔ふ。奉天は人口廿萬餘その中邦人は二万五千餘居るが多くは滿鐵及びその關係會社の仕事に從ふ者か或は之等の人々に生活品を供給する商人であり、進んで城內なる支那人街に入りて彼等と競爭して商賣を爲すが如き元氣ある者がないとの事誠に我國民の發展上歎かはしい次第である。而して今や滿洲に於ける邦商は彼等のために次第に競爭場裡より驅逐され、又邦人滯在者も城內に於ては二割以上物價安きに拘らず同族相憐れむと云ふか將面倒を避くる爲か之に赴く事を爲さず態々邦人の商品を購ひて生活し邦商をして發展の道を阻むものあるは慨歎に堪へざる所である。此の市で不思議な事は雷車の無い事である。斯の如き人口多く且平坦な地にある町に何故電車が無いか?! 理由はその問題が屢邦人側から提議さるゝも資力なき支那側が獨占にて之を敷設せんとする故に話合がつかない爲ださうである。

一日撫順炭坑見學。其の埋沒炭量實に九億噸を算せられ一日壹萬五千噸を授炭して居り之が採掘を終了するには今後百年の長年月を要すと聞かされて甚だ意を强くする。露天堀に蟻の如く小さく孜々と働く人達を見て甚だ男性的な仕事だと思つたが大山坑の百二十尺とか云ふ地下に這入つてあの生暖かい風と濕氣に接しては工夫をやる元氣も失せて了つた。新市街は水道電氣瓦斯の文化的設備或は公園、公會堂、倶樂部の施設ありて模範市街と云ふ名に反しない。採炭者苦力は生活費一日十錢內外で實に安價に暮してゐる。因に給料は一日約四十錢であると。宿舍はアンペラを敷いた丈で一列に並んで寢るのであるが彼等は休日になると胡弓を奏き歌を歌つて自ら生活に潤を與へ紳々たる餘裕を示してゐる。鮮人に比して雲泥の差があると思つた。

△八月一日の朝我が國の勢力範圍の終點とも言ふべき長春へ着いた。吉長、東支の二鐵道と滿鐵との連絡地なる爲輸出又は移出の貨物が甚だ多い。貨物は一旦此處で積換へられ再び出て行くのである。近年露西亞が東支鐵道の實權を握つてから浦鹽を經て海外に貨物を出さん爲運賃率を低下し南滿鐵道により南下するを防ぐの策を講じたる爲滿鐵は之に對抗するに苦しき立場にあつたと言ふ。蓋し營利に汲々たる支那商人は道の遠きを物ともせず勞力如何を問はず少しでも安價な運賃に因り利を占めんとする。それ故に東支鐵道は西伯利亞鐵道と南滿鐵道との中間に位しその運賃率の高低は直ちに兩者に影響を及ぼすのである。

△長春迄は驛の組織構造等は內地同樣であるが一歩北上すれば經營全く異る故に凡てが變つてゐる。驛毎に支那人が果物、鳥の丸燒、肉等を隨意に窓の下に賣りに來るのは甚だ面白い。哈爾賓は明るい氣分のする町である。全く洋風と言つても過言ではなからう。あの逞ましい立派な體格の露西亞人に引較べて我が身の貧弱さを痛感する。哈爾賓に居る露人は多くは帝政時代の大官であつた者が革命に依て住家を失ひ異鄕に流浪して來た人々である。それ故に彼等は理想も目的もなくその日〳〵を樂天的に暮し將來を考へて生活してゐる者は殆んど無いさうである。露の東方經營の策源地たりしこの地にして若し其大哈爾賓都市計畫が實現されてゐたなら實に驚くべきものがあつたらうが今では設計の跡を殘してゐるのみである。日露戰爭の際松花江の鐵橋を破壞せんとして遂に不幸敵の發見する所となり銃殺された沖横川雨志士の碑を弔ひその壯烈な最後を回想す。八月二日正午過ぎ朝日新聞社の訪歐飛行機が二機飛來した。此の地の邦人は或は屋根の上に日章旗を立てゝ歡迎し或は着陸場へ駈け付けて之を犒ひ涙を流して喜んだ者もあつたと云ふ。此の市にある邦人小學校は實に設備が完備してゐる。恐らくは斯の如く整つた小學校は世界でも少い事であらう。

朝鮮銀行はその政策として滿洲に著名な支那各地の取引に金銀兩立を行はんとしたが結局支那の地では失敗し、滿洲には名目上の金銀兩立制が施行されて金銀何れを用ひてもいゝことにはなつてゐるが、實際に於ては結局支那商人との取引故彼等の本位貨幣の勢に押され殆んど金に依ることなく銀のみ取引に使用されると言ふ。此の政策のために鮮銀は幾多の金を費し結局失敗に歸したのである。

△靜かな夜に微風に吹かれ乍らカタ〳〵と響く馬車馬の蹄の音に未練を殘して大連に向ふ。長春にて乘換へ汽車は稻作水田や高粱大豆の栽培された滿洲大平原を氣持よく走つて行く。この高粱が大きくなり收獲の頃になると頻りに馬賊が往來し掠奪を壇にするのである。聞けば滿洲地方の馬賊程當にならぬ者は無く朝には將官の位置に誘惑されて降つて軍隊となり夕べには意を得ざれば忽ち兵器を奪ひて馬賊と化すと言ふ。それ故に支那の軍隊なる者は何れが眞正なのか不分明にして少くともその三分の一は歸順兵なりと。督辨の張氏も一時馬賊たりしを思へば吾人須らく馬賊の頭領になるべしとの教訓を殘さゞるを得ない。而して此の馬賊の絕えざるは彼等が或は阿片密培者と約して之が警戒の任に當りて莫大な報酬を受け或は人家を襲ひて千金を一擧に收める等所謂「濕れ手に粟」式の仕事を爲す故に、その活動期間が短くして而も、彼等の最も好む「飲む買ふ打つ」の三拍子に久しき間耽溺し得るからである。由來支那人の頭に國家的觀念の濃厚ならざるは同國興亡四千年の歷史的沿革與つて力ありと言ふを得べく殊に文化に後れたる北滿地方の一般支那人氣質とも稱すべきは其國體が君主政體なると共和政なると又爲政者の誰たるとに論なく唯々人民に對し都合がよくて生命財產の安固を得ればそれにて足るとの考を有する事である。從來壓迫誅求に

遭ひたる彼等は軍隊官憲を見ること蛇蝎の如く兵は兇器なり「好人不當兵好鐵不打釘」と稱し一般苦力に至る迄「兵卒となる迄未だ罰が當つてゐない」と稱し兵卒となる事を嫌避すること甚だしと言ふ。この故に一般人に取りては官憲軍隊よりも彼等の保護をなす馬賊と好を通じて事を爲す者多いのである。

△八月四日の夜大連に到着。滿鐵王國の根據地だけあつてアスファルトの道路は非常によく東京の道を思ひ浮べてその雲泥の差を痛感する。建築から文化設備何一つ不足する所なく整然として美觀を呈してゐる。是が一滿鐵會社の施設であることを思ふ時その勢力の偉大さに驚かざるを得ない。築港見學。棧橋は目下四の埠頭を有し尙三個の埠頭工事中である。一時に四十萬噸の貨物を收容し得ると言ふ東洋第一の大倉庫、三萬二千噸の大船も容易に入港し得べく一時に三十有餘艘繫留し得る港、目下工事中の東洋第一の石炭積込場等何れも唯々その素晴しい偉大さに驚嘆の外はない。大連を去ること二里餘の地に星ケ浦なる避暑避寒の地がある。一名大連富士を看にし前には蒔繪の如き數個の島ある長き灣あり毛氈の如き芝生の上に身を横へると全く仙境の感があつて今後の長き旅路を中止せんとか思つた程である。斯る樂園を控へ、又文化設備に氣候も緩和されると言ふ大連に將來旗上げしたいといふ誘惑を強く感ずる。支那街中の所謂泥棒市場なるものを見る。泥棒市場と言つても泥棒が澤山居る譯でもなく又泥棒を奴隷として賣買する所でもない。何處から出て來たか分らぬ樣な怪しい品物が賣買される故に此の名稱があるとの事。以前左甚五郎の作りし三井家の大黑蛭子の中一方が紛失せるが此の泥棒市場に出で某富豪の購ふ所となつたと云ふ。この泥棒市場なるものは支那の各地に散在してゐる。一攫千金を得んとする士は宜しく此處に來り堀出物を見付けるといゝと思つた。中央試驗所を見學し旅順に向ふ。先づ博物館及考古館を見る。此處には主として滿蒙の產物工藝品を陳列し傍ら各地の參考品が集められてある。就中考古館には大谷光瑞伯の出品になる數個の完全に近い新彊省地方に於て發見のミイラを始めとして、古典學上の逸品珍什が頗る多い。東拓經營の天日製鹽田を見學し紀念奉書帳に假名釘流の達筆を揮ふ。白玉山を第一として戰跡見物。此處の納骨祠には日露大戰攻圍軍戰沒將士の遺骨二萬七百有餘が納められてあると。案内人の說明に當時の激戰の狀を思ひ浮べ襟を正さしむるものあり。隣りにある戰沒將士の英靈を千歲に傳ふる爲に建てられし圓筒形鐵筋コンクリートの表忠塔は二百十八尺、一は納骨堂永代の燈明となり一は附近航海の照明燈となつて將士の不滅の功を輝してゐる。周圍の連亙せる山岳は凡て日露の戰に血と汗とを流せし所にして二百三高地を始め所々に僅かに小紀念塔が昔を物語つてゐる。彼の驍將コンドラデンコ將軍の戰死地として名高い代表砲壘である東鷄冠山の北保壘を見る。之は永久砲臺の一にして有名な地中戰のありし所今尙數條の殘壕の跡を嶺迄歷然として存し如何に此砲臺占領の爲に我が軍が苦心をしたかゞ覗はれる。兵器を持たずして敵の砲彈の的となりて身を犧牲にせしかの白襷隊の心情を思ひ浮べる時感慨無量にして私達の學ぶべき所が多

々ある。この十年の長年月を費せし堅砲壘を占領する事に依て始めて陸軍は海軍と提携して旅順を陷落する事を得たりと云ふ。戰跡紀念陳列館は旅順要塞戰を紀念する物、種々の使用器具寫眞等ありて當時の苦戰を偲ばしめ、且當時臨時將校集會所であつた爲に彈痕を其の儘に存し紀念館として誠に相應はしい感を與へる。

△八月七日解纜の汽船にて大連に名殘りを留めて天津に向ふ。船室は蒸暑く三等なのでとてもやり切れないので甲板の荷物置場に出て際なき黄海の水を眺める。青黑い水と白河より流れ來る黄色の水との接合點も何時しか過ぎて八日の曉には船は白河を遡り水を押し切つて進む、進むにつれ浪が堤防のない岸を激しく打つ。河口を遡ること約四時間にして船は天津の埠頭に横付にされた。北京見物後再び此の地訪問の豫定でその日直ちに北京に向ふ。途中一帶洪水の所があり雨が降らざるにと不思議な感を懷く。

△北京に着して先づ五、六丈もあるか思はれる正陽門と三丈五尺五寸の高さの內城の城壁の偉大さに膽を拔かれる。北京は政治上の首府と云ふ外何等の特徵も無い灰色の市である。四日間に亙つて宮城を始めとして市街見物したが唯偉大と言ふ形容詞を以てするの外ない。之等の國寶とも稱すべき健物の壁に今度の排外宣傳の文句が夥しく書連ねてあるのを見て彼等の愛國心からなりとは云へ、何等方法を選ばずして爲すその非常識に驚く。この地に滯在中やつと支那貨幣の計算を覺えた。銀貨には一圓、二十錢（二角）、十錢（一角）の三種類あり前者の一圓のみは大洋にして後者は小洋勘定である。大洋一圓は銅貨二百八十四文、一角銀貨十二枚と銅貨七文、一角は二十二文と言ふ實に煩さい計算で、此の率も日々銀の相場に支配されて上下する故に私達には甚だ苦手であり且支那に來て金貨の價値が甚だ低いのが少々悲觀である。

△八月十三日再び天津に引返し野崎氏の斡旋に依り魯嗣香先生に會ふ。氏は昨年迄支那に於ける排日の巨頭であつたが一度日本を巡遊してより飜然悟る所ありて俄かに親日派となりし人である。排日今日迄の經過を詳細に亙りて聞く。その根本は要するに二十一ヶ條問題にありと。又野崎氏より支那商店の經營組織が共存共榮を根本主義として行はれ、例へば家賃の外に茶の水、書料の外に隨封、堵博に於ける寺錢、婦人の訪問の際の祝儀、食料品店の空壜、年賀及五、八、十二の各節季に友人親族訪問の際のチップ、商店の看々料及見本端布等は店員女中等雇人の雜收入としてその內ポケットに入るものにして月給は少なれども生活は安定であること、又月給の外に長支なる制度あり、之は必要に應じての臨時前借金にして年末の賞與金と計算せらるゝのであるが、長支金が賞與金よりも多くとも徵收されることのないこと、主人と店員との利益分配は資本勞働の率に應じて七對三或は六對四であり、商人は殆んど契約證書なくして取引をなすが面子を重んずること甚だしき故に、契約不履行に終ることはないこと等を聞く。斯の如く支那國は不統一なるに拘らず商人のみは共存共榮を發揮してゐるといふ事は私達日本人の一考すべき所だと思ふ。支那の

官公吏の月給は甚だ僅少にして之のみにては到底一家を支へ得ず、然るに尙一家の外に親族を寄食せしめて平然たるは辨公費なる事務費を横領する爲なりと言ふ。例へば督辨等は軍隊を額面上の數よりも實際は少數にし殘餘の分を自己の收入とす。又兩替の差等もその主なる收入にして、支那人が貨幣不統一の弊害を知るも尙改革斷行を爲し得ざるは一は此の兩替の差を收入とせざれば高官の生活安定ならざるが故である。天津にて恰も大病室の樣に床の澤山並べられた日本の錢湯の四五倍以上の建物の支那風呂に行く。彼等の生活の一部を知るには食事風呂芝居を見るのが最も手近である。此の地の日本租界は支那街とは接近してゐるが埠頭なる佛租界迄は二哩餘あるので甚だ不便である。然し租界は各國各々特色があつて其氣風が覗はれ市としては北京よりも整然として實に活氣がある。

△八月十四日天津を去りその夜北京から京漢線で南下する。二等のパスで廣い室に悠然と控へたのは誠によかつたが途中洪水の爲逆行せねばならぬ破目に陷つた。各驛で西瓜、果物、肉、卵等を一群が爭つて賣りに來るのは東支鐵道沿線と變りないが巡査が之を追駈けるのでこゝに滑稽な光景が見られた。京漢線では軍隊の跋扈は甚だしいもので一兵卒も豪然と一二等室に入り込んでゐる。而して屢鐵砲を提げた二三人の兵士が檢査官と共に横暴な態度で荷物を檢査にやつて來て癪に觸つた。之は阿片の所持の有無を調べに來るのである。豫定時刻より殆んど一日遲れて鄭州と漢口との殆んど眞中の明港と云ふ驛に來たら二時間餘の停車に會ひ面喰ふ。支那語は全然駄目だから英語でも話す者をと探したが誰も居ない。僅かに茶汲みの狡猾なボーイが片事交りの英語を話す丈で洪水有不通の外甚だ要領を得ない。遂に汽車は引返す事になり我々も之と運命を共にする事となる。ボーイが金をやらなければ話さず、或は下車しろと言つて威嚇の態度を示すのに憤慨して腕を擦る事屢に及んだ。漢口へ行くと云ふ十七、八歳の一少年との私達の唯一の武器なる筆談で、鄭州へ行けば日本人が居り三菱公司のある事を知り、其一家も其處迄引返すとのこと故行動を共にする。雨には會はず而も洪水の爲鐵橋が破壞されてゐるのを見ては如何に支那なる國が廣大で豫測し難い國であるかを感じた。

△汽車は十七日の午前三時頃鄭州に着いた。下車してこの時刻に何處へも行けないから少年の家族に從つて支那宿に這入つた。アンペラ丈敷いてある上には疲れてゐるが何うしても眠ることが出來ない。支那の宿屋は一般に室丈を貸すので蒲團はない。又食事も普通は外で採るのである。それ故に支那の旅行者は蒲團を始め一切の世帶道具を提げて行くのである。朝宿屋の主人と筆談し三菱公司は無いが、日本人は居る事を知つてやつと胸を撫で下す。此の地に來た日本人の世話を殆んど一人で引受けてゐる高原氏の許に御厄介になる。何れを向いても譯の分らぬ支那人の中で我が同胞に接した時は本當に懷しく且有難かつた。

鄭州は京漢汴洛二鐵道の接續點にあり漢口と北京の略々中間に位し經濟交通上より見れば我が國の名古

屋北米合衆國のシカゴに當る所にあり北部中部支那發展の中心である。禹貢の豫州の地にして古來文化の發祥地とも稱すべき河南省は我が本土と殆んど面積を同じうし耕作地面積は支那全省中首位を占め從つて農產物夥しく多くはこの鄭州より呑吐口たる漢口及青島に向ふ。主なる輸出品は綿花桐材桐油及農產物にして綿花は多くはこの地より北京間に栽培せられ蒐集及積出さる。その產額の約半分は我が紡績會社の使用する所なりと。又此の地に集る桐材の約七割は日本內地に輸出せられ吾人が支那桐と稱するものは多くは此の河南省產なり。又山西省を主とし河南省之に次ぐ石炭の埋藏高は實に現在世界の消費額の二百年間の量に相當すと言ふ。河南省には又鐵鑛の產が多い。鄭州は將來發展の餘地のある町であるが目下は軍隊の訓練地と云ふ感のする所である。人口約五萬古からの町とは雖も名所古蹟は極少く僅かに十一丈餘の開元寺塔が殘つてゐる丈である。邦人は二十五名程で之等の人々の住宅は皆支那式であるが、矢張り疊の上に寢る味は忘れ難く態々漢口から取寄せてゐる。甚だ少數なる爲共同の娛樂機關も集合所もないが個人間の交際は甚だ濃厚にして親戚の樣に親しいさうである。此の地は未だ何れの國の勢力範圍でもないから將來發展の好適地である。獨逸は英國の揚子江一帶の勢力附植政策に對しかの大戰に至る迄青島を根據地として着々黃河中心發展政策を行ひ來りしが不幸大戰の爲中止するの已むなきに至り之を繼承せる我國がこの政策に對し何等爲す所なかりしは甚だ遺憾の事であると某氏は話された。支那の軍隊は個別敎練を主とし團體敎練は等閑にしてゐる傾向がある。その個別敎練も一擧動づゝ敎へる故に不自然極まる姿勢を目擊する。曇日には傘を銃と共に脊に負つて歩いてゐる格好は又奇妙である。支那の巡査は銃を以て威嚇するが彼等の職分は交通整理にあるらしい。何處へ行つても交通丈は比較的秩序立つてゐる。やつと二十一日の午後徒歩連絡であるが汽車が動き出したので我が漢口租界の警察署長が開封よりの歸途にお伴をし、滿員鮨詰めとなつて南下して漢口に向ふ。

△支那は廣大である。某高官が支那國は亡びても支那國民は亡びずと言つたさうであるが實際四千年の榮ある歷史を有する國民は決して滅ぶことはないであらう。又法律は人の作つたものと言ふ考を持ち、彼等は人爲以上のあるものに生きんとしてゐる。或が是が所謂天命なるものかも知れない。政府が更迭しようと戰爭があらうと彼等に取りては對岸の火事である。斯の如く悠々自適の彼等が一旦自覺した時其處に必ずや世界をして驚嘆の眼を見開かしめるものがあるであらう。

鄭州を經て長江を下る

帝國大學　渡邊次郎

下關―釜山―京城―(仁川)―平壤―安東縣―奉天―(撫順)―長春―哈爾賓―大連―(天津)―北京―天津―(北京)―鄭州―漢口―南京―蘇州―上海―杭州)―長崎

偶然鄭州に遊ぶ

天津で魯嗣香先生に逢ひ、又裕大の慘事を聞いた我等二名は其の夕愴惶として天津を去り、北京に向ひ直ちにその夜の汽車で正陽門を發して漢口に向つた。幸ひ交通部から二等のパスをもらへたので物質的にも精神的にも非常に都合がよかつた。京漢線の二等車は數室に分れ、全部板ばりで、一室定員八名だが、我等二人で一室を占領出來、最大難關と目された京漢線も、容易に陷落したと思へた。

轟々たる列車は、夜の靜寂を破つて無二無三に突進する。

薄暗い電燈が只一つ白い光を二人の上に投げるのみ。天津で今迄見學を共にした一同に別れて、しみじみ遠く支那に遊ぶを感じつゝ過ぎにし一ヶ月の旅を思ひ浮べて、二人は、かたく默して寢についた。長い長い黃河の鐵橋も夢幻の中に聞き、連日の疲れに、ぐつすり眠込んだ。入口の戸は嚴重に鍵をかけておいたので、後顧の憂ひはない。一夜明くれば、汽車は既に、三千年來數多の英雄、豪傑の逐鹿の地、中原の廣野を走つてゐる。支那の廣いのは、實際驚くに足る。午後二時頃汽車は一停車場にとまつたまゝ、既に一時間を空しく過した。車外では人々が、かまびすしく、罵つてゐる。あたりの空氣は、只事でないのをつげるが、悲しいかな、言葉がわからぬ。突然今迄漢口行の汽車が、何の豫告も無く、(豫告があつたのかも知れねが)北京行となつて驀進し始めた。驚いて車掌を見附出して、英語でわけを聞いたが、元來此の京漢線は、佛國借款で出來た爲、車掌の知つてゐる英語は「ティッケット」「マネー」「サンキュー」位の物である。詮方無く隣室の支那人と筆談すれば「有大水不通。」といふ。開通迄には二三日かゝるとの事だ。生憎、此の列車には、外國人とては、我等二名の外、三等に露人が一人つきり。場所は全く支那の奥地、然し此の儘では、再び北京に行かねばならぬ。遂に「此邊有日本人乎。」と聞けば「日本人在鄭州。」と答ふ。鄭州には明朝つくとの事なれば、未知の同胞を頼つて、鄭州下車と決心した。時既に黃昏を過ぎて、あたりは、夜の闇黑にとざされてゐた。彼の支那人は中々の愛嬌者で、二三時間も筆談して無聊を慰めて呉れた。「你是那個人。」と問ふ。自分では一目日本人たる事が立派にわかると思つてゐたが。日本は好きかと聞いたら、「你日本國最講人義道德、我中國人最愚蠢」と謙遜した。かくて、八月十六日も暮れた。

逆行する事凡そ十二時間、翌朝午前二時半頃、鄭州驛に汽車は止まつた。日未だ上らず、支那中原のH字形の鐵道大幹線の交叉點なる一事を以て、僅かに記憶と結びついてゐた鄭州が、偶然の件に依り、忘れんとして忘る事の出來ぬ思出の地となつた。多くの支那人にもまれて夜半の驛を出る。驛前には、人々が群がつてざわめいてゐる。支那人以外の者は一人も居らぬ。只極度に痩せ衰へた犬があやしげな目附でストレンジャーを見守つてゐる外誰一人僕等に注意を拂はうとする者もない。僕は奮然道傍で話をしてゐる者を捕へて、「日本人は何處に居るのだ」と日本語で尋ねた。此の際下手な支那語や筆談をやつて、見くびられるよりは彼等の度膽をぬいてやらうと云ふ策略だ。彼は丁度汽車中僕等が支那人に話かけられた時の如く、聞えた樣な聞えない樣な、わかつた樣なわからない樣な複雜な顏をして、だまつて僕を見上げた。もう一度尋ねると彼は口早に不可解な支那語をさけんで、立上つて僕等の先に立つた。此の儘、驛前で日本人を待つ事も出來ず、闇の中を歩む事一町餘、古い一軒の家の前に止つた。長興樓と云ふ額がかゝつてゐた。後で樣子がわかつたが、支那宿であつた。その朝はアンペラ一枚の床の上に、レインコートを被つて何時とはなしにね入つた。野村君に起された時は、既に九時を過ぎてゐた。南京蟲の襲擊は幸ひ脫れた。次に又面倒な問題が起つた。我等は習慣上朝は顏を洗ひ口を漱ぎ又便所に行く。如何なる方法を以て彼等に此の意志を傳達するかである。手眞似もしたが、筆談もしたが、不可解な謎に違ひなかつた。僅かに顏だけ

は洗つて外に出ると二臺の飛行機が旋回運動をなして飛んでゐる。露國より日本に來る飛行機とか。ハルビンでは朝日の訪歐機を迎へ今又露國より吾國に行く飛行機を迎ふ。朝食もせず（支那宿は皆食事は附かぬ）宿の主人に筆談して僅かに高原先生あるを知り直ちに訪問する。すぐ面會して下され熱い歡待を受けた。そして開通までの宿を心より快諾された。計らざりき鄭州の地にて未知の同胞より如斯歡待を受けんとは。

其日は稀なる月明の夜であつた。皎々たる月光は天井の高いガランとした氏の居室に深くさし込んで居る。壁上には唯一葉の偉丈夫の寫眞があるばかり。河南督軍岳維俊の像である、我等は遠く異境にあるを忘れて支那酒をふくみつゝ夜の更ける迄快談した。氏は昂然として云はれた。自分は鄭州の發展を希ふ者の第一人者である。併し只單に自己の關係地なる爲めではない。先に獨逸では揚子江沿岸の英の勢力と平行して黃河沿岸卽ち無限の鐵石炭農產物を藏してをる靑島を起點とした中部北支那に進展上確固な地位を得ようと日夜努力した。今其後繼者の日本は同一目的遂行の任務が傳へられてゐる。此爲め此等地方の中心地鄭州に發展ある事を願ふもので、邦人が鄭州に於ての商工業上の權利を其掌中に確保するため不斷の努力を惜まざるものであると。氏は當地唯一の電氣技師で旅順工科學堂出身の人。其意氣の旺んな事其抱負の大なる事大に意を强うする所である。祖國遠く離れた支那の眞中國民の一顧さへせぬ地で如斯意氣抱負

を以て、來らんとする同胞發展の爲めパイオニアーたるに甘じ否其を天職として隱れたる努力を續ける氏の人格に僕等は深く感動した。鄭州は人口五萬邦人僅廿有餘人、北支那に於ての其地位は恰も日本に於ての名古屋、北米に於てのシカゴに彷彿たる運命を持つてゐる。此地は現在既に京漢汴洛兩鐵道の交叉點に位し將來北支那に於ける產業の開發、交通機關の完備と相俟つて各種工業の囑望すべきものが尠くない。此洋々たる前途を有つてゐる未開地で歐米人のまだ確固たる基礎を築かない時に率先して經濟的優越な地歩を開拓するは同胞の均擔しなくてはならぬ責務である事を感ずる。氏の談に接し誠に空谷に跫音聞く思なきを得ない。唯記憶すべきは此邊は桐材の大產地で其八割は日本に輸出され其八割は下駄になるさうだ。又胡麻綿の大產地である、綿花買付の爲め來てをられる森氏を三井事務所に訪ねたは其翌日である。其處には大きな倉庫もあり邦人が五人も一所に居られた。炎暑を外にし日暮るゝまで大いにテニスに興じ御厚情の風呂に入つて北京來の垢をおとし爽然として夕食の御馳走になり夜半まで語り合つた。翌日も汽車は不通である。炎暑は依然として續き濛々たる塵は路上も屋內も區別はない。田舍の支那人の生活を見學する爲め城內に入つたは森氏の御案內であつた。玄帝廟開元寺古塔があつた。洛陽は鄭州の極く近くである。折よく歸漢される漢口の警察署長に御伴を御願ひして、開通第一の列車に乘じて鄭州を去つたは其翌日の夜半であつた。僕は滯在中未知の自分を斯くまで歡待され出發の時は送つてまで下さつた同胞への感謝を述べなければならぬ。漢口着は其翌々日の未明であつた。京漢線は豫定の如く否豫期の數倍の難行であつた。

三　鎭見學

漢口は城の一方に長江に沿つて大きな租借地がある。三菱、三井、日淸汽船等日本も中々活躍してゐる。僕は三菱の先輩の御宅に宿めて頂く事にした。漢口は最も不健康地である。日中百度近くまで登つた寒暖計は夜半になつても二、三度しか降らず加之晝間長江より吹いた微風は全く止つて了ふ。僕等の來漢の晩は例の洪水をもたらした數日來の雨天でめつきり凉しくなつたと皆々非常に喜んで居たが僕等は戶と云ふ戶は全部開け放つて電燈を消して靜に籐椅子の上に横になつて腹で息をして金のかゝらぬ納凉法で一夜を過した。

「四千哩の長江の流一萬餘噸の汽船が通ふ
　見せてやりたい隅田あじ川舟こぐ人に」

と云ふ俗謠を聞いたが實に然りである。楊子江の偉大さは實に聞きしに優るものである。武昌、漢陽の見學には三菱ランチで江上を馳け廻つた。暑い〳〵十時頃漢口を出て話をしてゐる間に武昌の岸につく。渡場には汚ならしい人力車が六七十臺列をなして喧しい。城壁は相變らず獅子齒粉金剛石牙粉仁丹等の廣告

の競爭場となつてゐる。城内の入口に巡警の詰所があつて一一姓名を尋ねられ三名の護衛兵が從つた。名は護衛であるが實は監視である。第一革命の烽火は此城内に發せられ日本人の革命であつたと云はるゝ程多くの邦人が參與してゐたが、其後武昌は猛烈なる排日の中心となり外國人の入城は如斯嚴重になつたとの話である。石段の側には幾多の乞食が哀を乞うてゐる。石段を登り終ると此蛇山の江に沒せんとする一角で直下に水を瞰下してゐる。嘗ては江岸の壯觀たりし黄鶴樓も惜哉長髪亂の時全部烏有に歸し今は徒に樓趾のみ殘つてゐる。遺に古來の名勝で禹王の建てたと稱する碑其他詩文を刻した名碑が少くない。古の巍然たる樓の跡には人相見と寫眞屋のみ店を張つてゐる、周圍は俗であるが眺望は甚だ快濶で漢陽城外の晴川閣と相對して遙に長江を隔てゝ漢陽漢口の人煙を双眸の中に收める事が出來る。唐の李白が此樓上で友を送つて「唯見長江天際流」と云ふ名句を吐いた所である。沈吟多時漸く丘を下りて船にのり漢陽に向ふ。有名なる鐵工場のある所だが見學する事も出來ずせめて漢水でもと思つたが之も水が少くてランチが入らぬとの事で殘念ながら歸つた。漢口の地は長江と漢水との交流點に位して近くは湖北、湖南、河南、江西の沃野と連り遠くは陝西、甘肅の奥地と通じて四通八達水陸交通の衝に當り、古來九省の會、四鎭の一と稱せられ支那では稀に見る輸出超過の港である。日本公園で重慶を踏破した第五班の連中に偶然出會ひ奇遇を喜びつゝ共に漢口城内を見物した。

長江下航

其晩我等は日清汽船の鳳陽丸に乘つて長江を下つた。上海事件で長く杜絶せし長江の最初の便船とて大治を見學する事も出來なかつた。船は拂曉九江に着いた。町外に出ると潯陽江がよく分る。蘆荻柳楊の間を流れ行く樣は「楓葉荻花秋瑟々」たる昔の面影を有して奥床しい。再び江を下れば周圍の景色は濁流と小丘陵と無限の平野とで何等變る所もなく頗る無味乾燥である。僅かに白雲の彼方洛陽長安の天を想見して心を動かすのみである。北岸に項羽最後の地として人口に膾炙する烏江を望むや、江水は再び開闊する。左岸には江畔遙に小丘陵の起伏するを見るも右岸は坦々たる平野で堤など更にない。間々蘆荻の目も遙かに叢生して居る所もあるが立派に耕された處も多い。時恰も增水期に當り、折角青々と出來上つた畠も水に浸つて、岸近い農家では壁の下が二、三尺洗はれて水が其家の中を通つて居るのが多く見受けられる。船は微動もせず悠々江を下る。

廢殘の南京

江を下る事三五〇哩二日目の午前南京下關「バルク」に着いた。一先づ唯一の邦人旅館寶來館に休んで見學の準備をとゝのへた。南京見學は案内人はなく唯二人で馬車を傭つて地圖片手に終日舊蹟を巡つた。南京は古來南清統治の要樞であるが、歴史の都政治の都として知られた此地は現今は荒凉其物である。唯

北極閣は革命亂に關する好個の記念物である。武漢に起つた倒滿興漢の聲四方を風靡し南京も亦革命の白旗に蔽はれて滔々たる大勢復た奈何とも仕難く見へた時隻手を以て頽瀾を挽回せんとする意氣を見せた一箇の硬骨漢がある。此は南京巡防隊長提督張勳其人で北極閣は卽南京に革命黨の起つてから其軍門を移した所である。彼は此處に楯籠り全城の漢人を麕にせんず勢を示し遂に城內二〇營の舊兵を統轄して南京城を占領し屢〻革命軍を破り淸朝の爲め最後の光彩を發揮したのだ。有名なる孝陵は鐘山の麓の一小丘に據つて建設され甎垣を廻らし、陵域の廣大さは當時の壯觀を想像せしめるに足るのであるが、今は只管荒廢に委し殿樓概ね堙滅して墜瓦の狼藉たるものがある。墳墓は恰も城櫓の如く作られ登つて展望すると右に南京の市街を望み城壁蜿蜒其末は杳として行く所を知らぬ。壁外處々の水澤は荒蓼たる原野に一種の風趣を添へて前方微かに廢殘せる門柱を望んでゐる。石人石馬は此門から發して駢列して居る。揚子江の帆影も見える。征客俯仰此景に對して古今の成敗を思へば低回去るに忍びない情がする。皆に滿ちた枯葉も之を拂ふに人なく、斜陽を浴びた紫金山顚高く唯一基の墓碑の赤く照らされてゐるのは卽ち南方の傑孫文が永眠の地なのである。

蘇州に遊ぶ

吾等は先を急いで其夜直ちに蘇州に向つた。午前二時着。すがすがしい朝の空氣を胸一杯吸ひつゝ遠い日本の居留地に向ふ。蘇州は古來「上有天堂下有蘇杭」と唱へて杭州と共に天下の樂園と稱せられてゐる。其昔伍子胥が吳王闔閭の爲めに築造した所謂姑蘇城は城外寒山寺夜半の鐘聲により我國人に宣傳されてゐる。夫差の臥薪による雄圖も勾踐の嘗膽の復讐の念の前には哀れ一炊の夢と消へたが爾來興亡幾百年荒涼たる光景轉た人をして懷古の情に堪へざらしめる。六百六橋と歌はれる程蘇州は水に惠まれてをる。純支那色彩を失はない夢に生きる舊都である。寒山寺楓橋を見て其夕再び上海に向つた。

西湖月明

僕等が杭州を訪れたのは九月二日偶然にも舊七月十五日であつた。僕も亦錢塘江の海潮と大運河南端との二事を以て記憶を結び付けてゐたが月明の夜船に乘じて西湖に浮び杭州は最も思出深き地となつた。西湖は四面連巒を繞らし湖畔には幾多の名勝寺觀があり古來支那文人墨客は十景を賦し三十六名蹟を擧げ之を賞せし程である、又湖畔に柳浪聞鶯と呼ぶ所がある。樹間に亭があつて春柳の枝が靜かに搖れるとき鶯の聲を聞くと云ふのであるが附近一帶は實に寂しくやゝ荒廢した亭は靜かな湖面に影を宿して居るのみ。湖上の三潭印月を賞し湖畔の岳王廟に彼の精忠を懷ひ畫舫に乘じて夕の湖上を歸つた。折しも明月雲間より出で湖を兩斷する蘇堤、陸岸と孤山とを相連ねる白堤、數奇を凝せる島上の樓閣亭榭、煙の如く風に靡く堤上の楊柳、幽邃閑雅の風趣に淡き月光を配し全く畫中に徘徊の思がある。船は白く照らされた寂寞たる

湖面に一條の波紋を殘して進みゆく。

懷江南祠　　白居易

江南懷　最懷是杭州　　山寺月中尋桂子

郡亭枕上看潮頭　　何日更重遊

湖中の一島にある蒼然たる一樓に登り月を賞しつゝ杯を擧げて夜半に至つた。地はこれ支那第一の名勝西湖、時は七月十五夜、酒は有名なる紹興の醇。樓は樓外樓とて古く詩聖の遊びし所である。

翌日は督軍孫傳芳の股肱沈儀氏に面會し雲隱寺を見て遠く錢塘江に至つた。毎年秋の大潮には潮が美しい瀑布狀をなして海より河に押し上る。江畔六和塔に登れば江は全く一眸の下にある。目前の紹興は春秋の時越王勾踐の都城、古來紹興酒を以て聞へてゐる、其東寧波は昔明州と稱し往時遣唐使の往來、唐船の渡來皆專ら明州を經由したもので唐宋の頃我留學僧の修業した古刹の現存するものが多い由である。薄命の才人安倍仲麿の乘船歸國せんとしたるも此明州、又元寇の時范文虎の率ゆる江南十萬の軍が舟揃へしたのも此附近で、倭寇の荒れ廻つたのも亦此邊より上海邊であると話をきかされた。

思出多い二ヶ月の旅を終へて上海を發したのは九月七日であつた。前日までの暴風もなぎて航海は至極平穩。連絡船上海丸は早くも其翌朝には長崎に着した。

上海に就きて述べんと欲する事は既に他人が充分述べ盡してゐる、唯記憶すべきは牢乎拔く事の出來なかつた長江一帶の英の勢力は今や新しき勢力によりおびやかされ鼎の輕重を問はるゝに至つた事である。其勢力は云ふ迄もなく我國の實力である、單なる戰爭中又は戰後短期の現象なりと一概に早合點するは早計も甚だしい。英の勢力は既に峠を越へ一方我國は旭日の勢なる事は識者一般の認むる所である。此旭日の勢こそ同胞の全く赤手空拳により始めて克ち得た勢力である、此處では何等政府軍隊の特別の保護を受けた事はない。滿州青島で失望した自分は上海に來て始めて我國民の眞價を知り得た。我國民は悲境に立てば益々反撥する國民である。自由競爭によりてのみ其眞價を益々發揮するを得る國民であると。

（附記）旅で最も悲しいものは旅費の欠乏でもない言語の不通でもない、唯其旅行地に關するに知識の欠乏である、くめども盡きぬ津々たる興味の幾重の世界を味ひ得ず空しく歸るはげに口惜しい限りである。

第五班

三峽四川の遊記

慶應義塾大學　福永哲彦

東京―(神戸)―上海(杭州)―漢口(沙市)―宜昌―(萬縣)―重慶―(漢口)―北京(萬壽山―明十三陵―八達嶺萬里長城)天津―神戸

三峽の險、大眼目は入蜀であるが、此の險を突破する事も、我が旅行班の一大コースである。屏風の如く巍然と聳ゆる連峯、奈落を狂奔する險灘、天下冠絶と稱するも宜なるかなで、李白、杜牧の靈筆を以つてしても、尙ほ至らぬと云ふに、況んや未熟の吾人が、如何に其の描寫に努めても、九牛の一毛にも至らぬであらう。

昨年の報告書にも、三峽の險は特に念の入つた描寫が見へて居るから、吾が及ばぬ筆で重複の記事も考へものと思ふから、なるべく重疊を避けようと思ふ。

宜昌重慶間は、航行で天下の難關と稱せられて居る、所謂三峽の險灘を首め六十餘箇所の急湍があつて、

濁流が巨渦をなして、激湍怒濤をなして居る。渦に二種あつて、旋出渦と旋入渦と云ふ。前者は、江底の凹凸に因つて、表裏二流の方向不同から生じて、最も怖るべき水流で、中心から湧出して四方に擴延する渦で、後者は、相反する二流の相擦過する爲め生ずるもので、𠂤字形の渦卷で、中心に窪穴があつて、中心に近づくに從つて其の徑を減じ、中心は水底に向つて旋入するのである。此の激流に落ち込むが最後、順序不同の流に依つて、木葉の如く弄弄されて、行邊不明になつてしまふ。シャンパンと呼ばれて居る民船でも、此のバツクカーレントに乘り込むや、木片の如く粉碎されるのである。上流で顚覆した者の溺死體が、日に四、五は流れて來るとの事である。

吾等が宜昌に到着して、其の翌朝日淸汽船の宜陽丸で溯航する豫定であつたが、丁度其の前日、四川省の內爭の爲め、宜陽丸の支那人ボーイが、彈丸の密輸入をする爲め非常ボートの中に隱してあつたのが發見され、問題となつて、出帆は一日遲れる事となつた。

三峽の險は往年はよく土匪が出て民船や汽船を止めて危害を與へたさうである。四、五年前の宜陽丸事件も、土匪が宜陽丸の船長を人質に、日淸を苦しめたそれである。船は彼等の襲擊を防禦する爲め、鐵板を張つて開閉が出來る樣になつて居る。

汽船は一千噸級のもので、激流の爲め一時間七節も進航しない。船長と水先案內の獻身的注意の指圖に